

有し、附近に蜜柑及胡桃園多し、日本人としては五年前大久保某なるもの、此地に借地耕作を爲したる事あり、是れ此地方に於ける日本人發展の端緒にして、現時の居住者は四年前よりの者多し、借地料はエーカー十五弗乃至十弗にして、水代は五十時一時間の給水一弗と定む、作地の三分一は野菜園にして、他は荷を栽培す、馬鈴薯は最もよく此地に適し、トメトリー、チエリーペー一また此地の特産なり、農園の發達の速かなる事、南加州中此地の如きは稀なりと稱せらる、日本人にして、土地を所有するもの二名にして、其面積三十一エーカーなり、現金借地の農家は十三組にして、面積三百四十エーカー、分配借地者二名ありて、其作地五十エーカーなり。

土地所有者

山西正次郎(和歌山縣)

一〇エーカー

北島徳二郎(和歌山縣)

二〇エーカー

市内には唯一の日本人旅館としてアナハイム旅館あり、商店及玉場を兼業す、養鶏園には高策某の經營に係る養鶏園一ヶ所あり。

『オレンヂ』美なる小都會にして人口凡そ三千あり、サンデアナの東北三哩の所にありて、太平洋電線路の終點なり、またサンタファイア鐵道之に通ず、今より五年前始めて日本人の此地に入りたる地にして、豆、馬鈴薯、苺、蜜柑を産す、日本人の農家九組にして、現金借地百九十一エーカーあり。

『ビユーナバーク』サンタファイア鐵道線路に添ひ、羅府より二十三哩を距つ、近時日本人の此地に入るもの少からず、アルハルハ、砂糖大根、セロリ、トメトリー、メロン、馬鈴薯等を産す、日本人の土地所有者は二名にして七十二エーカーあり、現金借地農家は七組、其面積千〇十九エーカーにして、歩合耕作者は一名二百エーカーあり。

土地所有者

木原 重一(熊本)

五二エーカー

田畑 某(和歌山)

二〇エーカー

『ラハブラ』ホイデヤの南五六哩の所にありて、また二三年前よりの新開地なり、土地所有者は二組百エーカーあり、現金借地農家は五組にして面積二百三十三エーカーなり、給水尚ほ充分ならざれども、所有地には、石腦油の産出する望みありて、地價頗る騰貴せり、農園地としては未だ大なる生産力を有せず。

リバサイド郡及びサンバナデノ郡日本人發展地の調査

リバサイド郡 其面積七千方哩にして、其廣さよりすれば、オレンヂ郡の十倍に當れり、サンデアナ山脈を以て西南オレンヂ郡に界し、直ちに東方に延びて、北はサンバナデノ郡に接し、南はサンデーゴ郡、イムペリアル郡に隣す、サンゼセント山系、サンバナデノ山系及サンゴルゴニオ山系其内に連亘し、地形一ならず、郡の西北部には、サンゼセント、ベルリース、ハメツト

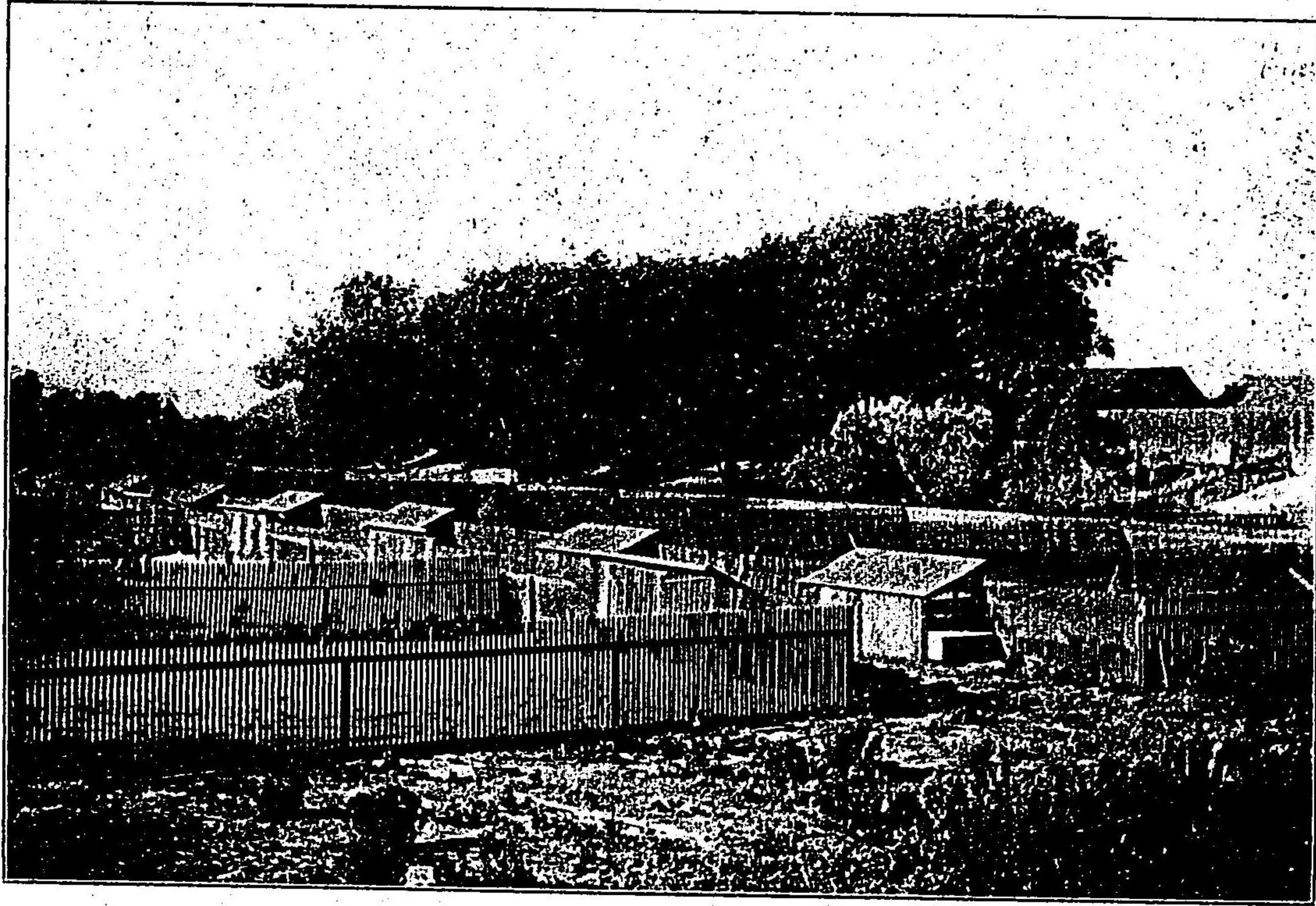
の平原ありて交通の便備はり、土地膏腴にして人烟稠密なりと雖も、東方の大部分は廣茫たる大沙漠地にして、氣候の變化甚しく、寒暑の差極めて大なり、殊にサンゼセント山脈の東側面は、傾度急峻にして、一千呎の山頂より急下して海面より低き事數百呎に至り、モザベの大沙漠に接する大平原を爲す、乃ちコチユラ平原と稱するものにして、從來不毛の地なりしも、米國式大灌漑法の施されてより、忽ちに生産力を現出し、葡萄、アルハルハ、瓜等の耕作盛に行はるゝに至れり。

地質同じからざるを以て産物の種類もまた雑多なり、然れどもリバサイド附近の蜜柑園は世界有名のものにして、南加州を知るものにして此地のオレンジ産地たる事を知らざるものなし、其他レモン、橄欖、アップリカット、桃、ブルム及葡萄を産する事多く、近時アルハルハの産出も頗ぶる多し、畜産の事業また盛にして酪農事業も之と共に非常の發達を爲し、山麓地にては養蜂業を爲すものまた少からず、其他サンデアナ河畔にコロナーの地あり、ヘメット湖の水を利用せるヘメット平野あり、エリシニア湖の附近にエリシニアあり、何れも農産物に富めり。

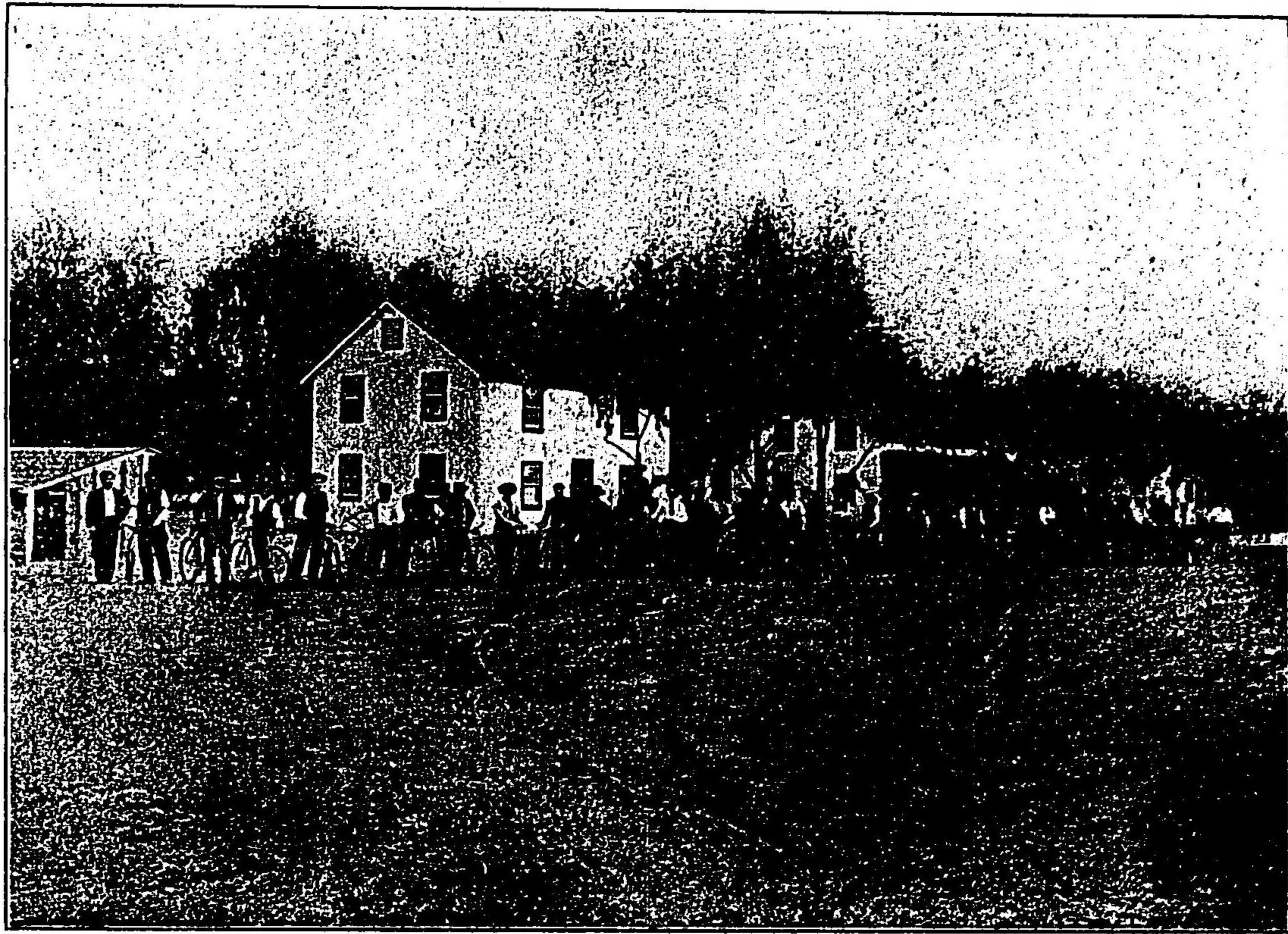
『リバサイド』リバサイド郡の首都にして、ローサンゼルス、東五十八哩の所にあり、人口一萬二千餘、サンタフィー、ソートレーキ、南太平洋鐵道の便あり、基督教徒の理想的都市として建設せられたるものにして、一般に酒類を禁ず、市街には電氣鐵道あり、土地清淨優美にして、南



族家成眞子金 市ドイサーバリ

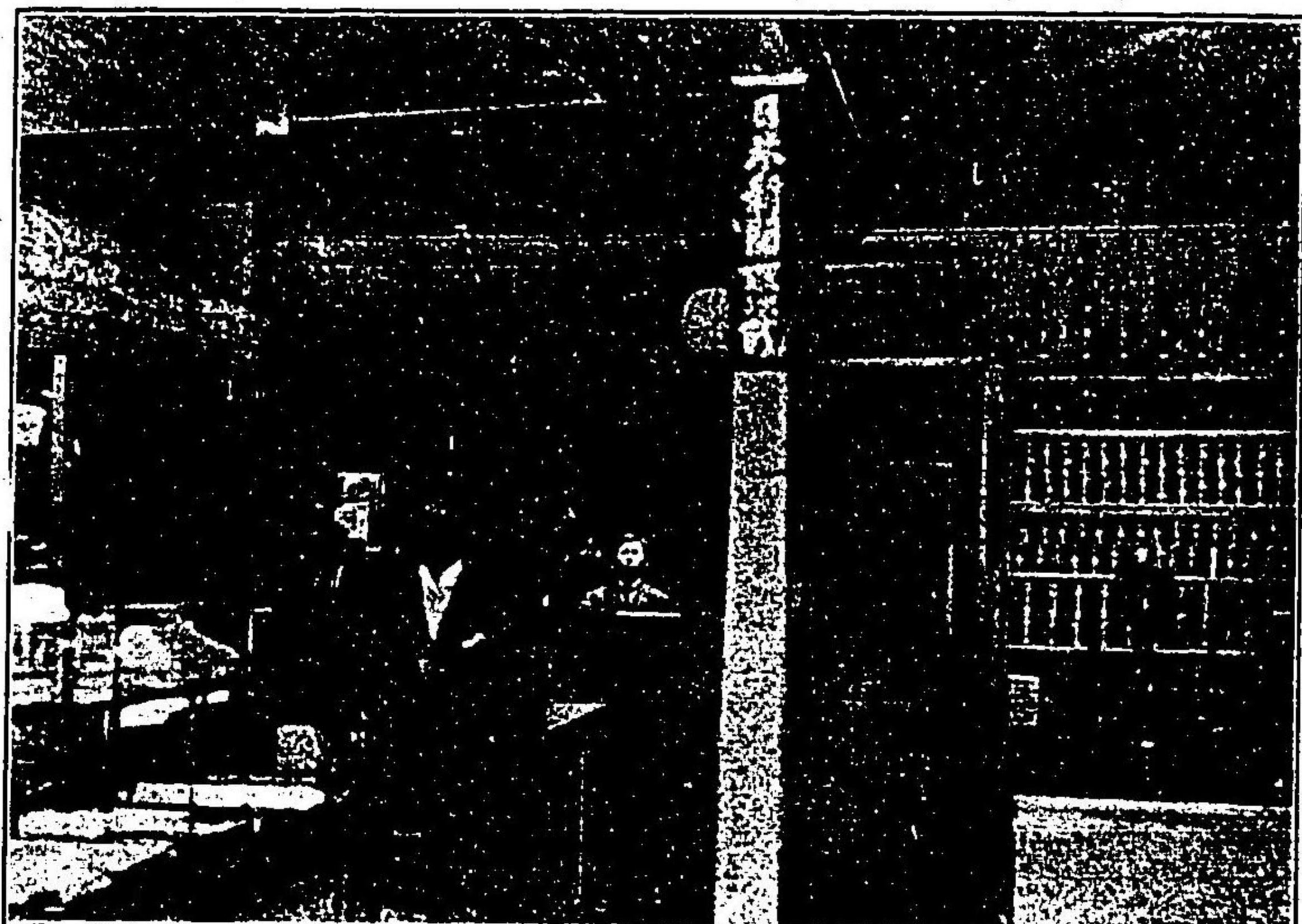


リバーサイド
田木邊下渡瀬太郎
經營の養鶏園

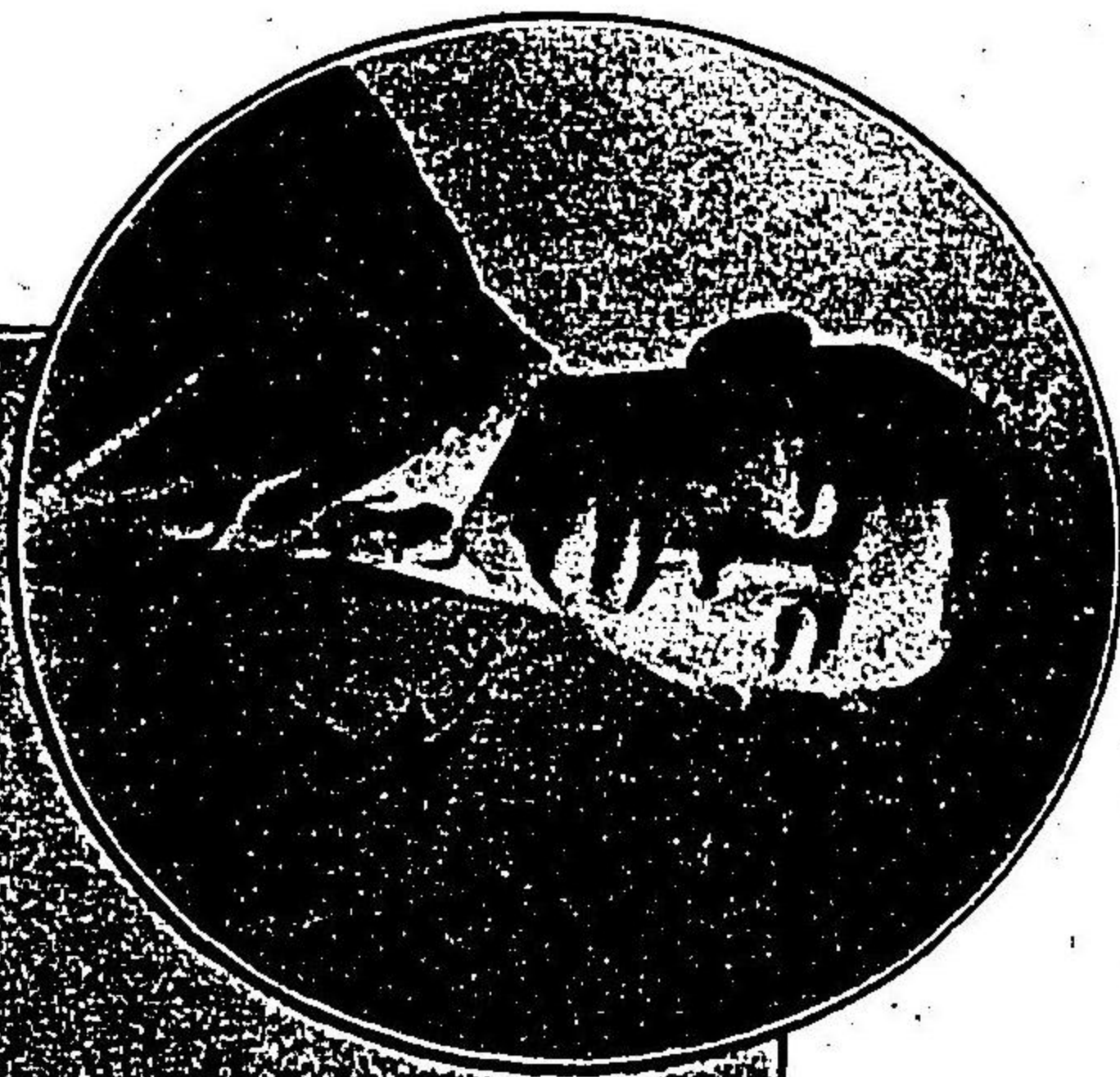


スイーポットの採摘柑蜜とプンヤキの養經耶太農邊田 ドイサーバリ

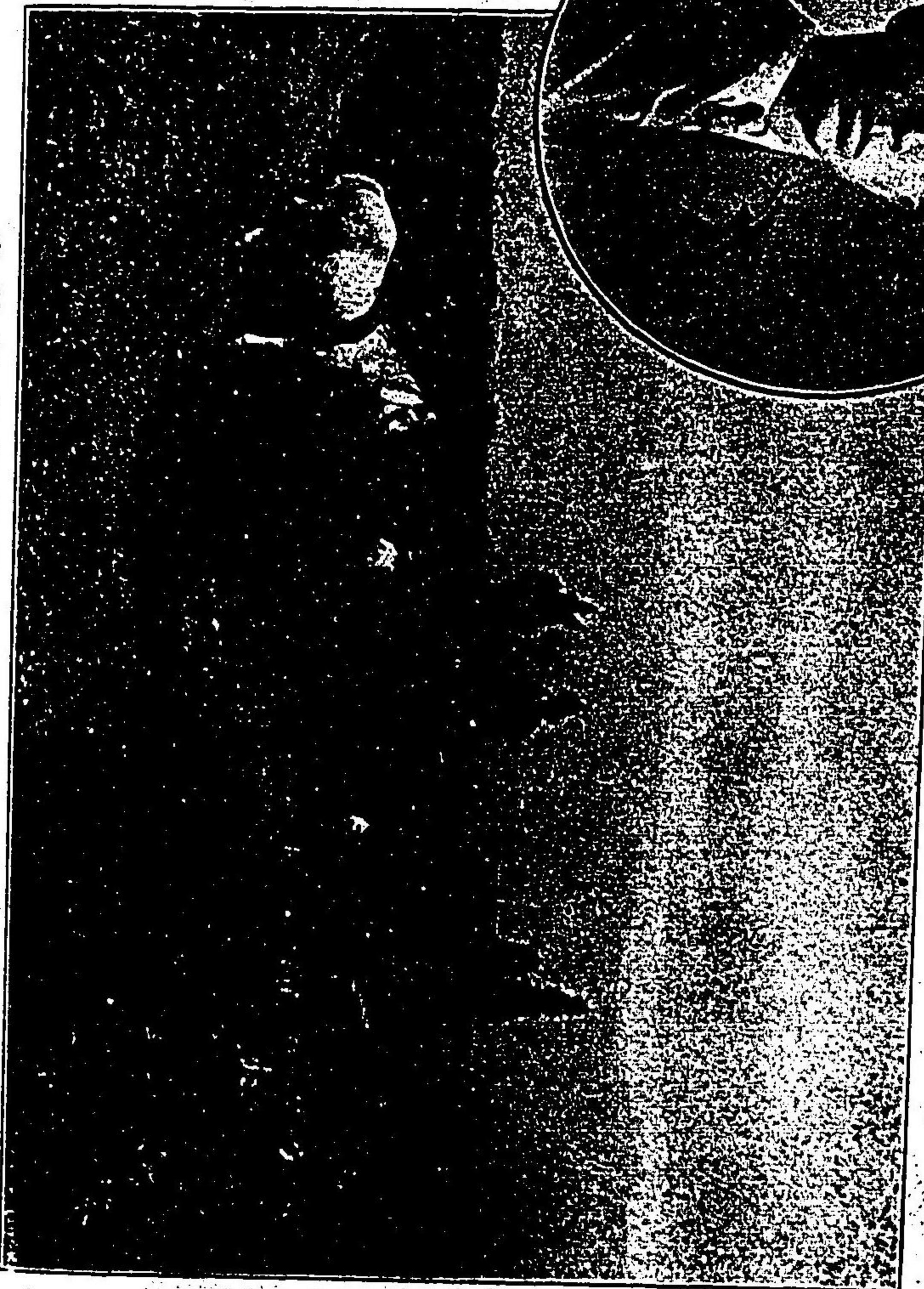
市ドイサーバリ ントンリーア 大和商會の内部



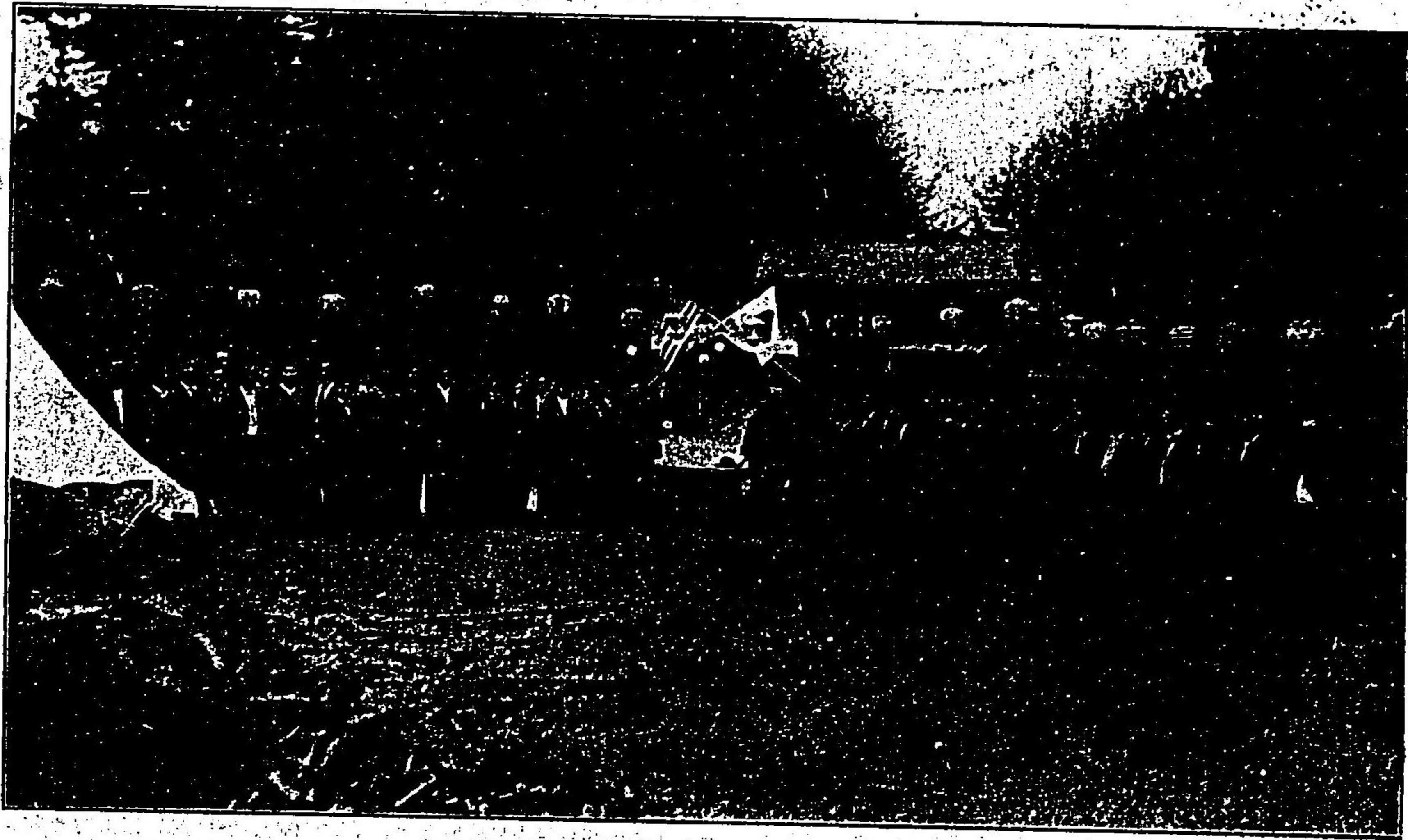
市ドイサーバリ 東四十街
 所務事給供者働勞の營經一豐第及一虎田業主店商田榮



右所部次初取森 波シラナイラア

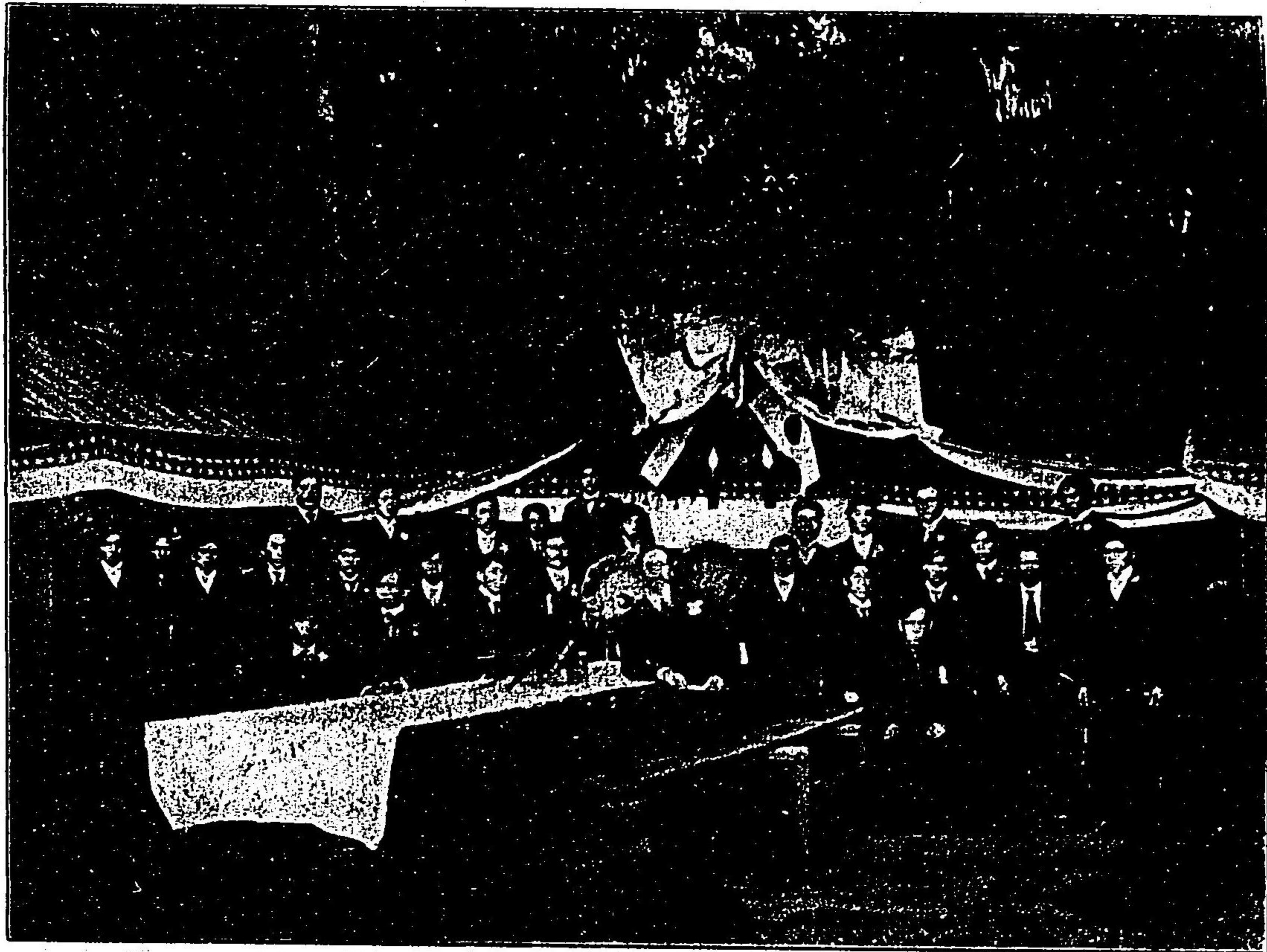


園柑園二十美町の全景



(格佐上三はるて立に側右ルブーテの央中で向) プンヤキの盛佐上三 ダンワナーエ

天長節祝賀會の光景

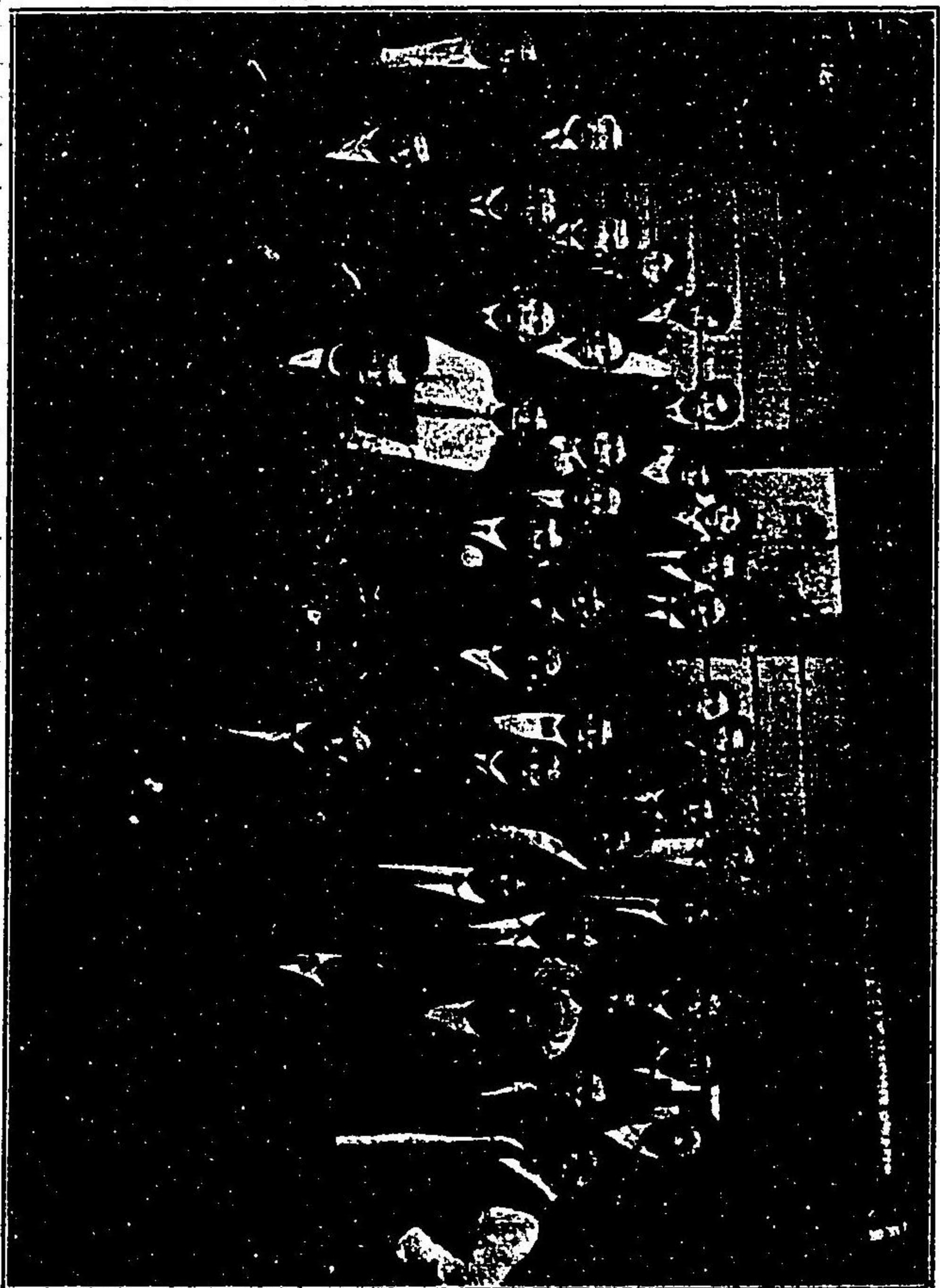


アツブランド 益田佐遠經營のキヤンブ



族家郡十宅本西 ドイサーバリ

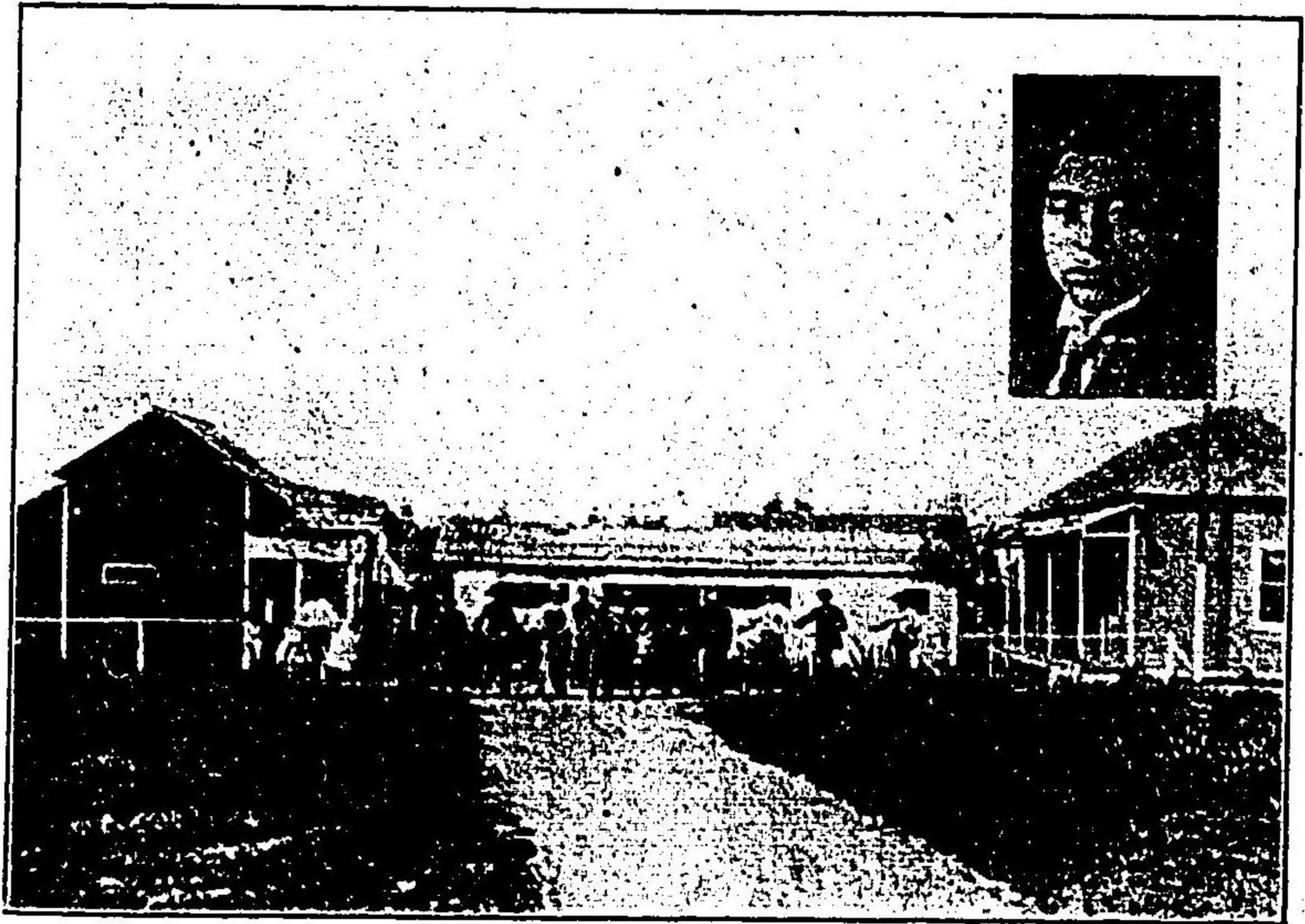
前二列目向て右より三人目 妹谷今作



シラポラソド 妹谷今作のキヤレン



久司喜一郎經營の養鶏園



スマデン農園契約者田吉伊蔵と其經營に關する田吉キヤン

加州中有名の都會たり、市の課税財産額八百萬弗にして、オレンジ及レモンの主産地なり、其周圍の蜜柑園は其面積實に二萬英町にして、其風味と形状と他に類なく、此地の特産として、東部米國及び歐洲に其名を知らる、一年の産額は六千貨車にして、二百三十萬四千箱に上り、其價額六百萬弗と稱す、而して園内の整理及び收穫時の摘取は近來悉く日本人労働者をして之を爲さしむ、園地への灌漑はハイドロップ、アーリントン、西リバサイド等を通じて完全なる溝渠を築き、自由に之を引用せしむ、此地の發達は僅々三十年前よりの事にして、今や人口に比例し、米國中最も豊富の地に數へらる、日本人の始めて此地に入りたるは十五六年前にして、始めは僅かに六人の労働者蜜柑園の働きに從事したるものなるが、當時メキシコ人及び白人の労働者は、武器を以て彼等を迫害したる事あり、然れども園主は此等日本人の労働者を保護し、後二年にして金子眞成此地に入りて漸次に白人の信用を得、午後日本人の此地に入るもの多く、明治三十二年廣島縣人山崎嘉二美以教會の設立に奔走し、遂に三ロットの地を買ひて會堂を建築し、其後星崎商店、大和商會等の食料雜貨店を開業し、蜜柑園労働の工夫を供給するに至れり、斯くて明治三十四年日本人會を組織し、現在の會員二百七十五名あり、蜜柑園の收穫期には日本人の此地に入り來るもの頗ぶる多く、無慮千人に上り、平素附近に在住する日本人を合して五百名あり、内妻帯者七十、小兒二十三名なり。

市内の營業には食料店五軒、旅館二、下宿業二、自轉車店二、洋服店一、玉場六、床屋五、魚屋二、飲食店三、豆腐屋二、洋食店二、醬業一、齒科醫一、美術雜貨店一、賣藥店一、書籍店一、果物店二、菓子屋一、湯屋三、桂庵一、掃除屋二〇、靴屋一、就中金子眞成のホラルゴールデンス
 テートは多く白人を止宿せしめ、室内完備せり、食料店としては株式会社大和商會及吉田屋商店最も取引高多しと爲す、土地所有者は三名にして、現金借地者三組百二十三エーカーにして、内野菜業一名四十エーカー養鶏園二ヶ所六十八エーカー牧草三十二エーカーあり。

土地所有者

- 大和 商會(株式會社) 三ロット 政岡榮一郎(廣島縣) 三二エーカー
- 礪山直吉(和歌山縣) 一ロット 甲藤音熊(高知縣) 三ロット(家屋付)
- 小泉秀之助(東京府) 三ロット 西本宅十郎(山口縣) 七ロット
- 柑園人夫受負業者
- 柴田兄弟(廣島縣) 板谷鹿次郎(岡山縣)
- 田部幾太郎(廣島縣) 大和商會(株式會社)
- 西本宅十郎(山口縣) 小泉秀之助
- 「コチユラ」 リバサイド郡の中央部、サンゼセント山脈の東にある平原地にして、サウサンバシ

フィックの線路に添ふ、近時日本人の此地に入るものあり、現金借地五十一エーカー、野菜及瓜を耕作す、然れども未だ同胞の發展地といふべからず。

サンバナデノ郡

面積二萬〇百六十平方哩にして、加州にて最も大なる地域を有すれども、其大部分は沙漠地にして、西南の一隅を除くの外、一はモザベの沙漠地に入り、一はコロラード沙漠の一部を爲す、西南の平野は乃ちサンバナデノ平原にして、其周圍は山地を以て圍繞せられ西方に向てポモナ平原と接續するのみ、東部は地質沖積土にして礫土或は砂土を交へ、西部は重暗色の壤土を爲す、此壤土は西に至るに従ひ次第に輕鬆となりて、ソトダ及びボッターズの成分に富み、サンバナデノ市附近更に重粘質を帯びて、ソトダ、アルカリ質の状態を呈す、モハベ河の沿岸にして水利の便ある所は、所々に耕作地の開くるあり、サンゴルゴニオの高山は、郡の南境に近き所に聳え、四時雪を戴き、夏季に達するや溶解して平野を下り、附近の園地に灌漑の用を爲す、故に此地方は南加州中最も給水に富める地方と稱せらる、始めサンギヤブルルに於ける西班牙の寺院は、支部をレッドランドに置き、其寺院を建設すると共に、土民を役使して溝渠を開掘したるが、此溝渠尙は現時の使用に適し、之に其後の工事を施して其長さ數百哩、水管並びに噴水井を設けて、サンバナデノ平原數千エーカーの地を灌漑す、低地は柑橘類を始め、桃、梨、杏、ブルーム、の果物を産し、蜜柑の産額は今や加州の第一位にあり、また西部リアルト、エチワ

ンダ方面及びモザベ沙漠の河畔は葡萄を栽培するもの多く、チノ方面には砂糖製造所ありて、附近二萬英町の地悉く砂糖大根園ならざるなし、此砂糖大根の製津を以て牛及豚を飼養するものもた少からず、山嶽地方は養蜂盛に行はれ、畜産業及酪農業また盛に行はる、ウイソクド方面には牧馬事業を爲すもの多く、穀類には大麥、小麥、燕麥を産し、アルハルハの産額また大なり。

『サンバナデノ』サンバナデノ郡の首都にして、ローサンゼルス東六十哩の所にあり、前世紀の中葉、モルモン宗徒の殖民せる地にして、サンタファイー鐵道會社器械工場を設置し、職工の此工場に労働するもの多し、サウサンバシフィック、ソートレーキ、サンタファイー鐵道の線路此所に集まり、市内に電氣鐵道ありて、レッドランド、ハイランド、コールトン、ウルビタ等に往復し、附近にハーレム、ミッドウエー、アローヘッド等の温泉ありて、浴客少からず、殊にアローヘッドの温泉は土地高くして眺望最も佳なり、此地方は相園に富めるを以て、日本人の労働供給地に過ぎず、市内の營業者は、乃ち是等日本人の需用を充すにゐるを以て、其發達自から程度ありて、大商店及び繁榮なる旅館あらず、郡内各地に散在する日本人は、約千人に過ぎずして、市内の日本人は百五六十人あり、小林洋食店は日本人營業者中最初の開業に屬し、今より八九年前の創業なりといふ、市内營業者には食料店一、洋食店二、日本料理店四、旅館一、玉場二、理髮店二、射的場一、洗濯業一、靴屋一あり。

『レッドランド』サンバナデノ市の南東六哩の所にあり、蜜柑園多く、日本人の労働に従事するもの少からず、リバサイドと類似し、清教徒の勢力強く、酒類の販賣を禁じ、風紀頗る清肅なり、之をサンバナデノ市に比すれば、自から市街の面目を異にし、氣候温和最も生活に適す、今より六年前、岡山縣人蜂谷今作六人の労働者を率ゐて此地に入り、漸次日本人労働者の數を増加し、明治四十年のオレンヂ收穫期には百二十人内外の人夫を供給するに至れり、此地の日本人もまた始めは白人労働者の迫害を受けたるも、銃器を準備して之に對抗し、以て日本人發展の基礎を固むるに至れり、市街營業者には商店一、洋食店一、玉場一、理髮店一、飲食店一、下宿屋一あり、附近に農園の經營を爲すもの二名あり、人夫請負者は三名にして、蜂谷今作のキャンプは最も多數の労働者を使用せり。

『ハイランド』レッドランドに近接し、獨立の發展地にわらず、蜂谷キャンプの支部を此所に置き少數の人夫を供給す。

『コールトン』サンバナデノ市の南三哩の所にあり、柑類類葡萄等を産出し、また製粉會社あり、鐵道の集合地なれども、日本人の在住するもの稀少なり、廣島縣人松本島一、木場喜三郎共有の果物園十エーカーあり、人夫供給受負業者として、元谷定太郎一のキャンプを有し、市街には理髮店兼玉場を有する營業者一人ゐるのみ。

「リアルト」サンバナデノ市の西に接し、今より五年前、和歌山縣人切石佐平、梅谷某等蜜柑園の勞働者として初めて此地に入り、現時日本人勞働者百人内外あり、切石は其後キヤンプを寺本某に譲り、其外梅谷、小西、藏田の三キヤンプあり、在住者には和歌山縣最も多し。

「ブルーミントン」サンバナデノ市より四五哩の西にして、明治三十五年の頃、神奈川縣人配島徳太郎十數人の勞働者と共に此地に入り、ジョージ、エム、カレスの農園一千英町の勞働を契約せるよりまた日本人の勞働範圍に歸し、平時十七八人より二十人内外の勞働者あり、土地降霜なく、最も蜜柑園に適す、給水料高けれども柑園として有望なるを以て地價頗る貴し、オリブ、蜜柑、レモン等を産す。

「アツブランド」ローサンゼルス郡に近く、サンタフィー鐵道線路に添ひて、土地高燥蜜柑の栽培に適す、岡山縣人直原敏平五年前より此地に入り、犬丸某また彼れと前後して勞働者のキヤンプを建てたるを日本人發展の始めと爲す、當時彼等は白人勞働者の迫害に遭遇し、屢々危険を蒙りたる事あり、犬丸は彼等の壓迫に堪えずして此地を去り、直原は獨り大膽にも彼等に抵抗して日本人の事業を此地に扶殖するを得たり、オレンヂ收穫期に於て、日本人勞働者の入り來るもの百人内外にして、土地所有者五名、人夫受負業二名あり、此地方普通の蜜柑園にして、其收穫年限に達したるはエーカー千弗内外にして、未開墾にして蜜柑を植つけ得べき土地は二十弗乃至百

弗なり。

土地所有者

森重初次郎(山口縣)	一〇エーカー	蜜柑園
直原敏平(岡山縣)	一〇エーカー	同
木村松南外	一〇エーカー	同
松本瑛吉	一〇エーカー	同
田中彦藏	一〇エーカー	同

人夫受負業者

直原敏平(岡山縣)	森光徳藏(福岡縣)
諫山定平(福岡縣)	柴田徳三郎(福岡縣)
田阪順吉(廣島縣)	平野太助(廣島縣)

「オンタリオ」ホモナより東六哩にして、オレンヂ、レモンの産地なり、明治三十八年和歌山縣人松本某、數人の勞働者と共に此地に入りたるを日本人侵入の始めと爲す、其翌明治三十九年廣島縣人山科彌一小浦侃一等と共に此地に入る、現時山科キヤンプに於ける日本人勞働者三十人乃至五十人あり、此地の發達は頗る近時に屬し、水力電氣の便あるを以て將來工業の發達地たる

に至るべし、其附近にチノーといへる地あり、此地より三哩の南にして、砂糖大根園の開拓せらるゝ地少からず、漸次日本人労働者の需用地たるに至らん、製造業發達もまた有望なりといへり。「エトワングダ」リアルトの西にして、ボモナの東十三哩の所にあり、蜜柑園多く、日本人の定住者四十餘名あり、土地所有者には日米農業會社の所有八十一エーカーあり、大抵蜜柑園なり、人夫請負業者として木村松南、三上佐盛山下某等あり。

「ビクトビル」エトワングダの南にありて、サウサンバシフィック鐵道の岐線あり、此地未だ日本人の發展地といふに至らざるも、今野某なるものヘイラン千三百二十エーカーの現金借地を契約し居れり、他には日本人の事業を見ず。

「キユーカモンガ」オンタリオの南に隣し、また蜜柑園多し、熊本縣人益田佐逸現金借地にて野菜園四十エーカーを経営す、他に日本人の事業を見ず。

附「オレンヂ」の事

加州に於ける蜜柑園は一種の光景を爲し、人をして其美觀に恍惚たらしむ、綠濃き蜜柑樹の間より、黄金の色鮮かなる冬期の蜜柑園は、白雪を戴ける山、其背景を爲す、蜜柑の栽培は固より利益ある事業なれども、之を他の事業に比すれば、永き年月と之に堪え得るまでの資本なかるべからず、土地は屢々耕されざるべからず、樹木は虫害より保護せられざるべからず、園主

は自ら之を爲さずんば、之を監督せざるべからず、其注意を怠ると怠らざるに因りて同一の柑園が非常なる差を生ずる實例乏しからず。

南加州ローサンゼルス郡は、全加州に於けるオレンヂの四分の一を産出す、此地のオレンヂは、フロリダ州のものよりも晚く、一月より四月の間に於て市場に出さる、此地方のオレンヂにてワシントン、チーヅルと稱するものは、米國の市場にて最も高價なるものにて特に市場に賞美せらる、實生のものは廉價に販賣せらるれども、産出の量は他より多し、其他メヂタラニアン、スイート、セントミカエル、ツアレンシヤレット、メルタブロード等の種類また多く産出さる、オレンヂに適する土地は、深き沃壤の砂石交りの地にして、日當りよき地を好み、植付の時期は春より初夏の間とし、接木とせるものは、五年目より利益を生じ、實生のものは八年目より利益を收め得べし、收獲を得る時期は十五年間にして、樹木は百年の生命を保ち得べしといふ、或接木師が十一エーカーの地に接木を栽培して、三年間の成績を表示せるものあり左の如し。

- 木 一本三十五仙 一エーカーに八十五本宛として 此價 二九七弗
- 土地拵へ及植付 九〇弗
- 年々の手入(毎エーカー二十弗として) 六〇〇弗
- 之に對する三年間の費用 九八七弗

柑園の手入は一人にて二十エーカーを適當と爲す、ローサンゼルス郡にてはサンギヤブレ、アッサ、ボモナバレーの地を重なる産地とし、リバサイド及びサンバナデノ郡のレッドランド最も有名なり、北部加州にてはバット郡に産出多く、中部加州にては主として、ツラレ郡に産出す、南加州は現時全米國中、最もオレンジの産出額多く、フロリダは付てオレンジの主産地なりしも、近年霜害のために其園地を破壊せられたり。

オレンジ郡成業列傳

△猪之瀬伊之助 茨木縣結城郡豊田村の産にして、安政五年生る、明治二十四年桑港に上陸して種々の家内労働に従事し、居る事四年にして南加州に來り、チノに入り白人の俱樂部内に労働する事一年餘、其貯ふる所の資本を以て、羅府東第一街にサンライズレストランといへる洋食店を始め、其弟榮吉と共に之を經營す、サンライズ洋食店は羅府に於ける日本人洋食店の濫觴にして、爾後十五年間、よく之を繼續して、現に榮吉の之を經營せる所なり、明治三十四年伊之助は洋食店の經營を弟に委するや、去てオクスナードに至り、白人の砂糖大根事業に參加し、ウエスタン、アグリカルチュア、コントラクトコンパニーの支配人となりて、此地方に日本人労働者の供給を爲すに至りたるが、會社と彼れとの間に結ばれたる契約は、労働者の満足する所とならずして、非常なる困難に遭遇し、遂に所謂オクスナードのユニオン騒動なるものを惹起し、事業

の全然失敗したるのみならず、彼れ自身また胸部に銃傷を負ふに至りたり、是に於てか一時の危急を脱してオクスナードを去り、靜養一年餘にして、明治三十八年一月スメルザに入り、始め十英町の地を借りて之にセロリを植え、他に九十英町を借りて馬鈴薯を作り、資本を投する事五千弗、爾後屢々天災に遭遇したるも、よく其艱難を経過し、今や此地方に於ける農業界の成功者とせられ、今より四年前一萬弗を投じてサンビードロ附近に十二ヶ所の土地を購買し、現時の價額三萬弗と稱す、目下五十エーカーのセロリを耕作して年々獲る所の利益少からず、是れ兄弟心を戮せ、二十年來一日の如く、苦戰奮闘せるの結果にあらざらむや、彼れ氣膽に富み、毫も艱難に屈せず、稜々たる研氣を有すると共に、細心の注意を有す、其經歷と人格よりすれば、彼の如きは南加州の人傑といふべき也。

△田和亥之太 岡山縣津那加茂村の産、明治二十六年ポートランドに上陸し、居ること一年にしてアイダホに入り、鐵道工事の事務を経験し、明治三十年桑港に來り労働の傍ら高等學校を卒業し、更らにビジネスカレッジに入學して其業を卒へ、其後一時南太平洋鐵道會社附屬倉永照三郎の下に屬し、工事務局の事務員となり、後ち支配人に擧げられたるが、南加州に於けるイムベリヤル平原の有望なるを開き、二百人の労働者を率ゐて其地に入り、借地を契約して瓜作を爲し、またサンファアランドのオリーブ會社に百五十人の労働者を供給し、布市に於て労働問題の起る

や、有志と謀りて労働者大會を開き、労働者のために奔走したる事あり、已にして桑港に貯蓄組合の組織せらるゝや其組長に推され、後ち之を銀行組織に改め桑港日本銀行と改稱するや、其副支配人たりしが、明治四十一年七月、之を金門銀行と合併するに至り、羅府支店長たりしが、明治四十二年三月之を辭してスメルザに入り、加州野菜業同盟組合日本人部の頭取役に推されて年俸千五百弗を支給せられ、傍ら日本人農會の副會長たり。

△矢野宇太郎 福岡縣三井郡大堰村大字三川の産にして、明治五年生る、明治三十一年グイクトリヤに上陸し、ユニオン炭坑に労働したるが受負契約者の一人、労働者の賃金を横奪して逃走し、加之矢野等の住るたるキャンブに火災起りて所持品一切を擧げて之を焼失し、非常の究境に陥りたることあり、是に於てコムスクの山中に入りて、道路工事に働くこと三ヶ月間、漸く八弗の金を得て僅かに其苦境を脱し、其後ワイオミング州の炭坑に働くこと二年餘、明治三十五年一月メキシコに至り、また炭坑に労働する事九ヶ月間、然れども食料の高價なるが爲めに、終日苦役に従事して而かも收支相償はざるの困難を生じ、遂に二弗の金を懐にして、其地を脱走し、徒歩四十六日間、漸く米國の境を越へて南加州ローサンゼルスに達するを得たり、其後漸く他の労働に従事し、明治三十六年十月スメルザに入り、爾後三年の間、或は農園に働き、或は溝渠開鑿の工事に人夫供給を爲して其監督者となり、漸次地方白人社會に信用せらるゝに至り、始めて十五

英町の現金借地を爲し、セロリを耕作して二千弗の利益を得、其翌年より二年間四人の共同にて百三十五英町のセロリを作りて二萬二千弗の收入を得たり、是に於て彼は其翌年より單獨にて百英町を經營する事四年、遂に六千弗の損失を見るに及び、其地は之を他の耕作に委して、己れは其歩合の分配を受くる事とし、自づからニューマークに養鶏業を始め、また別に八十英町の地を借りて之に麥を作りたるに、他に委したる百英町よりは千弗の分配ありたるに拘はらず、直接の事業は悉く失敗に歸し、資本金四千弗に對して收入千九百弗に過ぎず、是に於てニューマークの事業を抛棄して、スメルザに歸り、更らに六十英町の地を借り、馬九頭を使用し、セロリ及び甜菜の耕作に従事して今に至れり、現時の事業は之を以前に比して規模を縮少したりと雖も、明治四十二年度の收額少からざりしを以て連年の失敗を回復して再び事業の盛大を見るに至れり。

△本田虎一 愛媛縣西宇和郡川上村の産にして、明治十一年生る、三十二年渡米してタコマに上陸し、桑港に來りて學僕たりしが、一年にしてアラメダ郡の砂糖大根園の耕作を受負ひて二百弗の收入を得、それよりオクスナード、サンターナ等に轉じて、ますます大規模の砂糖大根園を経営し、一時は千四百英町の大耕作に従事したることあり、斯くて明治三十八年に至り、歩合耕作を廢し、一エーカー三十五弗の地代を拂ひて二百六十英町の借地を爲し、之にセロリを植えて六千

弗の收入を得たるが、其翌年は水害のために二百英町のセロリを流失して巨額の損害を被り、遂に三萬弗以上の負債を爲すに至り、若し普通の徒ならんには意氣沮喪また爲すべからざる悲境に呻吟すべきに、氣力の剛健なる彼は、平然として他日の回復を豫期し、明治四十一年度の農作には、地主に收穫の四分一を與ふるの契約を爲し、七百四十英町の砂糖大根を作りて六千弗の收利を得、忽ち前年失敗の幾分を回復して、翌四十二年は三百英町の耕作を爲してまた巨額の利益を得るに至り、現に三十一頭の馬を所有し、數十人の傭人を使用し、居然として此地方の豪農たり、彼れに此剛膽あり、前途の成功また疑ふべきに非ず。

△山本昇 和歌山縣海濱郡西脇野村の産にして、明治十四年十二月生る、父を山本七郎と稱し、祖父を紀本八幡と稱す、叔父山本秋忠は彼れの郷里日蓮宮の宮司たりといふ、彼れ其従弟平松六郎と共に宮山砲臺の請負工事を爲して五萬弗の損失を爲すや、慨然として北米の地に渡り、以て他日の捲土重來を期す、彼の桑港に上陸したるは、明治三十三年九月十日にして、爾後マテヤの葡萄園に働く事二ヶ月、ウインターの果樹園に働く事六ヶ月、其れよりエルクグローブに至り、フランスに至り、ソノマの鹽田に勞働し、轉々してサクラメントの川下に入り、デベール農園のハップスを耕作する事四ヶ年、それよりスタクトン方面を視察して南加州羅府に來り、暫く植木屋に入りて其事業の見習を爲したるが、遂にニューマークに百三十英町の地を借り、トメトーに

て三百餘弗、胡瓜にて五百弗の利益を得、別に胡桃園六百英町の勞働を契約して七百弗の收入を得、始めて、此地方に農業の基礎を建つるを得たり、已にして白人農業者の信用を博し、或は其委託を受けて其農園を支配し、或はソーガスの金礦に人夫を供給し、斯くて明治四十一年アナハイムの大農マツクレーの歡迎する所となり、彼れの農園百七十英町を現金千弗にて借地し、之に馬鈴薯、アルハルハ、蜜柑及び胡桃の苗木類を作り、馬八頭、荷車六輛を準備し、資本を投ずること三千弗、現に此地方同胞社會の成功者と稱せらる。

△西村茂彦 和歌山縣東牟婁郡勝浦村の産にして、明治十六年生る、三十二年渡米し、ヴィクトリヤより北加州櫻府の農園に入り勞働すること二ヶ年、一時フランスの葡萄園に働きたるが、更にサクラメントに歸り、ビグスの土地二英町を借りて之にブルームを植え、餘暇を利用して支那人教會にて英語を學び、明治三十五年羅府に來りてまた英語を研究して二年の歳月を送り、三十七年五月スメルザ江川有盛のキャンブに入り、半年間勞働したる後、七人の共同にて二百英町の地を借り之を經營する事三年、更に江川有盛と共同して五百三十英町の地を借り、之に野菜及びヘイを植えて盛に農業に従事す。

△大西忠哉 長野縣北佐久郡小室町の産にして、明治五年生る、曾て明治法律學校を卒業し一時故國に於て洋人の商館及び銀行に職を奉じたる事あり、明治二十八年砂市に上陸して桑港に來り、

新世界に筆を執りて操艦の業に従ふこと三年、其後一年フロリンの荷を作りたるも失敗に歸し、再び桑港に出で、アラスカ行き人夫の供給を、蛙鐘詰會社と契約して爾後労働者の供給を爲すこと四回、アラスカに於て日本人の労働者を使用したるは、是れを嚆矢と爲すといへり、彼れ其後東部に行き一時紐育に留まりしが、再び太平洋沿岸に歸り、明治三十七年南加州タルバートに七十六英町のセロリを耕作し、爾後農園の收利少からず、現に一萬六千弗にてサンデアナの地四十英町を購ひ、永住の計畫を爲して、此地方に重きを措かる。

△淺利鶴松 和歌山縣東牟婁郡池町の産にして、明治五年生る、明治二十六年十二月ウイクトリヤに上陸し、砂市、ポートランド、桑港等を経て種々の労働に従事したるが、それよりチバタ州に入りて四年三ヶ月を鐵道の労働に送り、其後加州に歸りてサクラメント及びフレズノの農園に労働し、更らにアリゾナ州の鐵道に入り、一時百五十人の帳簿方と爲りたる事あり、然れども氣候の酷烈なるを労働者紛擾の煩に堪えずして去て南加州に來り、トロピコの農園に労働したるが、其後キャンプトンの砂糖大根園に受負契約を爲して失敗し、三十二年スマルザの地に入り、セロリの耕作に従事すること三年、漸く地方に信用を得るに至り、淺利商店を開業して食料品及雜貨の販賣を爲し、傍ら玉場及び旅館業を兼ねて營業日に繁榮して此地に於ける日本人唯一の大商店たるに至れり、彼は此事業の外現金借地にて十五英町のセロリと三十英町の砂糖大根を作り、

馬十一頭を有し、家屋二棟を建築し、年々收むる所の利益少からず、現にヌメルザ日本人會の會計に推さる。

△山本正治 熊本縣天草郡下波深江村の産、明治九年三月生る、曾て濟々中學及び熊本高等中學校を卒業し、明治三十八年東京日本大學を卒業す、已にして渡米の志を起し、明治三十九年三月バンクーバーに上陸し、居る事二ヶ月、去て東部に行き、紐育に於て大學法科を卒業して法學士の學位を授けらる、然れども彼れ是等の空名に満足するものにあらず、米國の農業界、男子の活躍を試むべき餘地あるを見るや、自ら農業に従事せんとするの志あり、乃ち四十二年九月南加州ガードロップの地に入りて砂糖大根園の労働に従事し、四十一年十二月オレンヂ郡サンデアナの地に入りて福田清太郎と共に其地の農業に従事したりしが、福田の共同を去るや、獨力其農園を經營するに至り、現時現金借地二百エーカーと其他にサンデアナ殖民地二百エーカーを管理し、弟森一及び等共に兄の事業を扶けて之に従事す、森一は曾て濟々中學及び商業學校を卒業し、等も亦熊本中學校を卒業せるもの、兄弟三人、皆完全なる高等教育を受け、而かも梅風沐雨幾多の艱難と健闘して、協心戮力大陸的農業に従事す、是れ同胞社會の一快事と稱せざるべからず。

△茅野恒司 長野縣北安曇郡松川村の産にして、明治十四年生る、曾て師範學校を卒業し、次で東

京に出で日本大學に入りたるが、在學中感ずる所ありて渡米の志を起し、乃ち明治三十八年タ
 コマに上陸し、シャートルより桑港に來り、櫻府及び布市の地方を視察する事半年にして、終に
 南加州に來り、セロリ耕作の有様なるを知りてスメルザに入り、始め九十英町の地を借り、歩合
 耕作を爲して意外の收穫を爲したりしが、其後三人共同にて百八十英町の地を借り、年々セロリ
 を耕作して此地方大農業家の内に數へらる、現にスメルザに於けるフアーミーアংশション
 日本人部の監督に推選せられ、またスメルザ日本人會の副會長として、幹事を兼任す、フアーミー
 アংশションは白人及び日本人の共同して組織せる勢力ある農業組合にして、白人百八十
 人、日本人六十人の組合員を有す、以て此地方に於ける茅野の人望あることを知るべし。
 △寺畑一 長野縣南安曇郡有明村の産にして、明治十五年生る、茅野恒司と其郷里を同よし、
 また其學歷を等ふす、日本大學にあるや、茅野と志を語り、意氣投合して共に渡米を企て、タ
 コマに上陸せる以來、二人相伴ふて加州の各地を視察し、スメルザに入るや、三十英町の地にセ
 ロリを作りて年々其收穫少からず、深く白人社會に信用を有し、現にスメルザ日本人農産會の
 幹事たり。

△安武雪太郎 福岡縣粕谷郡新宮村の産にして、明治二年生る、三十二年布哇に來り、砂糖黍園
 に勞働する事二ケ年、三十五年七月、桑港に上陸し、桑港其他の地にて種々の勞働に従事し、三

十七年南加州に來りてスメルザの地に入り、翌年四月より三ヶ所にキャンプを建て勞働者供給の
 事業を爲し、傍ら十八英町の現金借地を爲して之にセロリを作り、其翌年は増して四十英町とし
 主として玉葱及びキャベツを作りたるに、兩種の作物、非常の豊作にして、市價もまた良價を唱
 へたるを以て忽ちにして資産を作り、現にスメルザ日本人會の會計に推され、また粕谷郡人會の
 會長たり。

△宮脇安松 和歌山縣日高郡印南村の産にして、明治六年生る、三十三年渡米して砂市に上陸し、
 鐵道に働く事一年半餘、三十五年六月桑港に出で、サンノゼを経て南加州に來り、オクスナード
 の砂糖大根園に勞働する事二ケ月、翌年六月スメルザ地方に入りて勞働すること二年半、明治三
 十八年ハンチングトンビーチにて三人共同にて日の出商會といへる食料雜貨販賣の商店を開きた
 るも、共同者の一人、八百弗を携帶したるを以て一時は破産の危機に瀕したりしも、宮脇の單獨
 にて此難關に當りたるを以て周圍の同情を得、遂に其難關を經過して業務の盛大を來し、四十二
 年六月タルパートに移轉し三千弗を投じて家屋の新築を爲し、商店の外玉場及び旅館を兼業して
 現時此地方唯一の商店として、同胞社會其便利を得ること少からず。

△森本長之助 和歌山縣海草郡野崎村の産にして、明治四年六月五日生る、明治三十年三月桑港
 に上陸し、間もなくワッソソンの地に入りて砂糖大根の耕作に従事する事五ケ年、此間に於て

得たる利益三千六百弗に達したるが、後ち明治三十六年一月視察の爲めにコロラド州ロッキン
 ホードに至り、大根園及び炭坑に労働したるが加州の有望なるを知りてローサンゼルスに來り、
 居る事三ヶ月、オクスナードの大根園百エーカーの耕作を契約したるが其際の利益は労働の貸金
 に相當するを得たるのみ、已にしてサンタポラ、レモニヤランチに労働口を得、四十人乃至七
 十人の労働者を入れて之を監督するに至り、其キャンプを経営する事二年半、其れよりアナハイ
 ムに來り、三十エーカーの地を借り、馬鈴薯十エーカー、グリーンペパー十エーカー、トマト十
 エーカーを植付けたるに、馬鈴薯は一エーカーに百サックを得、一サック一弗より一弗七十五仙
 を價し、ペパーは一エーカーにて八十弗より二百五十弗の利益を得、トマトは十五噸を得、之
 を一噸七弗にて賣捌き、グリーンメトローは一噸二十五弗より五十弗にて賣捌くを得、其他にカリ
 フラワを作りて、一エーカーにて百五十弗を得たりといふ、是れ彼れが初年の收穫にして、爾後
 家屋を建築し、永住的の基礎を定むるに至り、現にアナハイム日本人會の副會長たり。
 △木原米藏 熊本縣天草郡本道町字濱津の産にして、明治十三年生る、三十二年ツイクトリヤに
 上陸し、砂市に於て鐵道及ビンソールに働き、桑港に來りてスクールボーイたること暫時にし
 て、後羅府に來り、始め養鶏業を企てたるも、利益なくして終り、更らに野菜業に従事すること
 四年、六千弗の資産を作り、明治四十年アナハイムの地に入り、ミチガン州、デトロイト市のデ

一、エム、フエリー會社と特約して種子物の販賣を爲して巨利を得、乃ち一萬二千弗にて五十三
 英町の土地を買ひ、夏南瓜、胡瓜、マンメロン等を作りて年々の收穫少からず、弟を重一と稱し、
 兄弟心を協せて業務に勉勵し、隣人之を美とせざるはなし。
 △井上權九郎 島根縣邑知郡口羽村の産にして、明治三十三年タコマに上陸し、ポートランドに
 て二年間労働に従事し、其れよりサクラメント地方の農園にゐること一年、三十六年羅府に來り
 また労働者として働くこと一年、稍や經驗を得、貯蓄する所の資本を以て市の附近ロスフェルト
 ロードの地に、九英町の地を借りて之に苺を植え、翌年二十英町を加へて、廣島縣人香川一磨と
 共同し、苺の外野菜の栽培を爲し、經營四年にして其所を去り、オレンヂ郡アナハイムに入り、
 四十一年七月ビユーナパークに轉し、一英町十弗にて百五十英町の地を借り、翌四十二年更らに
 同郷人中村健一を加へ、三人共同にて三百英町の地を借り、甜菜及び野菜を作り、他に一エーカ
 一七弗五十仙にてローサンゼルス郡ビーウンターに於けるポールドウインの農園二百五十英町を
 借り、また之に甜菜を作り、馬二十一頭を有し、アナハイムに於ける大農業家として同胞社會に
 重きを措かる、現にアナハイム日本人會の會長たり。
 △高岡奎平 廣島縣安佐郡戸山村字阿戸の産にして、明治十六年生る、三十三年タコマに上陸し
 砂市を経て桑港に來り、其れよりネバタ州に入りて鐵道に働くこと一年二ヶ月、其後桑港フレス

ノ等の地に於て暫く勞働に従事せしが、更らにアリゾナ州に入り、ハベハウスの勞働に従事すること一年九ヶ月、それより羅府に來り、白人のホテルに勞働する事三ヶ月、漸く資本を作り、エリシヤン附近に三十英町の地を借り、井上權九郎、香川一磨等と共同して野菜園を經營すること五ヶ年、明治四十一年十二月に至り、オレンヂ郡ビユーナパークの有望なるを認め、百三十英町を借りて甜菜の耕作に従事し、明治四十二年の收穫九千弗にして、其四分を地主に納め、六分の利益五千四百弗は乃ち彼の利益として收め得たるものなり、現時十一頭の馬を有し、家屋を建て、妻を迎へて家庭を作り、此地方に於ける堂々たる獨立農家たり。

△池百松 福岡縣糸島郡今津村の産にして、安政元年生る、明治三十三年渡米してヱイクトリヤに上陸し、ポートランドに留まること三ヶ月にして、アイダホ州の鐵道に入り、働くこと三ヶ月、已にして加州に入り、桑港より櫻府に至り、一時農園にありしが、其後チーコーにて伐木に従事し、該地の豪農ジョンクラーチの信用する所となりて、其所のランチキーパーとして勤務すること實に九年の永きに至り、明治三十二年十月、一旦歸朝し翌年家族及び親戚知人の多數を率ゐて再び渡米し、ヱイクトリヤより桑港に來るや、サンタフィー鐵道會社と契約して人夫の供給を爲し、キノール附近に在ること數ヶ月、再びチーコーに至りて伐木事業を受負ひ、配下に五十餘人の勞働者を使役し、傍ら百餘英町の果實摘採を受負ひたるが、天災の爲めに巨額の損害を被

り、三十四年羅府に來り、フアーナンドロードの地に五英町の土地を買ひ、八百弗の資本を投じて養鶏業を起し、創業の際幾多の艱難辛苦を嘗めたるが、三十九年に至りては、鶏五千羽、家鴨二千五百羽、豚鴉鳥、七面鳥等を合して多くの財産を所有するに至り、明治四十年エスビー鐵道會社の買収する機會に乗じ、其所有地を六千三百弗に賣却し、飼養せる家畜も同時に賣拂ひて一萬四千弗を收め、此等の資本を以て、オレンヂ郡ビユーナパークに百四十英町の土地を現金借地し、甜菜及玉葱等を作りて此地方に於ける大農業家たり。

△小林甚之助 和歌山縣東牟婁郡田原村の産にして、明治十六年生る、三十七年渡米して直ちにリバサイドに來り一時パーキングハウスに勞働したりしが、其後羅府吉備商會及びボモナ森昌平のキャンプにて帳簿主任等を勤め、更らにリバサイドに至り、アーリントン果物會社に勞働すること一ヶ年、明治三十九年九月よりアナハイム 鐵詰會社に入り日本人勞働者の監督となり其部下に二十人の勞働者あり、傍ら桂庵事務を開業し、アナハイム日本人社會に於て前途有望なる人材と稱せらる、現に該地日本人會の幹事たり。

△鹽谷金槌 山口縣熊毛郡上關村の産、明治十五年生る、曾て故國にあるや廻漕業を爲し船を所有して石炭の運搬を爲し、または雜物商業に従事したりしが、明治三十五年十月布哇に渡航して砂糖黍園に勞働する事四年二ヶ月、直ちに米大陸に渡航を企て、砂市に上陸してノーミールに働

くこと爾後一年八ヶ月、それより桑港を経て南加州に來り、アナハイムの農園に勞働すること五ヶ月、偶々其地に於ける唯一の日本人旅館の經營者細川の其營業を譲渡さんとすることを以て、之を繼續し、傍ら玉場及び商店を開業して營業繁榮し、此地日本人社會の信頼する所たり、現にアナハイム日本人會の會計に推選せられたり。

△岩鶴鶴松 和歌山縣那賀郡田中村の産にして、明治五年生る、二十五年桑港に上陸し、バカビルの地に入り二ヶ月間の勞働を爲し、フレスノの地に至り留まること三年、其後ワツソンビルにて大根園の事業を經營したるも、三年間收支償はざるを以て其所を去り、南加州方面に來り、オクスナード及びローサンゼルス附近の農園に勞働する事暫くにして、一時バサデナ市の附近に電氣鐵道工事の勞働を受負ひ、配下に百人の勞働者を使用したるも、勞働賃金の減額せられたるに依りて、去て羅府に出で、資本金五百弗にて一の洋食店を營みたるも、また之を他に譲り、三十八年六月アナハイムの地に至り、三十英町の現金借地を爲して之に、唐辛を植え、其翌年三人共同にて七十英町を借りて馬鈴薯及豆を作り、盛に農業に従事す、彼れ在米已に十八ヶ年、種々の經驗を有し、永住的の農家として周圍の信頼する所たり。

△松井浪三郎 岐阜縣武儀郡瀬尾村の産にして、明治十一年生る、三十七年桑港に上陸し、國產社の店員たりしこと三年、其れよりオクスナードに來り、食料及雜貨店を開きて之を經營する

こと二年半、其後羅府に來り、次でアナハイムの地に入り、現金にて七十英町の地を借り、玉葱、馬鈴薯、赤茄子等を作り、翌四十二年は百英町の地を借りて唐辛、玉葱、キャベジ等を作り、資本金を投する事千七百弗、馬六頭を有し、住家及び納屋を建築し、永住的の農家として地方に信用を有せり。

リバサイド郡成業列傳

△金子眞成 南加州の人材たるや其經歷日淺きを常とす、獨り金子眞成に至りては然らず、彼は新瀉縣中頸城郡大瀨村の産にして文久三年生る、眞成五歳の時、鶴田峯州なるもの、養子となり、七歳東京に移る、其叔父彼を僧侶たらしめむとしたるも肯かず、十六歳の時郷里新瀉縣に歸り、石川光明等と共に彫刻を學び、更らに英語を研究す、偶々勸むるものありて海軍省に出仕し、調度課勤務を命ぜらる、然れども彼れ始めより官海に望を有せず、夙に志を海外に有し、時あれば大鵬一搏萬里の波濤を越へて大に爲さんとす、乃ち英國の宣教師某に就て基督教を學び、一日舊約全書翻譯の補助を爲すや、ヤコブの牧羊を爲す條に至り大に感ずる所あり、彼思へらく、米國には未開の原野多し、余以て埃及の野に於ける如き牧羊の事業を爲すを得べしと、乃ち之を牧師に諮る、牧師は彼をして英國エデンボルの大學に入らしめむとす、然れども彼れ之に従はずして、明治二十一年四月二十八日渡米の途に上り、五月二十八日桑港に着す、當時の同船者三十

一人、皆純然たる書生連なり、彼れ桑港のコスモポリタンホテルに留まる事三週間、マーケット街白人某の桂庵に依てサンノビ市の植木屋に備はれ、一ヶ月五弗の給料にて、一ヶ年間之を繼續し、此間勤勉と節儉とを以て此少額なる給料を貯蓄し、更らに同地小學庭園の修造工事を受負ひて、一ヶ月三十弗宛の収入を得るに至り、遂に故國より妻チヨ子及び長男義一を迎へたるが、其後クツクの見習として桑港某旅館に入り、出で、米國の新聞王ハーストの家庭に入りてクツクたること一年、更らにジョージ、ダブリユー、ミートなるもの、家庭に入り、六十弗のクツクとして働き、其妻女もまた二十五弗の給料を得て夫の勞働を助け、夫妻此内に留まる事四年間、偶々其主人ミート、南加州レッドランドの地に給水開拓會社を起すや、其勸誘に依り、レッドランドの地、一英町六十弗にて二十英町を買ひ、之にオレンヂの植付を爲し、また殘餘の貯蓄千六百弗を引出して、給水開拓會社の株を買ひて其株主となりしが慧眼果して過たらず、株券面五十弗としたる該會社の株券は、忽ち騰貴して百七十五弗となり、利益十五割の配當を受くるや、彼は一朝にして貳萬餘弗の資産を有するに至り、また其所有地よりは、オレンヂの苗木を賣出して、二千餘弗の利益を得、加之他に某白人と共同にて二百五十英町の借地に麥を作り、一人千弗以上の利益を見るに至れり、彼れ是に於て一たび故國を見舞はむとし、偶々市俄古に大博覽會あるを以て、夫妻相携へ之を見物し、桑港に出で、横濱に着し、錦衣を故郷に飾りたるなり、然れど

も世事變じ易く、禍福豫め測るべからず、彼の歸朝するや間もなくレッドランドに於ける給水開拓會社の資本は、支配人、ブラウンなるもの、ために、不正なる投機に利用せられ、會社は忽ちにして破産の悲運に接し、精算勘定の結果、株券の價額百弗のものに對し、僅かに一弗五十仙の賠償ありしのみ、彼れ故國にあること半歳、明治三十年再び夫妻の間、次男義雄を携へて南加州に歸るや、彼の所有地二十英町の地も、會社破産の影響を被りて、爾後六年間の訴訟事件を惹起するに至り、當時妻チヨ子は失望悲嘆の餘、遂に病床に臥す事一年、其健康に復するや、レッドランドを去りてリバサイドに出で、洋食店及び旅館を開業して、漸次其逆境を回復し、現にペヤベリに三百五十英町モリノに十英町の土地を求め、其他銀行及會社に出資せる額少からず、長男義一はレッドランドに於て洋食店を経営し、次男義雄は目下南加大學に在り、彼れ夙に米國に歸化し、白人方面に於ける信用の厚きことを留同胞中多く其比を見ず、リバサイド、サバナデノ郡の白人の事業家にして、彼の名を知らざるものなく、現にリバサイド市商業會議所の議員たり、リバサイド地方の同胞社會、常に彼を推して代表的人物と爲し、彼また意を盡して同胞社會の爲めに貢獻する所少からず、其語學に通じ、米人の事情に精通するに至りては、南加州中誰れか彼れの右に出づるものあらむや。

△柴田虎一 廣島縣双見郡三次町の産にして、明治元年生る、家代々染物業にして、地方の名家

たり、曾て廣島有田塾に於て漢籍を修め、少くして氣慨あり、曾て我國に於て養蠶製絲の業漸く盛ならむとするや、群馬縣高山蠶業社に入り、業を卒へて郷里に歸り、斯業獎勵の志を抱いて、三次地方の巡廻教師となりて、到る所、斯業の振興に努め、明治二十七年日清戦役の起るや、第五師團衛生隊第一野戦隊付となりて、傷病者の看護に努め、功に依て一時金を下賜せられ、凱旋後第二師團付となり、同師團衛生隊補充員を引率して臺灣に渡航し、其歸朝するや、似野島避病院付を命せられ、在職中其勞を慰し、畏き邊より特に酒肴料を下賜せらる、明治二十九年辭職す、是より先き、彼れ家を佐伯郡大野宇赤崎に移す、已にして山陽鐵道の開通するや、赤崎及び嚴島間の渡航に、蒸氣船を通航せしむるの必要を感じ、自ら計畫して小蒸氣船を建造し、此間の通航事業を始め、營業漸く盛なるや、廣陵の資産家早速勝三また此航路の有望なるを悟り、遽かに數隻の小蒸氣船を建造して柴田との競争を始め、早速の資力と聲望とは人の知る所にして、柴田の爲めには一の強敵たりしや疑ふべからず、然れども柴田の公共事業に熱心なるや、周囲の同情を誘起し、常に優勢を以て之を維持する事三年、遂に縣知事江木衷の仲裁に依て柴田は早速より三隻の小蒸氣船を一萬九千圓にて買取り資本三萬弗にて宮島渡航株式會社を組織し、自ら其支配人として業務に當りたるが、後ち時機の到來せるを以て、之を山陽鐵道會社に賣り、久しく外遊の志ありたるを以て、之を機として、其支配人及び小深川紡績會社、八田銀行の重役等の職務

を辭し、一年間の休暇に托して、明治三十四年九月渡米の途に上り、砂市に上陸して南加州リバサイドの地に入る、已にして彼は二十人の基督教會員を集めて日本人労働者の一團を造り、オレンジ園の労働を契約して、漸次に此地に勢力を造り、後ちコチユラの地に四十英町の瓜作を爲したるも、經驗なかりしを以て失敗に歸し、更らに八十英町の地を借り、再び瓜作を爲して市況の好況なりしが爲めに巨額の利を博し、明治三十八年に歸朝して翌年七月妻貞子を伴ひて再び渡米を爲し、直ちにリバサイド東第十四街に柴田商店を開業し、其他玉場及び契約事務所を加へ、義弟小西佐一、實弟柴田豊一をして玉場及び契約事務に當らしめ、自ら自轉車及書籍雜貨店の營業に當れり、彼れ金子真成等とリバサイド日本人協議會を組織して其名譽書記に擧げられ此地日本人發展の爲めに盡したる事少からず、現にリバサイド日本人俱樂部の理事たり。

△田部幾太郎 廣島縣安佐郡三笹町の産にして明治三年生る、二十七年タコマに上陸し、サンノゼに來りて労働すること五ヶ年、貯積する所少からず、三十一年十二月一旦歸朝し、三十二年七月再び砂市に上陸して桑港及びフレソノ地方に労働し、明治三十四年十一月リバサイドに來りて、白人シー、エム、ミユースなる富豪の内に働きたるが、其労働に熱心なる主人をして屢々嘆賞せしめたる事あり、已にしてミユースの土地を拓きて蜜柑を植ゆるや、田部は主人に告ぐるに其苗木を造るの得策なるを以てし、遂に之を實行せしめて自から其任に當り、彼をして巨額の

利益を得せしめたることあり、後ちミユースのアーリントンハイツ、果物會社の支配人に選定せらるゝや、ミユースは之を會社に採用して、所屬の日本人労働者を監督せしめ、始めは二十人の労働者を使用するに過ぎざりしも、其後百七十人内外となり、明治四十二年更に増して三百人を使用するに至れり、而して此等多数の人夫を收容する建築物は、會社が特に新築して之に貸與せるものにして、母屋四棟、倉庫一棟、商店二棟、其他附屬の建物數棟あり、之に労働者自身等の建築せる家屋を合して、宛然一個の小部落を爲し、商店、理髮店、自轉車修繕所等みな備はらざるなく、別に遊戯場の設備ありて、労働者は業務の餘暇、野球、蹴鞠、及び園芸等の娛樂を爲すことを得べし、此キャンプに於ける労働賃金は一日十時間働きて一弗七十仙とす、田部の爲人、温厚篤實にして、配下の労働者之に信服せざるなく、事務員菱田峯太郎またよく其事業を補佐して、絶へて紛擾を生じたることおらず、現時南加州に於て最大のキャンプと稱するも過言に非ず。

△西本宅十郎 山口縣玖阿郡柳井町の産にして、明治五年生る、明治二十六年桑港に上陸し、桑港市内及びサクラメント附近の農園に労働すること三ヶ年間、其後桑港サッター街に於て、サッター洋食店を開業したるが、之を他に賣却して、再びサクラメント市に至り、クックとして労働する事三年、それより南加州の有望なるを聞きて羅府に來り、居ること一年にしてリバサイドに

入り、蜜柑園の労働に従事せるが、漸次に園主の信用を得て、種々蜜柑園の労働を受負ひ、遂にキャンプランカにキャンプを設立し、契約せる地面千四百英町に達し、常に七八十名の労働者を使用す、キャンプ内には、また商店、理髮店、自轉車修繕所等を設けて諸般の便利を備へ、其位置は周圍に蜜柑園を廻らして、労働上の便利他のキャンプに優り、労働賃金は一日九時間にて一弗八十仙を給す、家は總て自ら建築せるものにして、労働に使用する馬四頭を有し、諸般の設備に四千五百弗を投じたりといふ、彼れ在米已に十七年、能く加州各地の事情に通じ、諸般の經驗を有す、先年妻を失ひ、三年前新に故國より迎妻し、一男一女あり、またリバサイドに於て相園受負契約業者の大なるものなり。

△小泉秀之助 東京府北豐島郡志村の産にして、明治六年生る、曾て商業見習として米間屋或は簾屋に勤めたる事あり、已にして海外壯遊の念禁する能はず、一たび英國船に搭乘して英國に至りたる事あり、其後渡米して桑港に上陸し、オークランドの基督教會に寄宿して諸種の労働に従事し、更らに桑港に居ることまた數月、偶々墨其西哥方面に漁業を企てんとし、明治三十三年四月墨領の一孤島に着したるが、不幸にして同志石田某の死亡したるに依り、備さに辛酸を嘗めて七ヶ月の後桑港に歸り、其年フレズノ、ハンホード等の地に労働して、終に南加州リバサイドに來りて蜜柑園に労働し、一時山口縣人村上彦輔と共に、此地に労働者のキャンプを經營したる

も、火災のために之を焼失し、三十五年トロピコに於て海作を爲したるも、また失敗に歸す是に於て再びリバサイドに歸りて暫く勞働に従事したりしが、三十六年ハイグロップの蜜柑園勞働を契約して、三人共同のキャンプを建て、後其組織を變更して、群馬縣人田島眞澄と共に之を経営し、以て現時に至れり、契約せる柑園二千英町にして配下常に百十數人の勞働者を使用す、明治三十八年チヨーチ街に三ロットの土地を購求し、之に間口三十呎、奥行三十六呎の二階家屋を建築して之に移り、翌三十九年歸朝して妻を迎へ、此年再び渡米して已に二男一女を擧ぐ、ハイグロップに於ける唯一のキャンプにして、リバサイド郡日本人成功者の一に數へらる。

△田島眞澄 群馬縣佐波郡島村の産にして、明治十二年生る、三十一年桑港に上陸して直ちにリバサイドに來り、間もなくハイグロップの小泉キャンプに勞働したりしが、三十七年一月再びリバサイドに出で白人の藥舗に勞働すること二ヶ年、更らに附近種々の勞働に従事する事一ヶ年、明治四十年八月小泉秀之助のキャンプに入りて其共同者となり、此地方の勞働界に重きを措かる、實弟田島堅固は目下南加大學の文科にありて孜々益雪の苦學に従事す。

△甲藤音熊 高知縣香美郡岩村の産にして、明治八年生る、三十二年五月渡米してタコマに上陸し、桑港に於て勞働に従事すること三ヶ年、其れより南加州に來り、種々の勞働を爲したる後、明治三十七年リバサイドに於て白人の家庭に入り、忍耐して三年間の勞働を繼續し、漸次に地方國より妻を迎へ、現に四人の子女あり。

△村上彦輔、落合喜一、村上是山口縣熊毛郡三丘村の産にして、慶應二年一月生る、始め西村彦輔と稱し、出で、村上前家を繼ぐ、曾て岩國東宗一、山口福永淑人の塾に入りて漢籍を學び、後ち東京に出で早稲専門學校の行政科を修め、明治二十三年第百十銀行支店の役員たり、已にして實家の兄死亡せるを以て、職を辭して郷里に歸り、生家の家事を整理すること三年、明治二十五年父また死亡せるを以て、其宿志を想起し、二十九年渡米して晚香坡に着し、該地の鮭漁に従事すること二ヶ年、病魔に襲はれて一時危篤に瀕したることあり、後ち砂市を経てポートランドに達し、鐵道の勞働に従事せんがためにアイダホ州の線路に入りたるに、當時白人の勞働者同盟罷工を爲し、其勢猛烈にして屢々危険に遭遇せり、乃ち轉じてワシントン州の支線に入りたるが、此線路もまた不穩の形勢あり、乃ち一同拳銃を用意してオーゲステルに至り、此所の勞働を果してチャックレットに出でたるに、白人の橋梁架設人夫十數人、爆裂彈にて同盟派のために殺せられ居たり、此等の被害者は屢に村上等の去るや、代りて其キャンプに入りたるものにして、村上等の去りたるは、爆裂彈破烈の前、僅かに二時間を出でざりしといふ、村上等は間一髪の奇禍を

の信用を得て、第八街に魚店を開業し、營業繁榮して忽ち資産を作り、二三年前、千五百弗にて第十三街に土地を購求して之に住宅を建築し、此地日本人社會の成功者と稱せらる、三十六年故國より妻を迎へ、現に四人の子女あり。

免れたるものといふべし、村上是其後ポートランドに歸り、南加州リバサイドの有望なるを聞き、明治三十二年十二月コーサンゼルスに來りて暫く市内の勞働に従事し、三十三年十一月リバサイドに入り、一年間を勞働に送りて翌年一ロットの地を買ひ、其後ネバタ州に入り、和蘭人の富豪某の家に傭はれてクックたること五ヶ月なりしが、此地方一人の日本人ならず、茫々たる曠野、寂寥の氣堪ゆべからざるものありしといふ、已にしてリバサイドに歸り所有地に家屋を建設し、蜜柑園の勞働を契約して數十人の勞働者を集め、商店を開きて食料及び雜貨を販賣し、營業漸く盛ならむとするや、火災の爲めに全部を焼失したり、彼れ是に於て一たびエトワングに至りたるも、またリバサイドに歸り、神奈川縣人加藤喜作と養鶏及び養豚の事業を始めたも、暫くにして之を廢し、明治三十九年佐々木勇の吉田屋商會を羅府に開くや、入て其事業を輔翼し、四十年村上是吉田屋支店の名義を以て、自ら資本を投じて、獨立の商店をリバサイドに開き、業務繁榮して、基礎漸く鞏固なるに従ひ、羅府の本店を之に合併し、廣島縣人落合喜一を共同者として、明治四十三年一月、東第十四街とハーワード街の角に新築の家屋を借り、規模を擴張して名を都商會と改め、盛に營業に従事せり、落合は廣島縣安佐郡三篠町の産にして、曾て廣島縣立工業學校を卒業し、撰拔せられて木工料の助教諭に任せられたるが、三十六年渡米して羅府に來り、吉田屋商會を譲り受けて本店の業務に當りたりしが、リバサイド支店の營業有望なるを以て、村上

と共同して之を一商店と爲し、現時の經營を爲すに至れり、村上のリバサイドに於けるや、在住日久しく、資性謹直にして人に城府を設けず、同胞社會彼を信用して常に地方團體の會計に推さる、彼の屢々災禍に遭遇して而かも其信用を失墜せざるものまた偶然にあらず、之に配するに落合の商才を以てすれば、都商會の前途豈に多望ならずとせんや。

△東徳松 和歌山縣東牟婁郡明神村字直見の産にして、明治五年十一月三日生る、明治二十六年四月十日、英領カナダに上陸し、シャートルに來り勞働する事一年、それより桑港を経てサクラメントに入りたるも、當時櫻府の地未だ一軒の日本人旅館あらず、乃ち直ちに山間の地に入りて伐木の勞働に従事し、其後ジョージメンケンの農園に働く事三ヶ月、轉じてワツソンビルに至り砂糖大根の首切り仕事に勞働する事また二ヶ月、已にして英語の必要あるを感じ、桑港に出で、スクールボーイとして、勞働の傍ら英語を學ぶ事一年半、二十八年一たびフレソノの地に入り、葡萄園勞働の受負を爲したるが、再び桑港に出で、スクールボーイとして業務の餘暇また英語を修め、明治三十年一月十八日、サンタフィー鐵道會社に於て、始めて日本人勞働者の傭入を爲すや、其募集に應じて南加州ラゲードに入り、其働さに従事する事三ヶ月、後ちローサンゼルスに於て家内勞働を爲し居たるが、偶々オクスナードの大根園に勞働者を要すると聞き、行て此激烈なる勞働を爲す事三ヶ月、終りてキユーカモンガに入り、井上昌の配下に屬して勞働を共にし、

相伴ふてリバサイドに來り、ゲーチャ 鐵話會社に勞働する事三年餘、此間會て一日の休息を爲さず、以て其忍耐力の強さを知るべし、斯くて明治三十五年井上昌、尾崎四郎と共同し、資本金二萬弗を積みて大和商會を起し、推されて其社長となり、以て現時に至れり、大和商會は食料雜貨の販賣を爲すのみならず、商會の名を以て附近蜜柑園の勞働を契約し、此等の受負事業を爲すを以て其主要なる營業と爲すものなり、本部をアーリントンに置き、其他に支部三ヶ所を置き、園地の業務多忙なる時に於ては、勞働者三百二十五人の多數を使用すといへり、東の社長たるや周圍を有し、現にリバサイド日本人會の副會長たり。

△木下彌一郎 佐賀縣杵根島郡武内村の産にして、明治十一年生る、父母商業を事とし、父は陶器類を鬻ぎ、母は小間物を販賣す、曾て相携へて天草島に渡航せんとするや、暴風激浪あらざるに、何の不幸ぞ、船は海中に破船し、慄れむべし彼等夫妻、僅かに九歳の愛兒を遺して不意に黄泉の客となれり、彌一郎幼にして此悲惨に遭遇し、夙に人生の辛苦を嘗む、長ずるに及びて機械製作業に従事せんと欲し、先づ長崎造船所に入り、技漸く進ひや、吳、佐世保、東京等の機關製作所に轉ず、已にして米國に於ける機械學の進歩せるを聞き、渡米して其技を研究せんと欲し明治三十四年三月桑港に上陸するや、先づ鐵工所を尋ねて之に入らむとしたるが、米國勞働者同盟の拒む所となりて容易に入るに能はず、是に於て月給十二弗にてスクールボーイたる事一年

十一ヶ月、已にして明治三十五年二月鐵工場内に同盟罷工起り、彼れ此際に乗じて漸く之に入ることを得たるも、場内の事情彼れの意に満たざるもの多く、一日前途の目的を考慮して大に悟る所あり、思へらく區々たる職工の技術、何ぞ所期の大製作を創立することを得んや、余れ先づ富を作り、以て最後の目的に達し得べきなりと、乃ちサンタローザに至りて長澤鼎に面會して其意見を叩く、長澤翁告ぐるに牧畜の有利なるを以てす、彼れ窃かに肯く、已にして明治三十五年十一月南加州に來り、ボモナ高等學校のクックたること一ヶ月爾後リバサイド、フランスノ等に勞働して漸次在米同胞社會の事情に通ずるや、成功の秘訣は、宗教に歸して、品性を陶冶して、以て周圍の誘惑と奮闘し、獻身的至誠を以て其勇氣を把持するに在ることを知り、意を決して基督教の洗禮を受くるに至れり、明治三十六年同志三人と共に、西リバサイドの地三十英町を借り、長さ七十呎、幅十四呎の鶏舎を作り、養鶏及び養豚の事業を始む、然れども其後火災のために鶏舎の全部及び家禽悉皆を焼失したるを以て、其共同を解き、爾後木下一人之を経営するに至り、田部幾太郎其志に賛して其共同者となり、現時二千羽の家禽を飼養し、南加州に於て盛大なる養鶏業者として人に知らる、事業創始以來、彼の遭遇せる困難、極めて甚しく、知るもの彼の忍耐を稱せざるはなし。

△蜂谷今作 岡山縣御津郡一ノ宮村の産にして、明治十一年生る、二十九年四月を以て英領ツイクトリヤに上陸し、ポートランドを経て、アイダホーに入り、居ること一ヶ月にして、去てワイオミングに入り、鐵道に働くこと二ケ年、それよりボカテラに至りて空しく一年を費し、一般労働者の陥り易き賭博の悪習に感染したるが、天性伶俐なる彼れにして、何ぞ久しく其愚を覺らざらむや、一日驟然として其過失を改悛し、爾後、奮て鐵道の労働に従事すること一ケ年、已にしてアイダホーに至り、五十英町の地を借りて瓜作を爲して失敗し、再び労働して漸く百弗の貯蓄を爲し、南加州エトワングダに入り、農作を試みてまた失敗し、三十六年十二月リバサイドに入り、大和商會の手に屬して労働する事一年、三十七年十一月レッドランドに於て、吉房清太郎と共に大和商會の支店を經營したるが、後ち之を單獨の事業と爲し、レッドランドにて四千英町コールドパークにて六百英町の柑園を受負ひ、之に百二十名の労働者を使用し、他に林檎園五十英町を受負ひて之に三十人の労働者を使用せり、現時レッドランドに於ける唯一のキャンプにして、事業の基礎鞏固なりと稱せらる、彼れ由來多病にして、渡米以來病床に臥して藥餌に親む事數回、屢々危篤に瀕し、種々の困難に遭遇したり、而かも常に其勇氣を挽回して、以て今日の位置を爲すを得たり、また一種の人材と云はざるべからず。

△森重初次郎 山口縣佐波郡富海村の産にして、明治六年生る、明治三十一年布哇に渡航し、一

年を砂煉黍園に働さ、耕地の受負事業を契約して、砂煉黍を運搬するに輕便なる車を作り、大に勞力を省き得たるを以て、七ヶ月間に千弗の利益を得、其翌年は之を資本として、三十エーカーの耕地を作りて二千弗の失敗を爲し、三十六年七月友人より旅費を借りて米國に來り、桑港に上陸するや、各地を視察する事二年、其れよりローサンゼルスに來り、附近の事情を察して、始めてアツブランドの有望なるを認め、代價六百五十弗にて土地十エーカーを求め、己れは日々白人の農園に労働し、其餘暇を以て自己の所有地を開拓し、之に蜜柑及びレモンを植付け、更らに其間に種々の野菜を耕作せり、彼れの土地を購買してより僅かに三年餘に過ぎざるも、今や美なる柑園となりて、間作の野菜のみにて、其實上げ一ケ年千五百弗と稱す、始め土地の開拓費に八百弗蜜柑植付け費千弗を要し、是に年々二百弗の水代を支出せるを以て、彼は過古三年間に於て、オレンヂ園の經營に二千弗の支出を爲したるのみならず、他にまた千弗にて馬四頭を求め、四百弗を投じて住家及び納屋を作り、外に五エーカーの地を借りて野菜を耕作す、徒手桑港に上陸したる一労働者にして、今や一萬弗の土地所有者となり、此支出多き事業を經營して今日に至る、彼は其經營に付て語りて曰く、白人の果樹園を經營するは、單に果樹のみを栽培すれども、余は果樹の間に野菜を栽培せるを以て、よく三年間の經費を支出し得たりと、是れ柑園經營者の宜しく鑑みるべき事にあらざらんや。

△三上佐盛 廣島縣生桑村字生田の産にして、明治八年生る、明治三十三年六月タニマに上陸し、サクラメントに入りて労働する事二年、已にして野菜園を經營し、洪水の爲めに失敗して、南加州ローサンゼルスに來り、一時オリーブ摘みに働きたる事ありしが、明治三十八年エチワングに入りて柑園の労働を契約し、傍ら四十二年一月より養鶏業を始め、現時六百羽の家禽を有し、契約地面四千エーカー、配下の労働者百三十五名、事業に用ふる馬四頭の外、農具等に支出せるもの千五百弗にして、一ヶ月の収入三百弗を下らず、此地方に於て、最も白人間に信用を有するものは彼れなり。

△益田佐逸 熊本縣下益城郡豊野村の産にして、明治五年生る、明治二十五年三月布哇に渡航して甘蔗耕地に働き、後ち貸馬車業を爲す事一年半、偶々米作の有望なるを認め、千弗の資本を投じて之に着手したるも、資本に缺乏したるを以て、之を抛棄して米國に來り、スタクトン及びフレスノ地方に労働し、一時十五人のキャンプを立て居たるも、事業の困難なるを以て、去てサンノゼに至り、暫く荷荷園に労働したるが、明治三十三年十一月ローサンゼルスに來り、それよりリバサイドに在る事一年、更らに市内の労働に従事する事二年八月、三十七年二月アツブランドの地にオレンヂ園の労働を契約したるに、同盟の白人労働者千人ばかり、武器を携帯して日本人の労働者を驅逐せんとし、來りて其備主を脅かし、拳銃を擬して之に迫りたれば、備主は

階段より墮ちて重傷を負ふに至り、益田等事の成すべからざるを知りて、キューカモンガに逃れ、遂に此所にキャンプを建て、以て現時に及びたるなり、平日配下の労働者五十人内外にして、彼は他の事業として借地四十英町を耕作せり、地方白人の信用を有する事厚く、資産を作ること少からずといふ。

△大西市次郎及吉田伊藏 大西は滋賀稻枝村の産にして、明治八年生る、三十二年晚香坡に上陸し、桑港を経てサクラメントの附近ウエズリーに入り、鐵道工事に労働すること一ケ年、キャストビルにてまた砂糖大根園の受負耕作を爲す事一ケ年、斯くて明治三十五年南加州に來り、シャーマンといへる地にて、支那人の野菜園に労働すること五ケ年、此際故國より甥吉田伊藏を呼び寄せて其労働を共にし、三十九年四月共に其地を去り、サンデマスに至りて柑園の労働に従事し、遂に弘間佐藤の共同經營に屬するキャンプを千三百弗にて買受け以て今日の大西吉田の共同キャンプを設立するに至れり、吉田は同縣愛知郡の産にして明治二十年生る、三十八年五月を以て布哇に渡航し、九月桑港に上陸して、直ちにワッソンの地に入り、二週間を苺園の労働に費して十月南加州に來り、シャーマンに行きて叔父大西と野菜園の労働を共にし、斯くてサンデマスに入り、三十九年十一月大西の歸朝するや、其不在中獨りキャンプの經營に當り、柑園の労働を契約して配下に九十人の労働者を使用し、二ロットの土地及び家屋を共有して、サンデマスに

於て最も盛大なるキャンプとして知らる、二人は此勞働受負業の外に、土地三十五英町を借りて之に野菜を耕作し、年々の利益また少からず。

△直原敏平 岡山縣久米郡吉岡村の産にして明治二年生る、曾て故國に於て大阪共同學館に學び、已にして自由民権論の熾なる頃、郷里に美作青年會なるものを組織して其牛耳を執り、後ち志を政海に絶ちて、山陽探炭社、大阪朝日木炭會社等の支配人たりしが、明治三十六年渡米して南加州に來り、オクスナードの甘菜園に勞働する事一年にして病を得、其漸く癒ゆるや、病後の保養を主としてアツブランドの地に入り、遂に此地方に柑園勞働の受負契約を爲してキャンプを設立するに至り、近年繁忙期には百五十人の勞働者を收容せり、四十年三月安藤某と共同にて十英町の地を購入し、現に之を所有す、天性温厚にして最も俳句に長す。

△山科彌一 廣島縣豊田郡沼田東村の産にして、明治十三年生る、三十三年布哇に來り、甘蔗園に勞働する事五ヶ年、明治三十七年桑港に上陸してスースン地方に入り、アモンズの摘採に勞働し、またナツバ地方に至り葡萄園に働きたりしが、三十八年よりシヤスタ地方及びサンタマカリタの鐵道働に従事し、其年八月南加州に來りてオンタリオに入り、蜜柑及レモン園の勞働を受負ひ、始め十數人の勞働者を入れたりしが、近年四十人以上を使用するに至れり、契約せる柑園は七百英町にして、他に種々の勞働を供給して、其利益少からず。

△配島徳太郎 神奈川縣足柄上郡櫻井村の産にして、明治十三年生る、三十一年桑港に上陸し、市内の勞働に従ふこと二年にして、南加州に來り、ブルーミントンの地に入り、ジョージ、エム、カレスの所有地一千英町の勞働を契約して、十數人の勞働者を使用し、オリーブ園、蜜柑園、ヘイランチの外、橄欖油製造所、酸漬橄欖製造所、パーキングハウス等の勞働あり、配島の此地に入りてより殆んど十年、未だ輕卒に事業に投資して失敗を爲したる事あらず、而かも年々の收益少からざるを以てサンバナデノ郡日本人社會に於て最も資産を有するものとせらる。

第七節 サンデーゴ郡及びインベリヤル郡

サンデーゴ紀行

(此紀行は著者の加州概畧の旅を終りてローサンゼルスに歸り、其後サンデーゴ地方視察の途に就きたる時に記せるものにして、前節三郡の踏査を爲してより一年三ヶ月後に成れるものなり、讀者時日のあまり後れたるを異まむことを恐

れ、之を辭す) 予の加州最南の都會として知られたるサンデーゴ視察の途に就きたるは、明治四十二年十月三日にしてサンタフィー鐵道の流車にて午前八時四十五分アカデヤ停車場を發す、リバー停車場を過ぎてより、ニューマーク、ラグナの平野に差しかれば、麗日照々として、農村の風景頗る快潤なり、胡桃の枯葉半は梢を謝して地に敷き、夏時の翠葉今は秋の深さを語るもの、如し、ロスニトスを過ぎてより、左にホイデヤを見る、附近の柑園鬱々として尙ほ青色を變せず、ラモ

ナダの橄欖は、山の麓より廣さ千エーカーに達す、ビエーナパークを経て、九時三十分汽車はフルトンに着す、此地は小丘の麓に位置せるオレンヂ郡の小都會にして、風景佳美なり、アナハイム、オレンヂ、サンデアナ等の地皆オレンヂ郡の都市にして市街整然、四望快濶、或は秋空に寺院の尖塔を抜き、疎林の間、煉瓦の建築層々たるを見るのみ、アルビン停車場を過ぐる頃より、サンデアナ平原漸く盡きんとして、附近は一帶の秣草園となり、車窓の右に遙かに山脈を認むる頃より、周囲の眺望は頗る單調となりて、ユカリタスの林も、果樹園の農家も眼界の外に逸して、黄色の丘陵、皆秣草園ならざるなく、エルトロの驛より、地勢次第に高く、樅樹の所々に生ずるあり、已にしてキャビストラノの驛に達す、此地は加州に於ける古きスパニシ市街の一にして、西班牙風の古寺、尙ほ過去の面影を残して、巨壁半ば頹れ、殘礎の荒艸に埋もれたるものあり、岡陵之を圍み、自ら静寂の地境を爲し、文人墨客の此地を訪ふもの、人事興亡の跡を想ひ、牧笛の詩情を惹かざるはなし、燈を擎げ、香を焚て、今尙ほ舊寺を守る老僧あり、是れ今より六十年前の寺兵の同胞にして、其小さき木造りの家に住める、太古の遊牧民に似たる土民は、是等僧侶の血族ならずんば、當時の印度人の子孫なるべし、彼等は自ら一族を爲して、そぞろ我國五家山中に於ける平家の餘族を偲ばしめずんばあらず、汽車の停車場に着くや、乗客は車中より其廢寺を見ることを得るなり、キャビストラノを去りて一の峠を過ぐれば、サンジュ

アントの小驛に達す、驛の前に無花果の熟し、石榴の花の少なく咲きたる坏、ふさわしき眺めなり、此所には西班牙種族の家散點せるを見る、セルラの驛より線路は、海岸に出で、蒼空清く晴れ、太平洋の水藍の如く碧なり、瀛車は波打つ際を走りて、波の音も手に取る如く、沖には二三艘の漁船あり、網を下して魚を漁するものなるべし、白雲所々に漂ひて南方の氣候自ら他に異るが如きを覺ゆ、二三の驛を過ぎて、十一時四十五分オーションサイドに着す、此地はサンデーゴとローサンゼルス間に於ける繁華なる海濱地にして緩き斜面の地に美なる邸宅あり、海水浴及び釣魚の爲めに來るもの少からずといふ、十二時三十分エンジニタスの驛を通過す、此地は西に小丘の横はるありて、一時大洋の光景を遮るなり、此地二三の陋屋あり、西班牙種族の住家なるべし、パンフィックビーチを右に眺むる頃より、海岸の光景奇趣を呈し、一海灣あり、半島其南に突出す、須臾にして此海灣を過ぎ、半島の根を横断して、再び巨灣の横はるを見る、乃ちサンデーゴの海灣にして、一帶の長岬、南より北に來り、灣内水廣く、サンデーゴの市街は丘陵に添ひて、此海灣を擁し、丹壁層々參差として櫛比す、灣内の阜頭は、大小の船舶、碇を下して帆檣林立す、寔に加州南部の海灣たるを知る、二時汽車より下り、半哩ばかりにして第三街に至り、參河屋といふ日本人旅館に投す。

此日午後市街を散歩し、街路を上りて市の公園に達す、園内に多くの針葉樹ありて、眺望の佳な

る所にベンチを設く、之に踞して四方を眺望すれば、サンデーゴの全市其脚下に開展し、コロナド半島、海灣を擁して其前に横はり、日は已に太平洋の彼方に傾かんとして、杳々たる烟波日光これに映じ、漂蕩として極りなからんとす、半島の上に高く旗標の翻るもの、是れ乃ち有名なるコロラドホテルなるべく、長岬の右に突出するもの、乃ちポイントローマにして、左は一帶の山脈、海に沿ふてメキシコの國境に連る、外洋の波遠く雲に接するの所、三個の島山あり、烟霞縹渺、淡々として畫の如し、此島海上四十哩の所にありて、メキシコ領に屬するものなりといふ頭を東に轉ずれば、幾多の岡巒起伏して、サンゼセント山脈、遙かに其眼界を遮るあり、加州の海岸風光佳美の地少からず、然れども其遠景の優婉雅趣に富めるは、サンデーゴに及ぶものわらざるべし、其海岸線の複雑なる、遙かにモントレイに優り、山光水色、優美の景致を爲すに至りては、或はサンタバーバラに超ゆるものあらむ、灣内の水面、長さ十三哩、幅半哩より二哩に達し、其面積二十二方哩ありといふ、コロナド半島は長さ八哩にして、其幅の最も廣き所二哩あり、サンデーゴと、コロナドとの間には、特別渡航汽船ありて、共に電車線路に連絡し、二十分にして交通する事を得、此地は加州に於て最も古き歴史を有し、最も西班牙時代の故跡に富めり、始めの市街は現時の市街地より二哩の南にありて之を舊市街といひ、または南サンデーゴとも稱す、今より百年前、西班牙時代に繁榮せる所にして、頽垣廢墟の所々に其舊時を偲ばしむる

ものあり、アルタカリホルニヤの最初の寺院、また其所に跡を留め、スタクトンの故壘、また其近傍に位置し、共に過去の歴史を追憶するに足れり、曾て此附近を領したる豪族、ドン、ジョン、バンデニの邸宅は、舊市街の中央にあり、之と相對して廢頽せる巨屋あり、是れぞ其昔、附近の富豪として勢力を振ひたる、西班牙人エスタデロスの邸宅なりしといふ、然れども今や廢寺の巨鐘、徒らに舊時の古色を帯び、荒草離々として只だ天涯の孤客をして、空しく眼を傷ましむるに足るのみ、余丘上に立ち人事の變遷轉た著しきに驚かずんばならず。已にして公園を去り、街路を下りて旅宿に歸る、此夜支那人街を見る、其附近に怪しき花街あり、紅色の電燈を點じ、窓に凭て濃厚なる脂粉を施せる賣春女頗る多し、是等のうちには、西班牙人、佛蘭西人、伊太利人あり、亞米利加人、黒奴、支那人、雜種人あり、日本人の醜業婦また七八人ありといへり、桑港、櫻府、羅府の地また此種の下等人類なきにあらざれども、近時其筋の取締り漸く嚴重となりて、公然彼等の醜業を許さざれども、ベカスヒルド及びサンデーゴの如きは、今尙は公然として彼等を跋扈せしむるなり、彼等の營業が曖昧なる許可の下にある丈け、其放縱にして不規律なる事、寧ろ我邦に於ける花街のそれよりも弊害多く、また其體裁の醜陋なる真に驚くべきものあり、米國の文明なるもの其裡而往々斯の如きものあり、歐米の文明必ずしも崇拜すべきにわらず。

十月四日 市内日本人營業者二三を訪問す、此地は未だ日本人街の體裁を爲さず、是れ市内に於

ける在住同胞の少きと、附近に日本人の農業地または労働供給地の乏しさに歸せずんばならず。

十月五日 此夜日本人會の幹事飯島敬一氏を森岡旅館に訪ふ。

十月六日 市内の調査を爲す。

十月七日 和歌屋旅館の主人山本氏、馬車にて余を伴ひ附近の農業地を視察せしむ、午前七時出發す、朝氣清爽馬蹄頗る輕し、市街を離れてより山野の地、人家の所々に點在するを見る、此地方は土地肥沃ならずして、地貨は礫質の砂土多く、樹木少く野草短小なり、丘陵を越へ、原野を横断して行く事五六哩、ラメサといへる部落に達す、和歌山縣人山本秀二郎氏を訪ふ、氏は白人の地所六エーカーを借りて苜の歩合耕作を爲すものなり、更に馬を驅る事三四哩にして、ポストニアの部落に達す、此邊の地葡萄園多く氣候炎熱なるを以て、フレンソの特産と稱する干葡萄を産す、此日暑氣尙は夏の如く、園地には葡萄の盤上に擲げて干燥さるゝもの多く、畑の傍らには印度人の小屋またはテントを張りて、髪黒く、顔色の日本人に肖たる男女數人あり、疎林を穿ち、一の阪路を下りたる所、板屋作りの家あり、入て之を尋ね、始めて岡山縣人山川仲助氏のキャンプなるを知る、氏は今や葡萄園に數人の労働者と共に葡萄の干燥を爲しつゝあるなり、就て事情を聞き、其れよりサンチーといへる部落に達す、此地は日本人の耕作を爲すもの五組ばかり、一二の農家を訪ひ、是より馬首を歸途に轉ず、途次再びラメサの澁谷氏を訪ふ、澁谷氏は昨

年米國のビジネスカレッジを卒業し、今や此地に入りて農業界に其基礎を建てんとするもの、時に日まさに成淵に没せんとして、談未だ盡さざるを恨む、然れども馬足已に疲れ、日暮歸途尙は遠きを如何せんや、乃ち別を惜んで去り、更らに塚崎氏を訪ふ、暫くにして出づ、暮色已に至り原頭まさに暗し、鞭を擧げ、馬を觸まして、午後八時參河屋に歸る。

十月九日、此日メキシコ領、下カリホルニヤ州に於て漁業に従事せる静岡縣人菊池治郎七氏を盛岡旅館に訪ひ、墨其西哥に於ける漁業の實況を聞く、氏は昨日メキシコより魚類を搭載して此地に入港せるものにして、太平洋沿岸の漁業に精通す、談話一時間餘、頗る該地の有望なるを語る、此所を辭し、夕方コルナド半島に遊ぶ、渡場より渡海汽船に乗り、十分間にしてコロナド半島に着し、直ちに電車に乗り換へ、ホテル、デルコロナドの前に至る、此大旅館は米國に於ける娛樂的設備の最も完備せるものにして、近く太平洋に面し、後は海灣を隔て、サンデーゴの市街と相對し、夕陽西に傾くや、連山皆紫色を帯ぶ、左にポイントローマを望み、右に半島の地峽を控へ、其西北にコロナドビームの市街ありて、別荘及び邸宅の優雅なるもの多く、また日本風の茶亭ありて庭園頗る雅致の趣を有す、ホテルは赤瓦、白壁、其規模頗る大にして、其輪廓極めて複雑なり、屋上には小塔あり、尖塔あり、望臺あり、背亮窓あり、是等種々の棟屋相合して、危然蟠居し、堂々として大空に聳ゆ、周圍には温帯地の植物其庭園を填飾り、廻廊は直

ちに海濱に向て通じ、更らにランツの市街と相往復する事を得、夏時は數百のランツ相并びて、所謂コロナードのテンツ市街を爲し、海水浴を爲すもの此所に起臥す、此地の記録によれば、千八百七十五年より千九百一年に至る、一萬九百五十七日の中、一萬七百七十日は、寒暖計八十度を超ぬず、また四十度を下りたる事なしと、余はホテルの傍らよりランツシチーの傍に出づ、夕陽波の彼方に落ちて、赤ら引く雲、海の上を彩り、夕景頗る静かなるの時、余は此畫の如き光景に對して、恍惚去る事能はざるもの久し、八時サンデーゴに歸り、翌十一日、羅府に歸る。

附、サンデーゴの歴史

鐵道の敷設せられざる前、海路は唯一の交通機關なりし時に於て、最もメキシコに近きサンデーゴの地が、西班牙殖民地の勢力範圍にありたるは怪むべき事にあらず。故に加州の開發史はサンデーゴの歴史を以て重要な部分を爲す、また自然の數なり。

今より一世紀前、印度人の種族、此附近の原野に單純なる生活を爲しつゝありたるが、千五百四十二年九月此地始めて葡萄牙の探検者ジュアン、ロドリヂエズ、キヤブプロに依て發見せられ、其後千六百二年五月五日、西班牙ヒロップ三世の時代、西班牙皇帝は其領土たる墨其西の總督ルイズ、ド、ベラスコをして太平洋の沿岸を探検せしむるや、葡萄牙人ツキズカイノ此行に従ひ、其十一月十日サンデーゴに入りたる事あり。其後西班牙内亂の時代、一時此方面の

經營を措きたるも、千七百六十七年チャールズ三世の時に於て、新西班牙の總檢察ヨーツ、ド、ガルベスは、モントレレー、ユマ、ベンチエラ等に守備兵を置き、西班牙の教會を各地に置くに至る。フランシス派の教會は本部をメキシコ市、サンフアナンド、カレツチに置き、ジュニバルセラを以て、全加州各教會の總督たらしむるに至れり。

是より先きジュニバル、セルラは身を西班牙新領地の宗教界に投じ、未開の人民をして宗教の感化を享けしめん事を期し、メキシコより來りてサンデーゴの地に至り、千里の長途、旅脚轉た疲勞を覺え、海濱に立ちて此地の地勢を見、密かに思へらく、是れ我が任務の地なり。以て永く留まる可しと、乃ち一行の徒と附近に生じたる草を刈りて、雨露を防ぐの家を造り、樹の枝に梵鐘を吊し、茲に最初の祭式を舉行したるなり。土民は固より善意を以て彼等を迎へざりし。一ヶ月の後、彼等は其仲間を語りひて此粗末なる寺院に襲來せり。ジュニバルセルラの教徒は銃を以て之を防禦し、土民は弓矢を以て之に應じ、双方激戦の後、ジュニバル、セルラの徒二名は彼等の毒矢に仆れたるも、忍辱の法衣を纏ひ、衆生濟度の慈眼を有する教父セルラは、依然彼れが温和寛大の態度を變せず、諄々として教へ、懇々として説き、遂に彼等をして靜穩ならしむるに至れり。斯くして六年ばかりを経たる頃、アメリカ殖民地は英本國の稅吏に反抗し、獨立の戦を起さんとすの兆あるより、セルラ密かに思らく形勢已に斯の

如し、太平洋岸將來の運命また大に變するものありむ。乃ち地を楊柳の生ひ茂れるサンデーゴ河畔に擇び、眺望に富める地位に寺院を建築して、徐ろに彼れが理想的の感化事業に従事せんとしたるなり。此寺院の建築せられたる年、土蠻の印度人は、其同胞中に洗禮を享けたるものあるを不快に感じ、再び襲來して寺院を焼き打ちし、宣教師の一人と鍛冶屋及び大工とを殺戮したり、然れどもセルラは尙ほ之が爲めに怒らず、寺院の再建を督して、専ら土民との和解に努めたるなり。果せるかな、機會は到來し、彼は西班牙政府の命令を受けて加州教會の總督者となり、其教權はサンデーゴよりソノマに至る間の太平洋沿岸に散在する教會に及び、彼は一方に於て其宗教的の感化を爲すと共に、一方に於て家畜を飼養し、野菜、果物、花卉の栽培を奨励し、宗教的感化事業と殖産の振興に努めたるなり、然れども物盛んなれば衰ふ、榮枯盛衰は此地にも免れずして、メキシコは西班牙本國に向て獨立を宣言し、自ら立法行政の權を行はんとして、其舊知事を本國に放逐し、國會を開き使を上カリホルニアに派して、新政府の設立を告ぐるや、セルラの徒謂らく臣として君に背き、異域の地に反旗を擧ぐ是れ亂臣賊子にあらざやと、然れども新政府の命儼として、背後に威力を備へ、フランシス派教會の規則を廢棄して印度人の自治權を許し、彼等をして教會の附屬を脱せしむ、由來印度人は獨立の能力を有するものに非ず、教會の羈絆を脱したる彼等は、未だ生活の基礎を作る事能はざるに早くも諸方に流亡し、教會の僧侶は苛酷なる政策の犠牲たるを希はず、所屬の財産を賣拂ひて、續々としてメキシコの本國に歸りぬ、メキシコ政府の政策は、見る間に惡結果を生じ、不平の僧侶は事變の起るを希望し、加州には米人の續々として移住するもの多く、千八百三十六年、現時のカリホルニアは、遂に墨西哥政府の管轄を脱して、一時紛亂の時代を現出し、千八百四十八年、北米合衆國の海軍大尉フレモントの侵入するに至りて、メキシコ政府は遂に此領土を支ゆる事能はず、時の知事アンドレスビコトはフレモント大尉と條約を締結して、上加州は遂に北米合衆國の一部に編入せられ、メキシコの活躍時代は爰に其終を告げて、今はフアーザー、ジュニバルセラの餘徳を稱するのみ、現時電車の鈴の鳴り響く街路は曾て獸皮を晒し、粗末なる荷車の重き轡を爲しつゝ、恐ろしき牡牛に牽かれて軋り行きたる所なり、黒塗馬車オートモビルの走りつゝあるアスバルトの通路も、昔は砂塵途を埋めて西班牙風の騎馬、横行濶歩を恣にせし地なり、時勢の推移、眞に驚くに足るものあり。

サンデーゴ郡日本人發展地の調査

サンデーゴ郡は、北はリバサイド郡、及びオレンヂ郡の一部に界し、東はイムベリヤル郡に接し、南は墨西哥と國境を限り、西は太平洋に面す、郡内の面積四千八百七十一方哩、海濱より三十哩乃至六十哩に達する間は、土地次第に高層を爲し、山嶽相重疊す、此山嶽は東に至ると共

に、急傾斜面を爲して、イムベリヤル平原に連れり、イムベリヤル郡の界より以西は、海岸地、高原地、山麓地、山嶽地の四個に区分し、海岸地には周年降霜なく、高原地は海拔四百呎より五百呎にして、之をホーウェイ平原と稱し、山麓地は一千呎より二千五百呎に達し、山嶽地は二千五百呎より四千五百呎に達す、此間所々に耕作すべき平原地ありて、其廣さ六十萬英町に達す、其他は牧場たるに過ぎず、地質は花崗石より成れる壤土及粘土にして、二者相合して一種の粘土質を爲す所あり、沿岸地方は灌漑法充分發達せざるを以て、水を要せざる植物を耕作し、オレンジ、檸檬、蜜柑、葡萄、果物等を産し、また干葡萄を産出す、氣候の温和なるを以て、穀類、アルハルハの産出すると共に牧畜業また盛なり、ナシヨナルシチー、レーキサイド、エスコンデイド等は、農産物の集散地なり、養蠶業は労働賃金高きを以て未だ利益ある事業とせられざれども蠶兒の發育は頗る佳良なりといへり。

『サンデーゴ』 南加州最南の都市にしてローサンゼルスを距る事百二十六哩サンタファイー鐵道の便あり、海上には太平洋沿岸汽船會社の定期航路あり、其市の歴史久しき以前よりの沿革を有すれども、現時の發達は近く六年前よりにして、千九百年は人口一萬七千に満たざりしも、今や四萬五千人の人口を有し、近くバナマ運河の開通されんとし、アリゾナ州よりの鐵道線路の布設を見るまた遠からざるを以て、此地方に於て最も有望なる都會たり、ニューオルレアン、ガーベル

ストンの都市が、メキシコ方面に對して商業的都會たる位置を有するを見れば、サンデーゴの發達するや南部諸州商業上の中心たるまた難きに非ず、只だ港灣の淺きを以て、大艦巨船の碇泊に便ならざるものなきに非ずと雖ども、東洋との貿易繁盛なるに従ひ、漸次其發達を助長せらるゝに至らむ、此港は天然の地形風波を避くるに適し、最も安然なる港灣の一に數へらる、灣の長さ十三哩、幅二哩乃至半哩、平積約二十四平方哩、水深平均三十六呎、千九百七年入港せる船舶五百四十三艘、噸數四十八萬八千八百十三噸、内百六十艘は外國より入港せるものにして、其噸數十六萬六千二百二十二噸、外國に出港せる船舶は百二十九艘、噸數三十萬八千八百八十六噸なり、同年度の輸入品は七十三萬千七百七十四弗、輸出六十四萬二千二十九弗にして、税關の收入は十一萬一千六百四十七弗二十五仙なり、今後米國東部及南部に通ずるユマの新鐵道及びテハンテベック半島を經由する紐育航路の發達及び、巴奈馬運河の開通等に依て其便利を得るに至らば、更らに意外の發達を見るに至らむ。

輸出品の重なるものは、ワイン、ブランデー、罐詰果物、乾果、穀物、豆類、胡桃、蜜蜂、皮類あり、是等は多く歐洲に輸出され、獸皮、アスハルト、レッドウッド其他の材木類、錫、鐵、鋼、船、靴、綿、罐肉、木器具等南方より此港に轉送して船積するもの少からず、此地日本人の發達尙は幼稚にして、市内日本人の營業者は二十七戸に過ぎず、是れ市内労働口の

少きと、地方農園の有量ならざるに依り、其發達遅々たるを免れず、現時旅館五、美術店三、食料店二、理髮店三、湯屋二、洋食店二、玉場六、果物店一、料理店一、書籍販賣所一、洗濯屋一あり、就中美術店は東部より來る白人の顧客ありて比較的賣行き善く、他は未だ見込ある營業を有せず、郡内を通じ、日本人の在住者四百にして、美術店にてはOK商會、東郷美術店其大なるものにして、旅館には盛岡旅館、東郷旅館、日本旅館等其名を知らる。

『ミッシヨンバレー』市より三哩の東南にあり、二軒の農家と十四五人の日本人あり、各種の野菜を産し、北澤甚四郎松下安吉其同の所有地四十四エーカーあり、其他には二十五エーカーの借地者一軒あるのみ。

『チユルベスタ』市より八哩の東にして、レモン園に勞働する日本人あり、兵庫縣人清原某のキャンプあり、七八十名の勞働者を使用す。

『ボニタ』市より九哩を距て、汽車の便あり、廣島縣人吉川某のキャンプあり、四五十名の勞働者を使用す。

『ラメサ』市より五六哩を距つ、日本人の莓及び野菜を作るものあり、塚崎某外一名の現金借地二十一エーカー、和歌山縣人山本秀二郎、新潟縣人澁谷等の歩合作荷園八エーカーあり。

『ポストニヤ』千九百八年岡山縣人山川仲介其弟寛次と共に始めて此地に入る、墨其西哥人、

印度人の勞働者多きが爲めに、一時は勞働賃金の低廉なるを免かれざりしも、日本人勞働者の價値を認むると共に、漸次之を歡迎するに至れり、此地方は蜜柑、檸檬、の外葡萄を産する事多く、土地乾燥せるを以てフレスノに劣らざる干葡萄を製するに適せり、降霜少きも、野菜市場に遠きを以て野菜の耕作は未だ利益ある事業たるに至らず、莓の耕作に適するもまた適當なる市場のわらざるを以て未だ有望なる事業とするに足らず、是れ人烟稀少にして、交通の尙は發達せざるが故なり、作地は凡て小農的にして、蜜柑及オリブ等の生産地として開拓の餘地を有す、勞働賃金は十時間にて一日の賃金壹弗五十仙なり、葡萄時期には四五十人の日本人勞働者を要し、オリブ時期には百人内外を要す、其附近デヒサ、ハムル、ハマチヨ等皆日本人の勞働者を歡迎するに至れり、現時白人の農家四五十軒ありて、山川キャンプは常に十二三人の勞働者を使用し、收穫期には二十餘名の勞働者を使用す。

『サンチー』ポストニヤの西北二哩の所にあり、同胞の果樹及莓の栽培を爲すものあり、日本人の借地面積三十六エーカーにして、内十九エーカーは莓十七エーカーは、果物を栽培す。

(附) 蜜蜂の事

蜜蜂は加州の地、所々に飼養せらる、テンデーゴ郡は蜜蜂の飼養に適する地と稱せらる、養蜂の事業は岩石ある山地または、山麓地に於てせられ、此地方は蜜を分泌する花または植物多く

就中ホワイトセージと稱する植物は、最も蜜蜂の好で其蜜を吸収するものにして、此植物より生ずる蜜は世界中最も美味なるものとせらる。養蜂の事業は最も輕便なるものにして、身體の麻弱なるものも、容易に此事業に従事する事を得、此種の養蜂家が其事業の爲めに健康を回復したるの例少からずといふ。

インベリヤル郡日本人發展地の調査

千九百七年八月、サンデーゴ郡を割きて新に一部を置き、之をインベリヤル郡と稱す、インベリヤル平原の全部を包容し、東はコロナード河を以てアリゾナ州と界し、南はメキシコと國境を接し、西はサンデーゴ郡に隣り、北はサンアント山脈にてリバサイド郡に界す、始めは一の砂漠地に過ぎざりしが、コロナード川の治水工事成りてより、此地方灌溉の便を得、新に一大富源を爲すに至れり、地質は砂質壤土、粘質壤土の所あり、郡の大部分は海面より低地にあり、其鹽分地質を爲す所は海面七十呎以下にあり。

此地方の主産物はアルハルハにして、牧畜、酪業、家禽業に最も望を囑せらる、果樹の栽培に適し、葡萄もまたよく成長す、其他穀物、蔬菜の耕作に適する地少からず、殊に冬季降雨なく、夏期炎熱甚しきを以て、冬期の野菜は最もよく成長し、夏期は瓜類の耕作最も盛なり、キャンタローブ(瓜の一種)は毎年五月頃早くも成熟し、南加州の市場を獨占す、日本人の瓜作者にして

一エーカー百弗の純益を得たるもの少からず、プロローレー、インベリアル、エルセントロ、ホルチニール、ヒーバー、カレキシコ等、皆農産物の集散地にして、就中プロローレー最も發達せり、エルセントロは近時の建設なるも、郡の首都として將來此附近の繁榮地たるべし。

「プロローレー及びキーストン」 日本人の瓜作を爲さんが爲めに、近年此地に入るもの頗る多く、其結果一時市場の供給超過を爲し、價額下低せる爲め大失敗を爲したるもの少からず、明治四十二年一月の現在にて、プロローレー及びキーストンの地にて、現金借地の農家二十六組、借地面積千〇二十三エーカーにして、重に瓜、玉葱、馬鈴薯、林草等を耕作す、借地期限は大抵一年乃至三年の契約にして、借地料は一エーカー十五弗より十弗の間なり、水代はエーカーに付き一弗乃至二弗を支拂ひつゝあり、此地方は十一月より四五月までは春の如き季候にして、十一月より二月に至る間に微霜を見る、六月より九月十月に至る間は温度百度に達し、最高度百二十五度に達する事あり、夜間は著しく寒冷を覺え、時々夕立雨ありて、其寒暑の差の甚しき事砂漠の氣候と異ならず、瓜は毎年二月より收穫を始め、八月頃之を終る、今より八年前、熊本縣人森山某、廣島縣人杉本某等、始めて此地方に入り、瓜作を爲して多大の利益を得たるより、遂かに日本人の此地方に首目するものあるに至り、今や將來有望なる農産地を以て目せらる、現時土地の價一エーカー四拾弗乃至百五拾弗にして、三年前には一エーカー壹弗にて賣買されたる事あり

り、ヒーバー及びエルセントロ、ブローレー、キーストンと趣を同し、明治四十二年一月現在にて、日本人の農家十五組あり、其借地面積六百五十一エーカーにして、瓜、野菜、玉葱、林草等を作るもの多し。

サンデーゴ郡成業列傳

△森岡定志 廣島縣神石郡油木村の産にして、明治六年八月生る、明治三十五年渡米し、始め農園の勞働に従事し、三四年の後オリヤンドの地にて三人の共同にて、二百エーカーの受負耕作を爲したるが、去てローサンゼルスに來り居る事半年、暫くハンチングトンビーチにて洋食店を経営したるが、明治四十年サンデーゴに來り旅館を開業して營業繁榮せり、サンデーゴに於ける日本人旅館の最も完備せるものなり、性質温厚にして地方の信用を有し、現に此地日本商會の重役たり。

△清原滿治 兵庫縣の産にして、明治四十年四月砂市に上陸し、間もなく南加州に來りてサンデーゴ郡チエロベスタに於ける糟谷某の經營せるキャンプを譲受けて現時六七十人の勞働者を管理せり、曾て兵庫縣立農學校を卒業せるものなり。

△中本吉三郎 和歌山縣東牟婁郡明神村の産にして、明治二十七年渡米し、暫く此加州の農園に勞働し、後南加州リバサイドの地に入りて蜜柑園の勞働を契約して資産を作り、サンデーゴに至

りて玉塚を開業して營業大に繁昌し、現に附近に土地を所有せり、其經歷の久しきを以て、同胞社會の信用を有し、現に日本商會の社長にしてサンデーゴ日本人會の會計に推さる。

△小川春齋 愛媛縣の産にして明治元年生る、明治十九年渡米し、桑港に留まる事數年、始め英語を學ばんが爲めに、無給にてスクールボーイたる事六ヶ月、後一週間一弗五十仙の給料を與へられたる事ありといふ、曾て故國にあるや松山醫學校及び濟生學舎に於て醫學を修め、前期試験に合格したるにも拘はらず、渡米を企て一時桑港に於ける學生勞働者の中に入りて、其風潮に感化せられ、菅原傳、石川三之助等と自由新聞を發刊したる事あり、是れ現時の新世界新聞の萌芽なりしなり、已にして桑港を去り、砂市に至りて洋食店を開業し、更らにタコマ、ポートランド等に於て同一の事業を經營して種々の成敗を経、明治三十八年サンデーゴの地に來りて東郷旅館を開業して今に至る、東郷旅館は此地に於て開業久しくまた人氣ある旅館たり、彼れ米國にある事已に二十三年、其間二十六年を以て歸朝し留まる事三年半、三十三年再び歸朝して已に三回目

の渡航者たり。

△永田彌三郎 山口縣大島郡小松村の産にして、明治四年生る、明治二十八年布哇に渡航し砂糖園に勞働する事三年、後ち床屋を營業する事二年、其後料理屋及び食料雜貨店を開業して業務繁昌し、一時六千弗の資産を作りたるが、三十七年以來移民法の改正に依て同胞の布哇に來るもの

を減じ、彼れの事業また其影響を蒙り、遂に之を廢業するに至り、其使用せる馬及び馬車を利用して、貸馬車屋を経営する事一年半、後ちワヘヤワー耕地に入りて鍛冶職を爲す事三年間、再び千弗の貯蓄を爲したるを以て、明治四十年二月桑港に上陸して直ちにサンデーゴに來り、コルナドホテルの庭園労働を爲す事五ヶ月、其年八月サンデーゴ市第五街に床屋を開業し、四十二年六月更らにアイ街に於ける床屋及湯屋を買ひて之を経営し、其利益少からず、現に此地方に於ける成功者と稱せらる、妻及び三子ありしが、四十一年十一月最愛の妻病の爲めに三子を遺して他郷永眠の客となれり、彼女は彼の故國を出發する時より相伴ひて天涯の異郷殆んど十四年間、夫妻心を一にし、他日相携へ錦衣故郷に歸らむとせるも、宿志漸く成らむとして他郷一杯の土と化す誰れか一掬同情の涙なからむや。

△土井文二郎 和歌山縣海藻郡加茂村の産、明治三十三年晚香坡に上陸し、英領加奈太の地に労働する事三年、更らに桑港に來りて留まる事二年、其より、ローサンゼルスを経てサンデーゴに來り、中西某と共に東洋商會を開きて食料雜貨の販賣に従事せるが、四十二年二月南加商會と合併して日本商會と改め之を株式組織として其支配人たるに至る、日本商會はサンデーゴ日本人社會唯一の大商店なりとす。

△中村福松 和歌山縣西牟婁郡串本町の産にして、明治三十二年ヴィクトリヤに上陸し、晚香坡の鮭漁に従事せるうち、漁人と資本主との間に大紛擾を生じ一時日本人側の勝利たりしも遂に終局の利を見る事能はず、彼れ是に於て去て砂市に來りて鐵道働きに従事し、後ちアイダホ州に入りて鐵道に働く事五年、ユタ州に労働する事四年、其後加州に出で、諸所に労働してサンデーゴに入り、檸檬園二百五十エーカーの労働を受負ひ配下に數十人の労働者を使用し、此地方に於ける受負業者として労働界の信用を有せり。

△假家郁平 和歌山縣西牟婁郡串本町の産にして明治三十二年十一月桑港に上陸し、父と共に湯屋を營業したるが、之を他に賣却して父子相伴ふてネバタ州に入り、リノ市にて雜貨店を経営する事二年、後ちローサンゼルス地方に來りて諸所に労働し、明治四十一年九月サンデーゴチエロベスタに來りて、中村福松のキャンプに入り中村の事務を助けて其補助監督となり、配下に三十名の労働者を指揮し、此地方労働界に信用を有す。

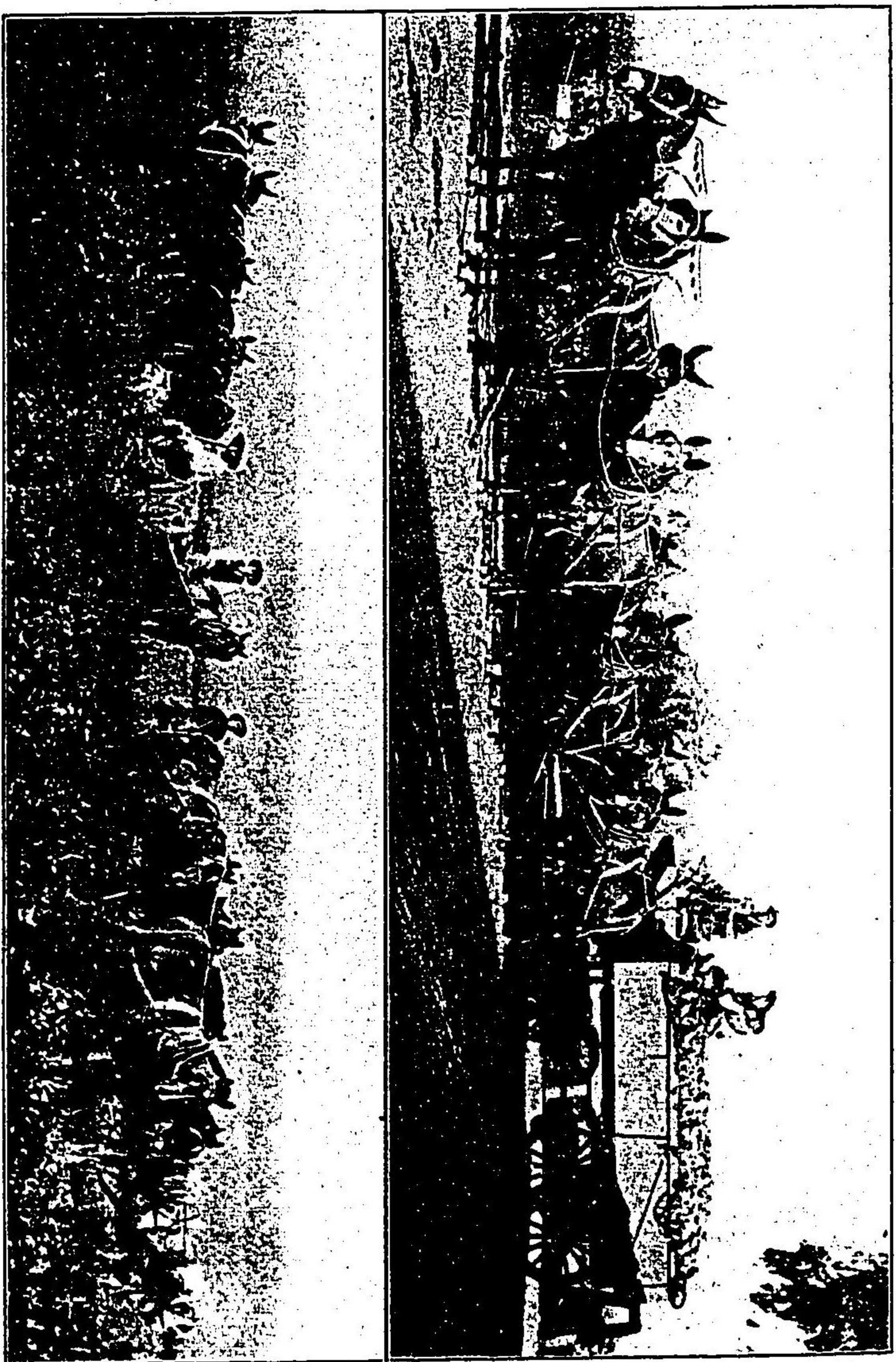
△塚崎直喜 熊本縣上益城郡白旗村の産にして、明治三十一年英領カナダ晚香坡に上陸し、一時鮭漁に従事したるが、後アイダホ州の鐵道に働く事二年、更らに桑港に出で、種々の労働を爲して、三十四年ローサンゼルスに來り、また附近に労働したる後、四十年六月サンデーゴに來り、ラメサの地二十エーカーを現金借地し葎及びトメトリーを作り利益を得る事少からず、此地方未だ日本人の農業者少く、地方に於ける農業者として知らる。

第八節 ベンチユラ郡

オクスナード踏査日記

七月四日午後二時ローサンゼルス市を出發し、オクスナード方面に向ふ、十分間にして汽車のバ
 トバンクに着するや、下車して豊島忠三郎氏を訪ふ、屋内寂寥として人なし、獨り附近を散歩し
 て氏の歸るを待つ、時に夕陽郊野に傾きて、村樹の影に人家疎らなり、野村の風景頗る閑雅な
 るを覺ゆ、日暮豊島氏は馬を驅て歸り來れり、氏は余の知友なり相見ざる事二年、此夜一泊して
 已往の事を談す。

七月五日、午前八時オクスナード行き汽車に搭す、オクスナードはベンチユラ郡に屬し、ロー
 サンゼルスを距る事七十哩の所にあり、汽車のバトバンクを發してより、窓外の光景只だサンフ
 アンナンド平原の、胡桃園、秣草園、橄欖園等の相續けるを見るのみ、已にしてローサンゼルス
 郡の北に盡んとして、ベンチユラ郡の境を爲す所、一帶の間耕、赭色を爲すあり、岩石壘々とし
 て相重り、山上草を見る事稀なり、是よりトンネルを通過する事三四、兩山の相迫る所、山上の
 奇石、層々また磊々として一種の異觀を爲し、岩石の高きものは城樓の突起するが如く、崖壁の
 斜めに傾ける所、塞壘の相連るに異ならず、此邊山として石ならざるなく、石として奇ならざる
 はなし、已にして岩山盡き、牧野の長く開くるあり、樅樹の所々に生ずる外、他の樹木を見ざ



露徑同共三笠山麓、吉久山上、松徳木茨、藏止谷木、耶次作藤後、ローサンクオ
 景光の湖運堤大及び起聖園根大標砂の町英百三

風樹として植えられたるものなるべし、砂糖製造所は、日本人街の盡くる所、護謨樹の林に傍ひて
二大烟突の屹然として立てるものは是れなり、周囲の光景、またローサンゼルス郡の地形と全く趣
を異にし、始めて大陸的の地形を現出するを覺ゆ。

七月七日 市街を發して北行する事三哩、廣島縣人清水四作氏のキャンプに達す、氏は七八人の
労働者を指揮し、今日より大根首切を始めたるなり、屈強の健兒、初陣の奮闘まさに酣にして、
武器は鋭き首刎刀の、切先に釘の如きものありて、此釘をば長さ二尺、周圍一尺二三寸の砂糖
大根に打込みつ、引き寄せては打切り、切つては引寄せ、見る間に大根の屍は疊々として堆を爲
すなり、其凄壯の動作、眞に活戰場を見るが如し、彼等一日の給料普通三弗なりとす、以て其
激闘の尋常ならざるを知るべし、此所を去て行く事三四哩、熊本縣人阪田甚太郎氏を訪ふ、途中
首刎したる大根を荷車に積むを見る、園中には今朝より切りたる大根の堆積あり、八人の健兒は
四人宛左右二列となり、各手に巨魁を持ち、息もつかさず、之を荷車に積む、敷臺の荷車は六
頭の馬にて交々積みたる大根を運びて、反橋の如く造りたる積臺に引上げ、積臺の傍らに専用の
鐵道を敷き、大根列車は空筐を載せて反橋の傍らに待てり、斯くして引上げられたる大根荷車、
橋の頂上に達するや、大根の下に敷かれたる繩網は、滑車を通じて二頭馬力にて曳き上げられ、
幾噸の大根は、繩網の曳き上げらるゝ勢ひにて、鐵道荷車の筐中に轉覆し得るなり、大根労働な

るものは、加州日本人労働中の最も激烈なる労働にして、體力剛健、動作の敏捷なるものに限れ
り、多くの労働者中、給金の高さが爲めに、奮て之に入るものあれば、十中七八は中途にして
之を止むるもの多しと、阪田氏と語る事二十分間、此所を辭して海濱に出づ、洋上の浪、風に激
して森々白馬を躍らし、怒濤岸を啣んで砂塵飛ぶ事急なり、凄壯の光景永く留まるべからず、乃
ち歩を返へして八哩を徒歩し、オクスナードの市街に歸る。

サチコヒ山中労働日記

オクスナードを距る事二十哩の所、サチコヒといふ地あり、余労働者キャンプ生活の實際に接
せんと欲し、アツブリカット摘採人夫の中に入り、共に労働する事三週間、乃ちサチコヒ山中
の日記として之を左に掲ぐ。

七月十一日 一行三人汽車にてオクスナードを發し、三十分にしてサチコヒ驛に下車す、是よ
り馬車にて山中に入る事七哩、暑氣殊に甚しく、黄塵衣を埋む、途中に杏園多く、滿枝の果實
黄色燦爛たり、樹枝重きに堪えずして折れて地に敷き、杏實の顆々として散亂するを見る、
已にして殆盡き山登えて一軒の農家あり、乃ち杏園管理者の居宅にして、間もなく、山中のキ
ャンプに達す、瞻上ぐれば峻峯木の間より登えて頭上に屹立し、谷に従ひて樺樹の林あり、
林中のテントには十人内外の同胞あり、樹下に竈を築き、之に支那釜を置く、鐘詰類を入れた

る箱、米袋、醬油樽等其傍にあり、木の溜池ありて山の峽より水を引きたり、テントの内に横臥するもの、水溜の邊にて洗濯するもの、黒きシャツ、淺黄の袴、麥稈帽子、思ひくしの服装したるが、坐して喫煙するもの、立ちて語るもの、木を伐るもの、火を焚くもの、其状態種種様々なり、新入の吾等は、別に一つのテントを張らざるべからず、同行者の一人は、斧にて木を削し、之を柱としてテントを張る、一同は落柴を集めて其上に帆布綿を敷き、上に毛布と蒲團を置きて寢床を作る、新テントの家族的生活は此日より始まり、其人數は支那博奕の撰手、紀州節の名人、元とは船乗りなりといふ無邪氣の若者、鹿兒島生れの口をさかぬ男と、風來坊の短帽さんと綽名されたる余を添へて總て五人なり。

七月十二日、静かなる山の影に日は未だ昇らざる午前七時、一同起きて朝飯を爲す、料理は味噌汁に福神漬なり、飲料水に石腦油の混じたるにや、茶の色は赤味を帯び、飯の色も怪しげなり、他のキャンブにある白人の勞働者三人、未だ炊事調はずとて、此朝余等のキャンブに來りて日本飯を食す、林の端は牧場に接したれば、鈴をつけたる牛ユツと來りて木の葉を喰ふあり一同之を逐ひ走らしけるに、更らに二頭の馬、林を穿ちて來る、鹿の類の林の中を行くに同じ此日午後一同働きに就く、竿にて枝を叩きて、落ちたるアツブリカットを石油の空罐に捨入るるなり。

七月十三日、園中の勞働前日に同じ。

七月十四日、朝食に馬鈴薯と赤茄子を煮たるものを付く。

七月十五日、身體漸く勞働に馴れ、夜始めて安眠す。

七月十六日、暑氣殊に甚しく、流汗淋漓たり、園中土塊燃ゆるが如し。

七月十七日、勞働平日に同じ。

七月十八日、余は此日午前半日を休息す、一同の者は出で行きて、余一人キャンブにあり、日光已に山の端を出で、黄金の光を林の梢に染め、淡霞山家の上を刷きて、冷氣殊に爽かなり、余は自ら湯を沸し、髻を剃り、洗濯もの杯爲し、更らに湯槽に湯を湛え、赤裸となりて其中に入る、山中人あらざれども、日光疎林を射て、我浴槽に落つるも勿體なき心地す、今日は野に放たれたる馬も來らず、濕浴せる赤裸の男一人、周圍は自然の天地、木は自づに立ち、草は自づに生じ、零ちたる木の葉、朽ちて地に敷き、削りたらむ如き峯の岩石、千早振神代のみなり、余は只だ太古に生れたる神の愛兒なるが如く、湯槽の中に恍惚として無我の郷に入りぬ、此山に聲おかしく鳴く鳥あり、昨日紀州節の名人はいへり、彼の鳥の聲を聞き給え、オトーサン、オカーサンと呼ぶにあらすやと、しか思ひて聞けばいかにも、しか聞ゆるなり、我國にては卯の花時、杜鵑の聲を聞く、其調ホト、キタカ、ホト、キタカといふが如し、其意父を慕ふ

子の「阿父来りたるか」といふが如し、支那の學者は此聲を不如歸兮、不如歸兮と聞きしとかや、詩人は此鳥に蜀魂の異名を付したり、蜀魂、不如歸、共に望郷の意を寓す、余浴槽の中に静かに此鳥の聲を聞きつゝありしが、俄かに思へらく此鳥或は我國のホト、キタカと同調の音聲を有するものにはあらざるか、聞くサクラメントにて一人の婦人、此鳥の鳴くを聞いて頗る郷國の情を惹き、鳥尙は斯く呼びぬ、愛兒妾を待たざらむやと、早々歸装を爲して途に上りたるものありと、嗚呼何等の優情ぞや、浴槽の中、無我の郷に入りたる余も端なく此鳥の聲を聞き、豈に望郷思家の情を惹かざらむや、九時頃用事終りて、樹蔭に讀書す、十一時賄方の男歸り来る、十二時一同仕事場より歸る。

午後一時始めて切箇屋の働きに行く、園中にて拾たる果實は此所に運ばれ、多くの人々は小刀にて果實を二つに切り、中より種子を除きて其果肉を盤に并べ、其盤の二十枚ばかり重なりたる頃之を煙室に運び、暫くにして引き出し、日光に乾燥せしむ、斯くして作られたるものは、虫害及び腐飾の憂なく、主としてパイ等に用ゐらる、此日切箇屋には十人の日本人、管理者の妻君、老夫婦、姉妹連れ美人、三人の白人労働者、之に園主の長男十二歳ばかりなる腕白小僧を添へて總勢二十人内外あり、一箱の切實十二仙五厘にして、熟練なるものは十五箱、切る事あり。

七月十九日、働き前日に同じ。

七月二十日、働き前日に同じ、時々笑聲の起るあり、腕白息子の惡戯を爲したる爲めに婦人連より追ひ散らさるゝなり。

七月二十三日、此日オクスナードよりキャンブに葡萄酒を送り来る。

七月二十四日、夕方附近の山に登る、山の彼方に油井の十ヶ所ばかりあるを見る。

七月二十五日、オクスナードより、鱈の切肉来る、一同舌鼓を打ちて其珍味を賞す。

七月二十七日、朝寒冷を覺ゆ、濃霧ありて十時頃日光始めて現はる、此日園内の仕事終り、切箇屋の白人の仕事終る。

七月二十八日、此日午後一時、全部の仕事終る、午後沖繩縣の青年安常某と附近の高山に登る暑氣甚しく流汗衣を濕はす、頂上よりベンチュラ郡山脈の逶迤たるを望む、オクスナードの海邊は濃霧に隠れて見えす、山の背後に兎糞堆きを見る。

七月二十九日、此日はキャンブを撤してオクスナードに凱歌を擧ぐべき日なり、午前五時頃賄方の男茶を沸して握飯をつくる、一同キャンブを解きて幕を捲き、夜具手荷物等を片付く、二十日ばかりの假の住居忽ち元の野原と化す、五時半頃麓の白人、大荷車を二頭の馬に曳かせて来る、一行十四人の荷物一切を之に積む、朝氣清爽、一同の意氣頗る爽快なるを見る、白

人の妻君我等を見送りひとして庭前にあり、一同帽を打振れば、彼女は手巾を振つてグッバイ、ボーイス、と呼ぶ、朝霧山峽を填して、山村の風景頗る閑雅なるを覺ゆ、斯くして樅樹の野原を過ぎ、蜀黍の畑を過ぎ、橄欖園杯を過ぎて、午前八時サチコヒの驛に着す、之より汽車に搭じて、午前十一時四十分オクスナードに着す、此日受負人より支拂を受く、余に對する勘定書は左の如し。

一金拾四弗七拾仙 九十八時間働きの賃金
一金貳拾弗七拾五仙 アップリカット切賃百六十六箱分
計參拾五弗四拾五仙

内

一金四弗拾八仙 食料十九日分
一金壹弗七拾七仙 手 數 料
一貳拾八仙五厘 天 幕 代
一金五 拾 仙 牛乳特別配布
一金貳拾八仙五厘 料理買割前
一金貳拾八仙五厘 道具 代
一金貳 拾 仙 酒 割 前
計金七弗五拾壹仙

差引金貳拾七弗九拾四仙

ウエンチユラ郡の調査

ウエンチユラ郡はローサンゼルス郡の北に接し、面積千八百五十平方哩にして、郡内嶽地に富み、耕作地は全面積の四分一に當れり、二大河流あり、一をサンタクラ、河と稱し、一をサンビエナウエンチユラ河と稱す、サンタクラ、河の流域をサンタクラ、平原と稱し、廣さ四十哩に亘り、地質最も膏腴なり、郡内の主要産物は豆及砂糖大根にして、就中ライマビンは年々七十萬俵を産出し、其産額の大なる事世界第一に位す其他に三萬俵のスマールビーンズを出す、是等の價額實に二百萬弗と稱す、また大根砂糖の耕作近來頗る盛にして、此地方に産するものは糖分を含む事多きを以て知らる、年々の産額一百万弗にして、果樹類にはレモン、オレンジ、オリーブ、アップリカット、胡桃等あり、穀類は大麥、小麥、燕麥等を産し、一年の收穫一百万弗に上れり、家禽及養蜂業また盛なり、郡内に在散する日本人は八百餘名に上り、妻帯者四十餘人あり、
オクスナード 此地は南加州に於ける大根砂糖製造業の中心にして大規模なる製糖會社あり、原料は附近の大根園及びオレンジ郡、サンデーゴ郡より輸送し來るものあり、此地の大根は平均十八パーセントの糖分を含有すといふ、會社の製糖額は一日二千噸にして、附近の地は第一に砂糖大根會社、第二にパリンランチ會社、第三は個人の所有に屬す、此中砂糖大根會社の耕作地は一萬五千エーカーにして、是等の耕地にて、勞働に従事する日本人は年々其數を増加し、八百人より千人に達せり、現時此等の勞働者を使用して會社に受負契約を爲し居るもの十五人あり、オ

クスナード市街の營業者は彼等に依て其繁榮を維持す、會社の使用する勞働者は、日本人の外に支那人、墨其西哥人ありて、其數及び勢力相匹敵して殆んど鼎立の姿を爲す。

市街はローサンゼルスを距る事六十七哩、全市の人口は三千にして、此市を中心として郡内に散在する日本人は八百餘名、市内に於ける團體には日本人會、美以教會等あり、市内の營業者には、商店十四、旅館十五、料理屋五、洋食店三、運送店二、玉場七、床屋及湯屋六あり、其重なるもの左の如し。

- 商店 株式会社旭商店 東洋商會 日の出商會 徳山商店 富山商店
- 大友商店

- 旅館 南海屋 富山旅館 徳山旅館 廣島屋 紀の國屋
- 熊本屋 九州屋 三笠旅館

- 料亭 松の屋 みどり亭 一富士亭

洋食店 岡山洋食店 サンライズ洋食店 大原洋食店

現金借地農家は、福岡縣人藤井源次郎の野菜園二十一ヶ所に過ぎず、他は多く歩合耕作にして、大抵砂糖大根園なるを以て其規模他に比して大なり、歩合耕作者の數六組、借地區域千五百四十六英町にして一人の借地多きは三百英町より、少きも百六十英町を下らず、主として砂糖大根を耕作すれども、他にライマビズ、及び秣草を作るものあり。

附 オクスナード騷動の始末

オクスナード騷動なるものは、南加州勞働界に於ける有名なる出來事たると共に、一方より見れば、南加州日本人勞働界發展の一階段を造りたるものにして、更らに海外に於ける日本人勞働者が、一朝機會に乗ずれば、決して他の背後に立たざる事を示すものなり。

初め岡山縣人山中某、此地の砂糖大根會社の勞働を契約し、日本人勞働者を率ゐて此地に入りたるより、漸次に日本人の數を増加し、千九百二年に至りては、猪之瀬伊之助、時田小次郎、宮野芳涯、三浦喜太郎、馬場小三郎、干濱一郎、富山富貴次、島田次郎、寺澤六之助等、皆幾多の勞働者を其配下に集め、附近の大根園に割據したりしが猪之瀬伊之助は、曾て製糖場のコックとして勞働したる因縁ありて、夙に會社の重役間に信用を繋ぎたれば、此年オクスナード全部の砂糖大根園一萬五千英町の勞働を一手に占有せんとするの計畫を定め、猶太人リバイといへるものを資本主とし、ローマンなるものに、日本人勞働者の需用に應ずべき商店を營業せしむるの約束を爲し、米人ハスを推して社長とし、ウエスタン、アグリカルチュラル、コントラクト、コンパニーといへる會社を設立し、猪之瀬自身、之が支配人たるの役割を定め、砂糖大根會社と妥協し、頗る安價の勞働を以て、之に日本人勞働者を使用せんとし、其年二月に至り、已に十中八九の地面を其受負區域として契約を爲すに至りたり、然れども多くの日本人

労働者は猪之瀬の結びたる契約にては、労働賃金の安價に失するを見て之を喜ばず、附近の小契約者は、彼れの統御的手段に對して利害の上より、之に反對せざるを得ず、墨其西哥人の労働者また、日本人の専斷を憤慨するものあり、彼等は機を俟ちて猪之瀬の計畫を破壊せんと待ち構へたり、此時伊之瀬が桑港方面より備入れたる八十名の労働者中、山中彌太郎等は、伊之瀬の所置が約束の條件に違反せるを叫び出しぬ、衆論囂々として、不平の聲は到る所に起りぬ、桑港方面より來りたる労働者中には、學識あり、辯才ある書生風の労働者また尠からず、火は已に點せられたり、人心は已に平穩を失しぬ、八百乃至千名の労働者は、二月十一日を以て日墨人同盟労働大會の發會式を擧げたり、馬場小三郎は司會者として熱誠を披瀝したる開會の垂意を演説したり、宮野芳涯は陳情委員として選舉せられたり、反對運動は斯くして開始せられぬオクスナードの空地、殺氣紛々として、何時甚麼なる方面に於て大格事の起るやも知れざる光景を現出せり、兩者の相對峙するの間、労働の時期は已に來りたるに抱はらず、砂糖大根園の仕事は空しく拋棄せられざるを得ず、當時伊之瀬の配下にある益田某、臼井某等は、表面中立の態度を以て十二人の労働者を集め、別個のキャンプを立て、其労働を開始したり、同盟派は之を看過すべきに非ず、嚴重なる談判を爲して、彼等をして其地を引上げしむ、十二人の労働者は勢の抵抗すべからざるを見て、荷物を車に積み、オクスナードの市街地に出づ、此一

團労働者の取遣りは遂に兩派をして其火蓋を切らしめたり、此際同盟派は半時間の間に四十八挺の拳銃を買入れたり、墨其西哥人を先登として、數百の群衆其の後に續きたり、豫め危急を知り居たる會社の重役等は、伊之瀬を保護するが爲めに之にライフル銃を備へしめたるを以て、彼等を見る間に戦闘の準備を爲し、警報に接したる警察署は、巡查を派遣して猪之瀬を保護せしむ、ホテル、セーピヤス、ルードの階上にありたる猪之瀬の配下臼井某は、銃口に裝藥して街上の光景に眼を放たず、此時或ものは、所謂中立労働者の一團が、車上に積みたる荷物に手を掛けたり、ライフルは階上より發せられたり、同盟派は之に應じて雨の如く拳銃を放ちぬ、街上は一の修羅場と化し、墨其西哥人の一人は其場に即死し、二人は重傷を負ふて仆れ、同盟派の大友平藏は、銃丸の爲めに其帽子を貫かれ、臼井は墨其西哥人の爲めに其腕を傷けられ猪之瀬もまた、一労働者のために狙撃せられて、左胸部を傷けられ、倉皇、身を靴の中に隠し車上に積まれて暗夜に逃走す、已にして騒動は一先づ鎮靜に歸し、嫌疑者はベンチユラ市の法廷に拘引せられたるが、加州白人の労働同盟本部は、此事件を聞知し、彼等は労働者の味方とし、資本者に對抗する主義に依て、幹事ホイラーを遣はし、日墨同盟者に聲援を與へ、彼等は、從來資本者側より労働者に對して挑戰的態度に出でたる例を見ずとて、熾に猪之瀬の行動を非難し、判事シヤフアードは、自ら進んで其顧問となり、裁判の結果は、證據不充分的理由を以

て双方に一人の罪人を出す事なくして止み、砂糖大根會社は、猪之瀬の契約を破毀して、全部の労働を日墨同盟者に受負はしむるに至り、日墨労働大會は、馬場小三郎を會頭とし、大友平藏を推して其副會頭に擧げ、オクスナード砂糖大根の労働は、斯くして、日本人、墨其西哥人、支那人の手に落ち、一般の營業者も多數の労働者は、爾後平穩に其事業に従事し、以て現時の發展を見るに至りたるなり。

附 製糖業及砂糖大根の事

砂糖大根は色白く、頭部の直徑三吋乃至六吋、其形頭部より漸次圓錐狀となりて、其長さ六吋乃至二呎に達す、普通一エーカーの地に六噸の收穫ありて平均百分の十五の糖分を有す、最も糖分に富めるはオクスナードの大根にして、豐年には農家の純益一割八歩に當り、大根の價は一噸五弗とす、乃ち農家は一エーカーに付て、四十弗乃至七十五弗の收益ある筈にて、耕作中間引に付て傭人を要するも、其他には勞力賃金の支拂を要せず、よく一人にて六十エーカーの管理を爲し得べし、借地料は八弗乃至十弗にして、此植物は毎年同一の作地を好まざるを以て、經驗ある農家は年々其他の作物を轉換して、同一の地に毎年大根のみを作る事を爲さず、砂糖大根地には牧畜業最も適當し、牛豚及家禽は、糖分を去りたる大根滓を以て家畜の飼料に當つ、此飼料は製糖會社の地密に貯藏せられ、其代價は一噸四十仙に過ぎず。

一日七百噸を製出する製糖會社は、八十五萬弗の資本を必要とし、此製造所は、百日間の大根收穫期に於て八千四百噸の砂糖を製造す、若し一バウンドに一仙の利益ありとすれば、乃ち十六萬八千弗の利益を得べし、而かも是れ最も少額に見積りたるものなり、現時世界中の砂糖消費高は年々二十四萬三千噸の増加を爲しつゝあるを以て、加州製糖業の前途、尙は無限の沃野ありといふべし。

オクスナードに於ける大根首列の賃金は一噸六十五仙にして、一人にて四噸乃至四噸半を刈ぬる事を得るを以て、一日の給金平均三弗とす、首切の時期は毎年七月より十一月までにして、間引の時期は二月より六月の間であり、草取は當時の労働にして一時に多數の労働者を要せず、間引及中掘は普通の日傭賃金を以てす。

サンタポラ ベンチユラ市の南十七哩にして、レモニヤンコンパニーに労働せる日本人のキヤンプあり、會社はサンタポラの市街地を去る事三哩の所にあり、今より十五年前、百四十萬弗の資本額にて創業し、現時生産期に達したる園地百五十英町未生産期のもの二百エーカー、胡桃園五百エーカー、秣草及他の果實園五百エーカーあり、今より日本人労働者十五名を使用し大阪市の人吉井某始めて其監督たりしが、其翌年福岡縣人四島二三之に代りて労働者を監督し明治四十年には、百九十八人を使用し、四十一年には二百五十人を使用するに至れり、尙は今後園

地の擴張と共に益々多數の日本人労働者を要するは疑を容れず、従来四島一二三單獨の名義を以て經營したるも、明治四十二年十月之を株式組織に改め、一の共同的事業として經營するに至れり。

ペンチユラ郡成業列傳

△四島一二三 福岡縣三井郡金島村の産にして、明治十四年生、三十年ポートランドに上陸し、桑港に來りて、スクールボーイの労働を爲すの傍ら英語を學び、二年にしてサクラメントに至り、野菜作を爲して失敗を爲し、困難極度に達して、一時衣食に究したる事あり、三十三年アリゾナ州に入りて鐵道働きに従事し、轉じて南加州に來り、サンタポラなる吉尾某の配下に屬してレンモン園の労働に従事し、吉尾の去るに及び、二三の同志彼の名義に依つて園主との交渉に當らしめたるより、遂に契約者として之を經營するに至りたりといふ、平時百人内外の労働者を使用し、繁忙期には二百七十人の労働者を使用す、キャンプは五棟の建築物より成り、寄宿舎、賭場、集會所兼圖書室等に分ちて、其規模の大なる事、加州に於けるキャンプ中其比を見ず、是等の建築物は皆園主の建築して之を労働者に貸與せるものなり、四島の此キャンプを經營せる以來、資産を積むこと殆んど四萬弗なりしが、明治四十二年十月、日米銀行の破産するに及び、該銀行其の株主として七千弗餘の義務を辨償し、またキャンプ内の労働者が、此際恐慌を起さんとするの色

あるを以て、一時に一萬餘弗の預金を返付し、更らにキャンプ内多數の希望を容れて、キャンプの單獨經營を廢し、之を會社の經營とするに至れり、彼れ天性質樸にして、實行的意識に富み、常に周圍を率ゐて、大に事業界に爲す所あらむとするが如し。

△大友平藏 宮城縣志田郡玉敷村の産にして、明治四年生、曾て故國に於て獸醫學校を卒業し、明治二十八年十月渡米して桑港に上陸し、スクールボーイとして傍ら英語を學ぶこと一ヶ年、それより、王府、麥嶺、櫻、府等にありてコックとして労働すること四ヶ年、已にして明治三十五年故國より妻を迎へ、南加州に來りて料理店を開きたるが、六ヶ月にして之を廢業し、三十六年二月オクスナードに來りたるに、當時オクスナード騷動なるもの起りて、銃丸飛び、鮮血迷ふの慘事の際會し、労働同盟派は密探者として彼れの舉動を注意せるが、彼は到着の翌々日、大會の席上に立ち、熱心なる演説を爲して野蠻的殺戮の時局に益なき事を主張し、言々肺腑より出づ、衆其言に感じ、席上彼を推して大會の副會長と爲す、事鎮靜したる後、旅館及び大根園の契約業を營み、他に廣大なる借地を爲して、砂糖大根、大豆、一等の栽培を爲し、此地方に於ける大農を以て目せらる、明治四十二年日本人契約會社の組織せらるゝや、副社長に推選せられ、また此年オクスナード日本人協議會を改めてオクスナード日本人會と爲すや、其會長に舉げらる、驅幹長大、面貌霸氣あり、また此地方に於ける人傑といはざるべからず。

△古閑柳平 熊本縣上益城郡濱町の産にして、明治十二年生る、幼にして叔父の熊本市にゐるを頼り、其地の學校に通學し、熊本縣立商業學校に入り、最初の卒業者として出づ、後九州鐵道會社運輸部に勤務する事一ヶ年、偶々渡米の志を起して明治三十二年九月桑港に上陸し、スクールボーイとして労働の傍ら英語を修むる事二ヶ年、其れよりサリナスに至り、山田商店の簿記掛となりたるが、一年五百英町の砂糖大根園を契約して五千弗の巨利を得、共同者四人の内、二人は直ちに歸國したるも、古閑は獨りワッソンプルの地に入り、更らに七十五英町の地を借りて之に砂糖大根と馬鈴薯とを植へたるに、地質の適せざるため三年間の辛苦、遂に何等の利益を見ることが能はずして止み、明治三十九年二月オクスナードに來り、砂糖大根園の労働を受負ひたるがまた失敗に歸し、更らにオクスナード市漁業會社を創立し、ギヤスリンボートを備へて三年間近海の漁業に従事したるに、暴風雨の爲めに漁舟を流失して、また利益を得る事能はず、然れども彼は他に明治四十年三月より、契約業を營み、年々砂糖大根園の労働を契約して常に多數の労働者を使用し、四十二年七月に至りては、更らに大友平蔵、今井絹次郎等と日本人契約會社を組織し、選ばれて其取締役となり、またオクスナード日本人會の組織を改むるや其幹事に擧げらる現時別に百四十英町の砂糖大根園を契約して、其經營に當れり。

△今井絹次郎 岡山縣兒島郡藤戸村の産にして、明治五年生る、曾て商業に従事せるが、明治三十三年、渡米してポートランドに上陸し、附近の鐵道に働くこと二ヶ年半、三十四年八月桑港に來りて家内労働に従事し、更らにワッソンプルに至りて農園に労働する事十ヶ月、三十六年オクスナードに來り、始めて砂糖大根園の労働を爲す事六ヶ月、それよりサンタポラ、レモンキャンブに入りて四年間の労働を繼續し、明治四十年二月オクスナードに出で、資本金一萬弗にて株式會社 旭商會を創立し、土地を買ひ、家を新築し、取締役兼支配人として今日に至れり、明治四十二年日本人契約株式會社の起るや、選ばれて會計となり、現にオクスナード日本人會の會計を兼ねぬ。

△坪井喜三太郎 和歌山縣南牟婁郡井田村の産にして、明治十年生る、十六歳にして東京國民英學會に入り、後速成英語學校に轉じ、三十一年東京城北中學校を卒業し、更らに第一高等學校英法科に入らむとして果さず、是に於て決然渡米を企て、三十八年十二月桑港に上陸し、後ち羅府に至り、英語を研究する事一ヶ年、翌年オクスナードに來り、日の出商會を讓受けて契約業の傍ら旅館業を營み、後ち移轉して業務を擴張し、更らに玉場及び養豚事業を經營するに至れり、現にオクスナード日本人會の副會長にして、また和歌山縣人會の理事長たり、日本人契約會社の組織せらるゝや、同志と其設立に奔走し、目下其會社の事務を兼ねぬ。

△後藤伴次郎 和歌山縣日高郡山地村の産にして、明治三年生る、三十三年六月グイクトリヤ

に上陸し、鮭漁に従事すること六ヶ月、後ちモンタナ州に入りて鐵道に働くこと二年、更らに加州に出で、桑港、布市、櫻府等の地に労働したるが、更らにエスビー線路の鐵道工事に従事し、ベカスルヒド驛の附近にありて、ギヤング長として部下二十五人を指揮し、居る事五ヶ月にして、三十七年羅府に出で、暫く農園に労働したる後ち、オクスナードに來り、砂糖大根園に労働する事四ヶ月、三十九年一月資本金千弗にて第七街の地を買ひて之に家屋を建て、西洋風呂及び果物店を開業し、之を經營する事三年、利益を得る事少からず、已にして之を他に譲り、現時二人共同にて百六十英町に麥を作り、三人共同にて百五十英町に砂糖大根を耕作して、此地に於ける成功者と稱せらる。

△上田久吉 和歌山縣日高郡丹生村の産にして、明治八年生る、三十三年六月バンクーバーに上陸して此地の鮭漁に従事し、十月砂市に來り、附近の鐵道に働く事八ヶ月、再び晚香坡に至りて鮭漁に従事したりしが、後ポートランドに來り、或は鐵道に働き、或は馬鈴薯掘りに従事し、當時労働の乏しきを以て麥粉團子にて飢餓を支へ、屢々困難なる境遇に接したる事あり、途中種々の労働を爲して漸くにして桑港に來り、鐵道の働さに従事する事二ヶ月、其れよりローサンゼルスに來り、轉じてオクスナードに入り、大根園の労働を爲す事一年、明治三十七年支那人と共同して大根園の事業を受負ひ、又徳山民助と共同して西洋酒屋を始め、麥酒、ウキスキー等の杯

賣を爲す、其資本額六千弗と稱す、三十八年市内に敷地を借り、家屋を新築して、日高旅館及玉場を開業す、此資本金二千四百弗といふ、別に明治四十一年後藤伴次郎等と風呂屋及び果物店を經營し、他に五人協同にて四百英町の大根園及び秣草園を經營し此地方に於ける成功者として知らる。

△徳山民助 岡山縣小田郡吉田村の産にして、明治八年九月生る、明治三十年桑港に上陸し、所に労働して、三十四年二月、オクスナードに來り、大根園に労働する事暫くにして、其年敷地を買ひ、家屋を新築して徳山旅館を開業し、食料雜貨店を兼業す、後ち砂糖大根園の受負事業を爲したるが、後三百六十エーカーの大根園を經營する事二年、四千弗の損失を爲して、更らに百八十一エーカーの大根園を耕作して千八百弗の利益を得たり、現に馬十頭及農具一切の資本額四千五百弗に上れり、また此地に於ける大事業家として知らる。

第九節 サンタバーバラ郡

サンタバーバラ紀行

明治四十一年八月二日、エスビー列車に塔じ、オクスナードを發して、サンタポーラ四島氏のキャンプを訪ふ、半日の清談、日の園樹に傾くを知らず、氏は最も穩健なる實業志想を有し、其理想の純潔にして、社會に貢獻せんとするの氣、胸中に躍如たるものあり、午後三時キャンプを辭

し、ヘンス停車場より汽車に搭じ、サチコヒ、モンタルボ等の驛を通過して、サンタバーバラに向ふ、已にしてモンタルボ以北、青靄遠く開け、エドフの驛より海濱に出づ、夕陽西に傾けども、濃霧太平洋の上を鎖して、水波渺茫の大觀を塞ぎ、灰黒色の雲長く引きて、狭き水面に連立てば、磯邊の眞砂ザワ／＼と響きぬ、間もなくベンチュラに達す、此地はベンチュラ郡の首府にて、市街整頓し、街上に馬車鐵道あり、此地未だ日本人の來り住するものあらずといふ、此所を離れて汽車は再び、海邊に沿ふて馳す、風景次第に美を加へて、海の藻屑の波に打寄せられたるが、彼所此所に小さく塊まりて、白砂の上に斑紋を作り、其紋砂の盡きんとする頃より、山は海濱に迫りて聳え、山崖漸く峻にして、風光更らに美を加ふ、磯邊の岩石、小さきものは、狗兒の如く、大なるものは豚の蹲まるに似たり、海潮に濕るゝ沖津石の、干るよしもなき光景は、戀に嘆きし歌姫の袖の涙の類なるべし、サンタクラズの島山、今日は雲に隠れて見えざれども、日光西の雲間、を洩れて、洋上の波を射るさま、金粉燦然、散りては梨子地の模様を刺ぎ、進りては、波上に黄龍を走らすが如し、灰紫色の雲、颯つと其傍らより海の隈を彩りて、其下には群千鳥の卒となり、健となり、重なりてはまた亂るゝなり、カーベントリヤに至れば、綠樹影清き一村の風景あり、サンマールランドは小さき市街地にて、今日の日曜を海濱山野に遊び暮らして、歸り來る男女多く、中にも自轉車の前に、三歳許りなる小兒を乗せて、後ろに夫婦の乗りたるさま、罪なくおかしく

見えぬ、此邊の山、花崗石の疊々として相重なり、小さき常盤木の其間に生ずる趣き、頗ぶる風景を添ふ、ミラマの驛には、美しき庭園驛の附近にあり、ミラマホテルの庭園なるべく、青草色深く、紅花露鮮かなり、モンテシートを去りて、再び野山の麓を通過し、海上の風景一段の美を加ふるが如し、已にして長岬の遙かに横はるあり、一灣の水色、波瑠璃の如く、連山繞る所、市街の人家稠密なるあり、汽車は進行を緩めて、停車場の近きたるもの、如し、是れぞ乃ちサンタバーバラにて、左の窓には、小蒸汽船の一二隻、錨を下したるを見る、已にして汽車の停車場に着するや、人は多く此所に集ひて、紳士貴女の風采、自づから都めきたり、女の冠りたる帽子杯、夏向の涼しげに、着けたる衣も薄色の物清げなるが多し、實にや沿岸の風流地として、常に東部の客、避寒の爲めに此地に來るもの多きを以て、停車場の設備殊更調ひ、待合室等の奇麗なる事玉を敷きたるが如し、予は此驛にて下車し日本人街に至り、某旅館に投す。

八月三日、オールドミッシヨンと記したる電車に乗り、此地西班牙時代の古刹を訪ふ、高山其後に聳え、土地自づから俗蕪を脱して、市街地の高所を占有し、其附近に尙ほ古壁の崩壊して兵燹に罹りたる跡あり、然れども本堂及び之に接續したる庫裡、尙ほ嚴然として當時の形状を維持し、之をサンデーゴ及びキャピストラノ等の寺院に比すれば、最も完然なる昔時の状態を存するものといふべし、寺院建築の年代に付ては、諸説一ならざれども、ファーザーオーキーフは、其記録

に於て記して曰く、千七百八十六年十二月四日、神聖十字架を建て、翌年の春より寺院の建築を
 始めたるものなりと、然れども當時の建築物は、千八百十二年地震の爲めに破壊せられ、千八百
 十五年石造の建築物に更めたるものなりといふ、此寺院は元とフランシスカン派の監督に屬し
 此附近に於ける西班牙の殖民地を支配したるものなり、寺堂の長さ百七十呎、幅四十呎、高さ二
 十八呎あり、寺壁は砂岩石の立方體より成り、之を支ふるに花崗石の扶柱を以てす、其堅牢なる
 事、百餘年の星霜を経て、毫も腐朽崩潰の所を生ぜず、頑強單直の風姿、堂々たる丈夫の時流
 に卓立して、昂然時流に關せざるもの、如し、長堂の左に二個の高塔あり、三層の階を爲して、
 城樓の屹然として地を抜くが如く、其上層に二個の巨鐘を懸く、其大なるものは千八百十八年の
 鑄造に係り、小なるものは千八百八年のものなりといふ、正面にバトロン、サンタバーバラの肖
 像あり、庫裡は禮拜堂と接して、嚴めしき連柱を前にす、室内の裝飾粗樸にして、古雅掬すべく、
 天井の材は柏樹を用ひ、其彫刻と粉飾とは、何れもインデヤン土民の手に成りたるものなり、祭
 壇にサンタバーバラの木像あり、側にサンタアーン、サンタジョキムの塗像あり、下にフレッド、
 パーギンとサンタジョセフの像あり、柱上にサンタドミニック、サンタフランシスの像あり、右に
 千八百四十六年の製作に係る、加州最初の監督牧師の用ゐたる紀念の机あり、禮拜堂を出づれば、
 其所に古き墓地ありて、印度人多數の骨を此所に埋む、西班牙人を葬りたる墓石また其邊にあり、

此所を去りて、案内の寺僧は、我等を高塔の下に導き、鍵にて其所の戸を開けば、石の階段あり
 て塔内に登り得べし、階を拾ふて懸鐘の所に達すれば、サンタバーバラの市街、パノラマの如く
 其脚下に開展し、頭を回らせば、サンタニーツの連山、峨々として其後ろに聳え、餘脈南東に走
 りて灣の南を擁し、西北の方直ちに太平洋の水に接して、水天一色渺茫際なく、サンタクラズ
 の島影、雲烟模糊の間に没す、余懸鐘の下に立ちて此風景に對し、更らに古色蒼然たる巨鐘を撫し
 て、人事の興亡盛衰、古今揆を一にし、東西趣を同ふするを嘆せずんばならず、若し我國南朝の
 遺跡を訪ひたる詩人をして、杖を此地に曳かしめむか、彼また「雪眉老僧時止筵、落花深所
 說南朝」の感を惹かさざらむや、あゝ南風遂に競はず、西班牙の殖民政策夢と消えて、南太平洋沿
 岸の地、獨りヤンキー氏の文明を恣にするあり、余往時を追憶すると共に、宇内民族の消長
 と、現時の太平洋問題に想到して、感慨禁すべからざるものあるを覺ゆ、已にして階を下り、寺僧
 に謝して歸る。

八月八日、此夜バツターホテルの前、バームツリーの相并びたる所、鐵欄に凭りて海上の風景を
 見る、新月空に懸り、洋上の水之に映して、水天の分界殊に鮮明なり、波白く、風清く、恍惚と
 して宇宙の偉觀に打たる。
 八月九日、午後棧橋の東、濱邊の砂上に横はりて、海上の觀望を恣にす、側らに米人の男女あ

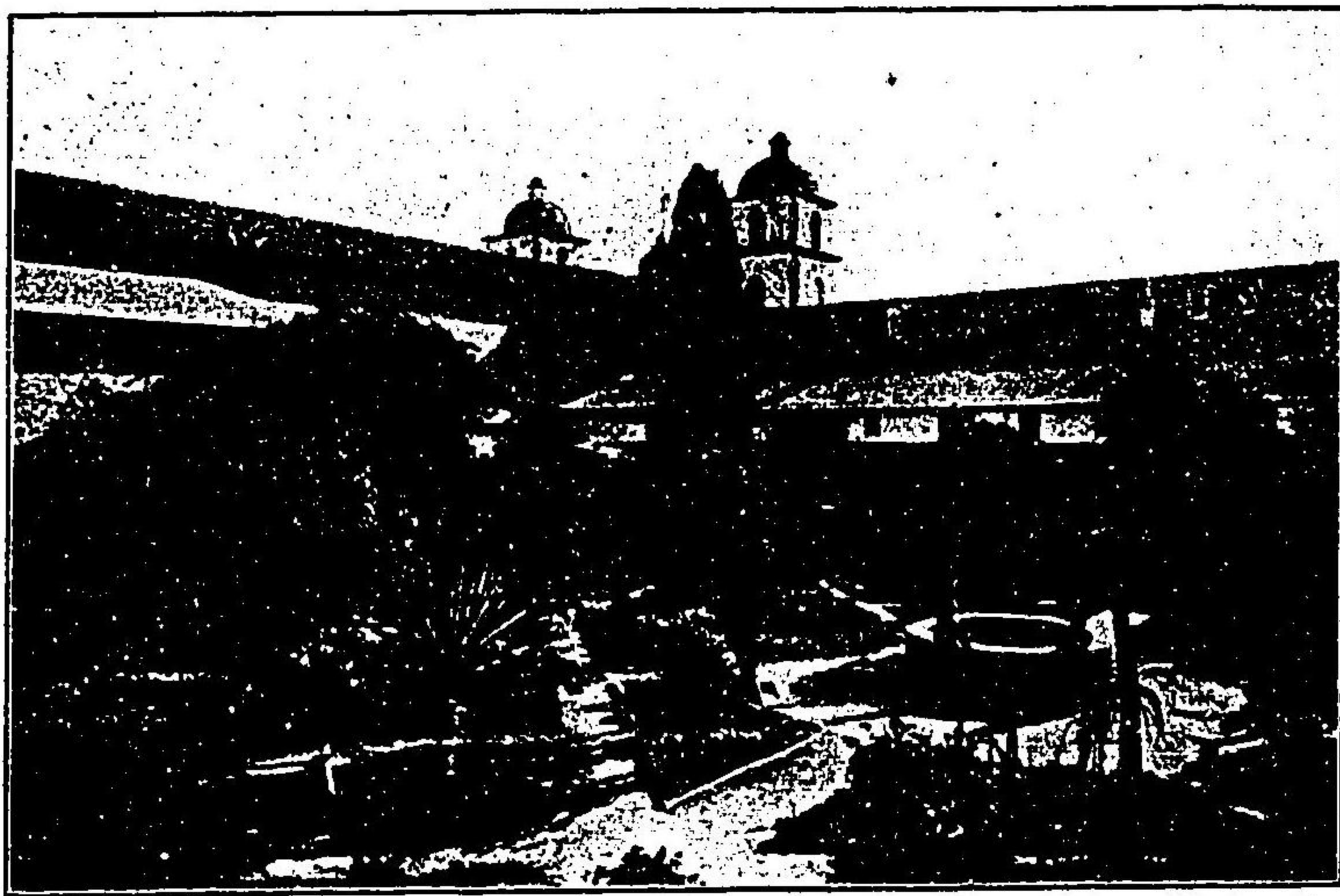
り、彼等の喃々たる情語、余に於て何の關する所かわらむや、西班牙人の小兒四人、母と姉とに従ひ、嬉々として波打つ際に飛び戯るゝさま、罪なくて愛らしく見ゆ、左にはサンクニーツの餘脈遠く水天の間に紫色を帯び、空は花色地に、銀鼠の横雲を刷きて、青瑠璃の如く透徹りたる底には、樺色の古代錦に、琥珀の艶を研ぎ出したる如き雲の断片堅に浮びたり、海水は此雲と、山の色とを映して、山の裾より濃紫の色深く染め出され、山影の盡くる所より、花色なせる空の色之に代りて、此方は洋の色一際青く、春日の如き風なれども、さしもに太平洋の水は、一面の單調を破りて、波の頂さには一樣に白玉を碎き散らせるなり、造化は开が宏美の彩絹を我前に開展せるが如く、濱邊に寄する雌波雄波は、此一大美術的織物の、一端を飾りたる絹房の、白く風に揉まるゝ風情なり、此織物の上を掠めて、二三の海鳥、飛んで雲に入れば、孤帆何れよりか來りて、白一點の趣を現出するあり、は彩色濃厚なる、米國式油繪の、仇事ならざるを、今更らに感せざるを得ざらむ。

八月十日、此日また海岸を散歩す、市の西を限れる一帯の丘陵あり、其一端海岸に盡くる所、危壁海に峙ち、崖下に通路あり、奇巖之を挟んで海中に屹立す、之を岩と稱す、其名の塞壁を意味するが如く、海岸通路の咽喉を爲す、崖丘の上に登れば、松樹林を爲し、洋上の風遠く來りて清冷言ふべからず、此日サンクニーツの島山、雲霧を拂ふて青黛描くが如く、右には雌壁

長く連りて海濱を擁し、崖下の白砂遠く走りて帯の如く、長帷盡くる所、外洋の烟波渺茫として極まる所を知らず、左は則ち市街整然として山に據り、水に對し、雜然として壯麗美宅樹間を點綴す、其最も海岸に接して、堂々たる一大建築物居然として蟠起するもの、乃ちバツターホテルにして、赤瓦黄壁、宛然として、巨城の登ゆるが如く、西班牙時代舊教派の寺院に象りたるを以て、典雅壯麗一種の觀を呈す、建築は五階の層樓を爲して、客室の數七百、優に千人を宿泊せしむるに足れり、毎夜八千の電氣燈を點じ、九十四人の傭人を使用し、冬期宿泊者の多きときは、賭場の料理人及給仕人を合して、百三十名に上るといふ、周圍に大庭園を廻らし、庭上の綠艸鹿の如く、ジュレニヤムの紅花燦として燃ゆるが如し、前に波斯菓の列を爲して一種の偉觀を爲すあり、雌丘に添ひて市の公共建築物あり、ボーリングアレー及び浴場の設備あり、其側より一橋の海中に突出するあり、橋の盡くる所に小亭あり、此橋亭、脚下の岩、岩と相對して、頗ぶる風景を添ふ、橋の東、男女群を爲すもの乃ち海水浴を爲すものにして、其東更らに一大棧橋の波上に横はるあり、乃ち漁船の繫留所にして、棧橋の上には専用の倉庫を建つ、其以東白砂迢々として、遙かにミラマ、モンテシートの海濱を望むべく、山光水色、恰も畫裡の光景を有す、已にして丘を不り、海濱を歩いて家に歸る。

八月十四日 此夜海上雨氣を帯び、東方に雲霧ありて月の昇る事遅く、漸くにして上れば、霧端

市ラバーパタンサ 跡遺の代時牙班西 園庭のシッミドルーオ



市ドイサーバリ 大砥道如の種四く花樹鬱々 いた々

娥の面を蔽ふて、光り紅絹を懸くるが如く、淡黒の雲开が紅球を繞りて、光は海上の波に映せず、
 棧橋の影、夢の如く其前に横はりて、模糊たる風景却て雅趣を呈す、已にして月棧橋の上に懸れ
 ば、汀の波に金鱗閃々として映じ、靜波動搖する時、金鏡碎けて水中に漂ふが如し、棧橋の盡く
 る所より一線を劃して、向ふは漆の如く黒けれども、此方は漣の白みて、名刀の燒刃の如く、
 其光り凄清を極む、西には紅燈船に掛りて、海上の夜氣うたゝ靜かなるを見る、月夜の珊瑚港、
 其風景の何ぞ優婉なるや。

サンタバーバラ郡日本人發展地の調査(其二)

サンタバーバラ郡は南加州の北に位し、面積二千八百三十平方哩、サンタニーツの山系、郡の南
 部を東西に横ぎり、サンラフェルの山脈、郡の北東に聳ゆ、サンタニーツ山系の南は乃ちサンタ
 バーバラ平原にして、此山系とサンラフェル山系の間をサンタニーツ平原と稱す、サンタバーバ
 ラ平原は十萬エーカーの地面を有し、サンタニーツ平原は、十二萬エーカーの地面を包容す、郡
 の西部は之を二分して、北をサンタマリヤ平原といひ、南をラムボーク平原といふ、此二平原の
 間に挿入せるもの之をロスアラモス平原といふ、二の河流あり一は、サンタニーツ平原より西流
 し、ラムボーク平原を貫きて海に入り、一はサンタマリヤの北部に發して、サンルイスオビスポ
 郡の堺より海に入る、土質は沖積土及び粘土にして、果樹、蔬菜、穀類に適す、然れども郡中山

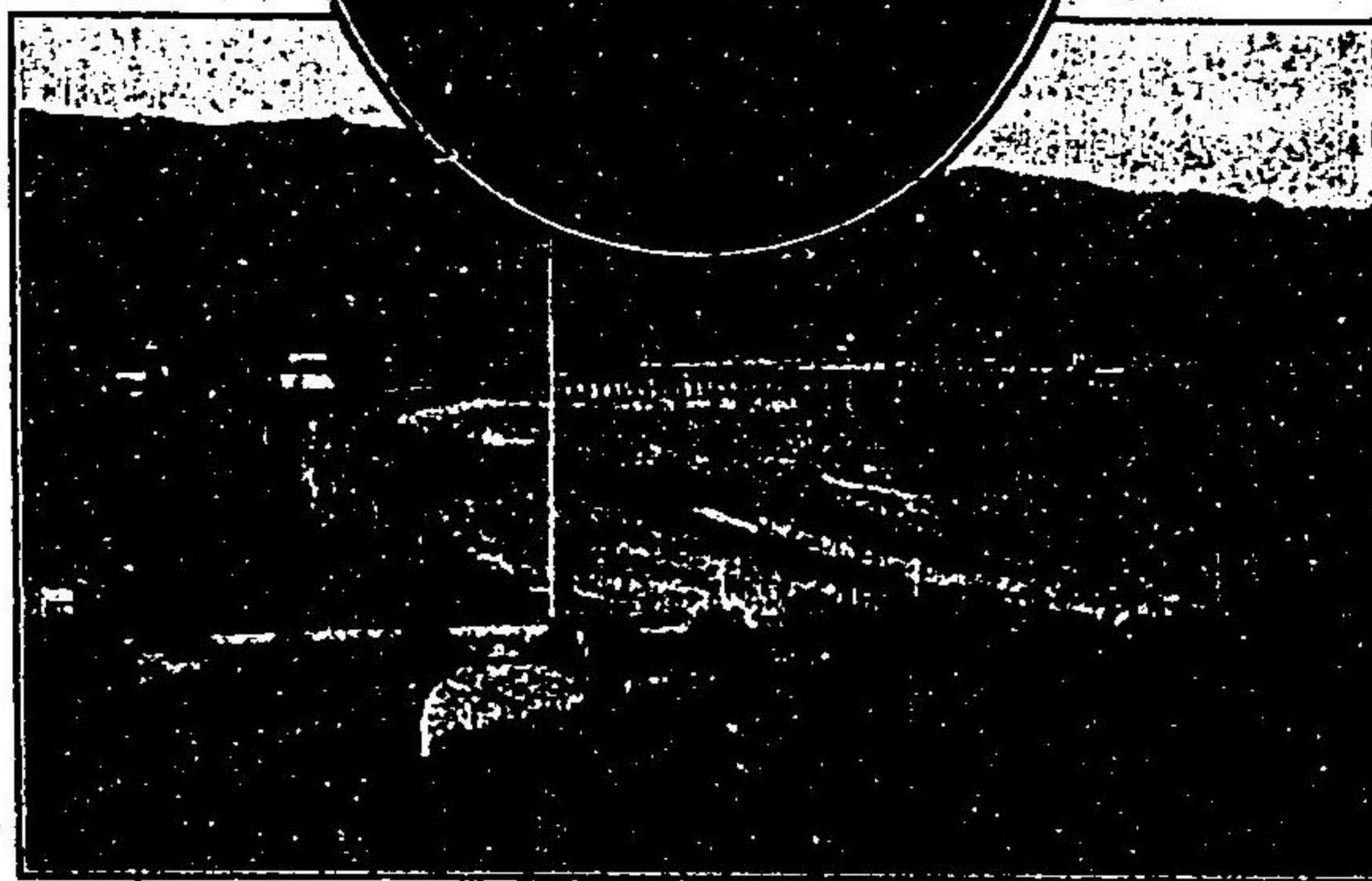
オクスナード 農園契約者 古閑柳平



サンタバーバラ 日本人會長 伊藤永司家族



藤盛商店主人 藤盛貞記



窓眺の濱海ラバーパタンサ

サンタバーバラ 朝倉旅館主 朝倉仙太郎家族



市ドーナスクオ
吉久田上主店と店酒田上



館旅田山 プッロドーガ

岳多く、産額他に比して小なり、郡内の産物としては、林草、麥、小麦、砂糖、大根、辛菜、林檎、橄欖、檸檬、胡桃、豆の類にして就中、サンタマリア平原は十萬エーカーの地、砂糖、大根、穀類、豆、柑橘類及果樹を産し、ロスアラモス平原は、四萬英町の地大麥、小麦、胡桃、牧畜、酪農業を主とし、ラムボーク平原は二萬三千エーカーの地野菜、林檎等の果樹を栽培し、英國種の辛菜は此地方の特産にして、また牧畜、酪農業盛なり、サンタニーツ平原は交通不便にして未だ農業の發達を見ず、サンタバーバラ平原は氣候の溫和を以て其名を知らる。

サンタバーバラ 羅府の北百十里、サンタバーバラ郡の首都にして、加州太平洋岸の勝地として名を知らる、南太平洋鐵道及太平洋汽船會社の航路あり、人口一萬二千餘、氣候溫和、夏期清冷、冬期溫暖なり、毎年十二月より翌春四月に至るの間は、東部其他より避寒の爲めに來るもの頗る多く、此地の繁榮期とせらる、日本人の此地にあるものは、庭園働き、家内労働者を主とし、附近に農園少く、從て農業者を見ず、西班牙人、墨西哥人の労働者多きを以て、日本人労働者の需用に限りあられども、普通の労働賃金は、他に比して低からず、現時の定住者百七十餘名、附近の労働者三百名内外、市内營業者美術店一、西洋料理店一、日本料理店及飲屋二、理髮店二、湯屋一、玉場二、桂庵二、大工一、旅館四あり、其重なる營業者は左の如し。

- 商店 伊藤美術店 藤壺商店 眞鍋食料雜貨店

洋食店 東京洋食店
旅館 福島旅館 朝倉旅館 瑠市旅館 富田旅館

瑠市日本人會は明治四十年二月の組織にして會員二百名あり、美以教會はオクスナード教會より出張して傳道に従事し、組合教會は、ミッセスバトラの盡力に依て成立せり、今より二十年前鹿兒嶋縣宇都宮某なるもの、此地に對白人の女郎屋を始め、後ちサンタクラズ嶼に大規模の、漁業を起して失敗したる事あり、其後一時日本人の事業を爲すものあらざりしが、明治三十五年本良ニバツターホテルに勞働し、其監督の下に七八人の勞働者を使用するに至り、日本人の此地に來るもの漸次に増加し、明治三十六年伊藤美術店起り、神田橋喜三東京レストラントを始め、三重縣人竹内四郎ジョンソン果物會社に入りて其配下に勞働者を使用するに至り、三十八年熊本縣人丸山某桂庵業を始め、三十九年樽谷某旅館を開き、野口賢三又瑠市旅館を開業し、四十年朝倉旅館藤壺商店等を開業し以て現時の状態を爲すに至れり。

モンテシート サンタバーバラの東に接し、日本人の庭園働さを爲すもの多し、明治三十八年以來熊本縣人丸山某其配下に二三十人の勞働者を集めて此種の勞働受負を爲す、他にキャンプ及農園を有する者わらず。

『サンタクローズ島』 サンタバーバラより海上二十五哩を隔つ、島の周圍七十哩、現時伊太利

人某の所有にして、日本人の漁業に従事するもの數人あり、昔西班牙時代に於て印度人を此島に流して之を餓死せしめたる跡あり。

『ゴレンタ』 サンタバーバラの西に當り、平素二三十人の日本人の伐木に従事するものあり、胡桃收穫時期には日本人勞働者の此地に入るもの多し。

『カーベンチュラ』 モンテシートの南にして胡桃園多く、東某のキャンプありて常に十數人の勞働者を使用す、胡桃收穫時期には日本人勞働者を要すること少からず。

ガードロッツ紀行

十二月三十日午後六時四十五分余遂にサンタバーバラを去て、ガードロッツに向ふ、鹿兒嶋縣の青年宮原阿庵氏、余を停車場まで見送り、果物を余が膝上に置いて去る、汽車は間もなく漸々として進行を始めぬ、日已にくれて車内には生面の乗客燈下に相對するなり、時に車窓の外、寒月朦朧として唯だ曠野の寂寥たるを見る、已にしてゴレンタ、ガビオタの部落を過ぎ、南北加州の分界點たるポイント、コンセプションを迂廻し、九時十五分サルフの海邊に出づ、夜色沈々、洋上浪白く、寒月光微にして、只だ波聲の轄々たるを聞くのみ、已にして余はストーブの暖氣に襲はれ思はず車中に假睡して目的の驛を乗越したり、車掌のサンルイスオビスポと呼びたるに、急ぎ其驛に下車し、戸を排して待合室に入る、暖爐の邊、眼光の險惡なる墨其西哥人三四人あり、深

夜獨り異人種の間に入る、心中多少の警戒なきに非らず、已にして桑港發の汽車は十二時四十五分を以て到着せり、乃ち此列車に搭じ、一時三十分ガードロップの驛に下車す、停車場は市街地を離れたるを以て、深夜道を尋ねべきものなし、遂に待合室に横臥して夜の明くるを待つ。

十二月三十一日 早朝待合室を出で、徒歩數町にしてガードロップ日本人街に着し、山田旅館に投ず、此日降雨終日、歲暮に暮れんとして、客窓轉た無聊に堪えず、此夜大石與次郎氏來訪す。

一月一日 此日ガードロップに於て明治四十二年を迎ふ、旅館には宿泊者を集めて新年の祝酒を酌むあり、余もまた之に列す、恰も日本に於ける正月の儀式と異なる事なし、此日また降雨止まず、二三の訪問者あり、避地の旅客、新年の廻禮等に就て何の心頭を煩はすものわらず。

一月二日 和田商店其他を訪問して新年の祝盃を酌まる。

一月三日 此日大石與次郎氏と共に馬車を驅りて森銀之助氏を訪ふ、昨雨僅かに霽れて道路未だ乾かず、遠山雲低く、只だ際涯なき園地の茫漠たるを見るのみ、四哩にして森氏の宅に達す、田中梅吉、宮屋醇一氏等また年始の廻禮として森氏の内に來る、一同祝盃を受け、夕方大石氏と共に旅館に歸る。

一月四日 此日曇天、午前八時大石與次郎氏來り、海濱に遊び玉は馬車にて案内さすべしといふ、乃ち旅館を出で馬車にて大石氏の農園に至る、園地の中央に白色の建築物數棟あり、是れ大

石氏のキャンプにして、白人の農夫十頭の馬を御して園地を耕すものあり、行くこと二三哩にして、一の牧場を横ぎり、大石氏の開墾地に達す、氏は此所より下車し、中村吾平氏をして余を海邊に案内せしむ、行く事三四哩にして、一大沼澤あり、水之に溢れて蘆葦高く生じ、雨水汎濫して、馬脚の半を没し、深さ車軸に至れり、斯くて水中を行く事一哩、蘆葦の間、水禽の浮びたるあり、光景畫の如きを覺ゆ、沼澤盡き、路少しく上りて、白砂の丘陵に出づ、此邊は有名なる海濱の砂漠地にして、滿眼一白、砂丘蜿蜒として起伏し、其長さ幾十哩といふを知らず、諸丘の上、古き蔓草を生じ、色彩の配合頗る美なり、所々に小流あり砂丘の間を流れ、清冽掬すべく、仰げば蒼穹高く澄み、遙かに望めば起伏せる幾百の砂丘、皓々として雪の如く白し、宇宙寂寥として只だ馬蹄の砂を嚼むを聞くのみ、行く事暫時にして、忽ち見る丘砂の盡くる所、浩蕩たる大海の水、波濤洶湧して、天地を震盪し來るあるを、見渡せば一天雲低く、巨濤山の如く湧きて、水面粼粼陸地よりも高きが如し、車上始めて此光景に接するや、魂飛び魄驚き、中村氏をして馬を控へ、車を停めしめて、此凄壯たる光景を諦視す、名にし負ふ、水は太平洋四千哩の風を受けたり、寄せたる波のあとに返れば、狂瀾となり、怒濤となりて、百萬の水瓶一時に碎け、千仞の飛瀑、岩を劈いて、白馬の長陣一時に殺到するが如し、固より陸地は一面の平砂なれば、打寄せたる波は急に返らずして長く延び、脈波の相重ると七重八重其間に巨流、急湍あり、轟々として衝動旋

回し、鞍轡として壯絶怪絶の偉觀を極む、已にして靜かに馬を進めて海濱を行く、顧みれば雨後の青山紫霞を帯びて、山頂の雲と相離るゝ所、赤彩空に映じて其美觀云ふべからざるものあり、馬首の向ふ所、漠々たる霧を隔て、長橋の横はるものあり、行く事二哩にして其橋に達す、近傍に、一大旅館あり、夏期海水浴の爲め來るもの此旅館に宿泊すといふ、橋上に立ちて四方を觀望すれば、碧波遠く湛え、陸には白砂迢々盡くる所を知らず、北方幽かに、黛色の横はるものあり、之れピスモの浦村なるべし、二人は馬を橋袖に繋ぎ、車より下りて遠干潟となりたる砂濱の邊に出で、此地有名の産物たる大蛤を採る、此所の蛤は其大なるもの、周圍一尺五六寸に達するものあり、僅かに十分間にして忽ちに數十個を獲たり、乃ち之を車上に運び、馬を驅つて歸途に就く、時に日未だ晴れざれども、遠山雲を拂ふて、野外の光景うたゝ快潤なるを覺ゆ、午後三時山田旅館に歸る。

サンタバーバラ郡日本人發展地の調査(其二)

「ガードロップ」サンタバーバラ郡の北、南加州の西北隅に位置し、土地の狀態已に北加州に似たる所あり、羅府より百九十八哩、桑港の南二百七十七哩を隔つ、近時大根砂糖製造會社の設立せられ、附近一萬英町の地に砂糖大根を耕作せるより頗る開發の氣運を生じ、會社が日本人労働者を使用するに至りて、日本人部落一時に發達し、今や全く日本人の市街地を爲すに至れり、會

社の創立は千八百九十九年にして、初め二百萬弗の資本額なりしが、現時は二千萬弗の資本を有し、會社は自ら一萬エーカーの土地を所有して、自ら其原料を耕作し、自ら製糖事業を爲すものなり、此會社の株主は始め北加州アラメダ郡に大根砂糖製造業を起し、其事業の緒に就くや、此地に同様の事業を創めたるものにして、同一の會社が大根の耕作と製糖業を兼業するはオレゴン州に於て一會社あるのみにして、他に其類を見ず、是れ此地の地質他と異にして、之を個人の耕作に委するの困難なるに依る、現時此會社が年々日本人労働者に支拂ふ所の金額は無慮二十萬弗と稱す、此地日本人の事業は左の如し。

△大根園受負業

森 銀之助(兵庫縣) 受負契約地面一萬英町

此内

- 第一號區 森事務所直轄
- 第二號區 廣川純一(廣島縣)受持
- 第三號區 廣田萬四郎(福岡縣)受持
- 第四號區 前田吾市 受持
- 第五號區 田中梅吉(廣島縣)受持
- 第六號區 廣田萬四郎(愛媛縣)受持
- 第七號區 大石與次郎(熊本縣)受持
- 第八號區 大洲安次郎(廣島縣)受持
- 第九號區 奥津改造(神奈川縣)受持
- 第十號區 奥津改造(神奈川縣)受持

△借地耕作者

他に現金借地を爲す獨立的の農家七軒、此借地總面積六百五十六エーカーあり、玉葱、大根、馬鈴薯、其他野菜等を耕作す、其重なるもの左の如し。

- 湯川次郎(和歌山縣) 八〇エーカー 佐藤熊太郎(熊本縣) 一八〇エーカー
- 大石與次郎(熊本縣) 一六五エーカー 田中梅吉(廣島縣) 九〇エーカー
- 高田組合(熊本縣) 四〇エーカー 北島兄弟(和歌山縣) 三〇エーカー
- 東次郎(和歌山縣) 三〇エーカー

△市街營業者

日本人の營業者として、商店二、旅館三、料理店二、玉場四、理髮店一あり其重なるものは左の如し。

- (商店) 和川兄弟商會 北島商店
- (旅館) 山田旅館 中瀬旅館 和川旅館
- (料理店) 北島料理店 中瀬料理店

△ガードロップ日本人社會の沿革

此地始めは瑞西人、土耳其人の牧場なりしが、サンタマリア方面にありたる支那人此地に來りて野菜業を始め、以て支那人街の起源を爲すに至れり、已にして大根砂糖製造會社の創立せらるゝや、始めて日本人の居住するものあるに至る、會社は創業の際、種々の困難に遭遇し、大根園に

灌溉すべき水を供給する爲めに蒸氣機關を設け、其燃料に石炭を使用せざるを得ず、而かも當時石炭の價廉ならざると、之に使用する人夫の賃金多額に上りたる爲めに、會社の經濟は頗ぶ窮乏を呈し、現時六十弗の價を有する株券は殆んど五弗を稱したるが、後ち石炭に代ふるに石腦油を以てし、之と共に煙管掃除夫等の給料を節減するに至りて、遂に其窮乏を脱し、現時の隆盛を見るに至りたり、會社が此窮乏を脱すると共に、年々大根園労働者の需用を増加し、安孫子久太郎等労働者を率ゐて桑港より此地に入り、茲に始めて日本人労働者供給の道を開き、此年志垣某森銀之助等また労働者を率ゐて、此地に入る是に於て、此地の労働界は、日本人、支那人、墨其西哥人の三人種間に競争を見るに至り、大根園引きの時期には別に異状を呈せざりしが、愈よ首切の時期に入るや、其競争は益々激甚にして、勢ひ日本人間の競争を見るに至りたり、當時安孫子派に百三十人、志垣派に七十人、森派に六十人の労働者あり、而かも森派の六十人は何れも屈強の労働者にして、他の二派の労働者には書生連の多きが爲めに、其優劣特に著しく、森派の六十人を以て、安孫子、志垣の二百人に對すれば、労働者の數は、三分の一に達せざるも大根を運搬すべき荷車十四臺の内十一臺は常に森派の方面に使用せられたりといへば、桑港方面の書生労働者が、森派の労働者に全く對抗力のあらざりしを知るに足らん、乃ち森派は他の二派に對し、頭數に於ては三倍の對抗力を示し、労働の結果を計量すべき大根運搬荷車の數よりすれば三に對

する十一、乃ち殆んど四倍の優勢を示し、四と三を合して、一に對する七の比例を眼前に示したれば、志垣の配下は勞働期の終らざるに早くも旗を捲いて遁竄し、辛ふじて其殘孽を支へたる安孫子派も、此年を限りとして、彼等の領土を森派に致さざるを得ず、是れ明治三十年の事にして、翌三十一年は、志垣の配下にありたる萩谷某、野地某等一部の契約を會社に結び、森銀之助また其一部を受負ひたれば、再び激烈なる三派の競争を演出し、三十二年に至りては、野地某去りて森、萩谷の二派、鎗を削りて、對戦するに至れり、是よりガードロップの勞働地は、一時二人對壘角逐して、一勝一敗、恰も戰國の兩雄天下爭奪の活劇を演ずるが如きものあり、乃ち明治三十三年、森の志を得ずしてコロラード州に去るや、配下の田中梅吉は、森の領土を襲ふて萩谷に對抗し、三十四年萩谷の失敗して去るや、三年間二分したる勞働地は、一變して戰國分亂の時代を現出し、三十五年受負入札の際、十人の競争者を生じて、八人の落札者を出すに至り、地方の同胞社會は、此時期を名けて八天下の時代と稱す、此時に於て、城福茂平、佐藤熊太郎はガードロップに據り、田中梅吉ブナテを占有し、伊井禮造、大伴長太郎は、平及讃岐の組合とベタラビヤに相對し、シニューマンに森銀之助あり、バレーランチに田中梅吉淺野久助の組合あり、彼等は此地方勞働界に於ける一騎當千の勇者、何れも同志を糾合して全部の耕地一萬エーカーを一手に契約し、各其覇を稱せんとしたるに似たり、而かも老功の森銀之助は、明治四十一年を以て、八

天下を打て一九とし、遂に此地勞働社會の月桂冠を得るに至りぬ、是れ加州勞働界に於ける一奇觀にあらざるや、一年中最も勞働者を要する時に於て勞働者の此地に入るもの五百人を下らず、之と共に商店、旅館、料理屋等の營業者相集まりて市街地の状態を爲すに至り、目下百人以上の定住者を見るに至れり。

サンタバーバラ郡成業列傳

△伊藤永司 長野縣北安曇郡池田村の産にして、元治元年三月生る、後ち東京市牛込區富久町に轉住す、明治十六年高等師範學校に入り、十九年之を卒業し、後ち長野縣師範學校教諭に任せられ、更らに同縣上高井郡視學に任せられ、明治二十一年十一月學習院助教授に任せられ、三十五年教授に任せられ、在職中教本の編纂に従事す、曾て宗教より獨立せる歴史の道德を研究せんとするの志あり。已にして基督教國に於ける史的發達の道德を研究せんが爲めに海外渡航の志を生じ、明治三十六年三月遂に米國に來りて美術店を開業し、直接米人に接して其國民の情性を察知せんと欲す、乃ち羅府、バサデナ、サンタバーバラに美術店を開きて盛に營業に従事したるが、其後業務の繁雜を避けんが爲めに、羅府、バサデナの美術店は之を閉鎖して、専ら力をサンタバーバラの一商店に集め、現に此地に於ける日本人唯一の美術店たり、其のサンタバーバラに在るや、常に日本人社會の爲めに盡し、明治三十九年日本人美以教會の創設に盡力し、此年日本

人會を組織して其會長に推され、四十一年五月組合教會に屬する日本人學生の監督を委嘱せられ、此地方に於て頗る名望を有し、最も同胞社會の爲めに重きを措かる。

△藤壺貞記 熊本縣鹿本郡米野嶽村の産にして、明治十五年生る、歳十八歳にして布哇に渡航し、居ること二年、其れより桑港に上陸し、ヘイト街ジョルダンなるもの、家庭に備はれ、スクールボーイとして労働し居たるが、主人ジョルダン氏は、桑港メトロポリタン、商業大學の教師たりしを以て、之に入學せんとするの志を起し、先づリンコン公立小學校に通學して其八級を卒り、遂に所期のビジネスカレッジに入學するを得、其修學中は、早朝五時に起きて校舎の掃除を爲し、學科を終りて歸るや、家内の労働に従事したり、校舎の掃除は、乃ち毎月十弗の月謝に當るものにして、其他の學費毎月十二弗餘は、是れ彼れが勉學の餘暇を以てする労働に對し、ミツセス、ジョルダンの苦心して彼の爲めに支給せる所なり、此勤勉兒にして、此篤志の主婦あり、藤壺の今日ある實に彼女の恩義に依るものにして、彼の品性と努力は彼女をして此義侠を起さしめたるや知るべし、已にして彼は遂に其學課を卒業し、厚意を謝してジョルダン氏の内を出で、後ち土地賣買所の事務員となり、また大陸災害保險會社の備員たりしが、明治四十年四月、サンタバパラに來りて藤壺商店を開業し、食料雜貨を販賣して地方の信用を有し、現にサンタバパラ日本人會の幹事たり。

△朝倉仙太郎 熊本縣鹿本郡米野嶽村の産にして、明治十五年移民會社の勸誘に依て、同志十五人と共に米國に渡航せんとし、英領ゾイクトリアに上陸せり、已にして米國の國境ポータンセンに達するや、彼等は始めて移民會社の甘言に給かれたるを知れり、當時米國には日本人の労働者を要せず、一行の徒其前途を憂慮して、其中十二人はゾイクトリアに引返へして本國より送金を促がし、其間海濱に出で、貝を探り其汁を吸ひて僅かに生命を繋ぎ、辛ふじて本國に歸りたるが、朝倉は他の二人と共にゾイクトリアに歸らず、死を決して米國に入らむとし、涙を揮て十二人と訣別し、國境を超へてタコマに着したるが、三人固より英語を解せず、朝より暮に至るも未だ日本人の何れにあるを知らず、飢餓已に迫てまさに昏倒せんとす、偶々一人の黒奴來りて之を伴ひ日本人の洋食店に至り、始めて蘇生の思を爲したりといふ、已にしてポートランドに至り、此地に留まる事三週間、漸くにして伐木の働きに入りたるも、午前五時より午後九時までの労働に對し、八ヶ月の賃金、僅かに十一弗二十五仙を剩し得たるに過ぎずして、桑港行の汽船賃には尙ほ一弗の不足を免かれず、然れども彼は其不足額を借りて汽船に塔じ、僅かに桑港に着するを得、其れよりコルサの地に働く事二年、後ち黍畑の耕作を爲す事三年に及びたりしも、成功の端緒を得ず、乃ちワッソンビル、及びキャストビル等に行きて、砂糖大根園等の受負耕作を爲して利益を得、是に於て一旦歸朝して妻女を迎へ、再び渡米してサンノゼに入り、五人の協同事業として、

百六十一カーの荷を作りたるも失敗して千餘弗の負債を爲すに至れり、此際の困難最も甚しく人來りて、其妻をして醜業婦たらしめむとす、彼れ斷乎として此を斥け、誓て曰く、聞く濁するも盜泉の水を飲まずと、我等夫妻身體幸に健康なり、眞の勞働を以て此負債を償はざらむやと、乃ち相勵みてハツプス園の勞働を爲し、妻女また夫の志を知り、一婦人の身を以て、よく野外の勞働に當り、往々男子をして其勇氣に避易せしむるものあり、遂に多額の負債を償却して尙は多少の餘裕を有し、今より六年前サンタバーバラに來りて、庭園及び市街勞働に従事し、風呂屋及び旅館を開業して妻女をして其事業に當らしめ、己れは市内のグロッセリー、ジョンデール商館に働きて曾て一日を怠りたる事ならず、現にゴレンタの地二十一カーを買ひて、之に野菜其他の作物を植え、内外の收益少からず、サンタバーバラ郡日本人社會の成功者として地方の信用を有す、移民會社が人を結き社會に毒を流したる事實に少からず、然れども朝倉の如きはよく此禍を轉じて福と爲したるものといふべき也。

△森銀之助 元島根縣の産にして現時兵庫縣神戸市に籍を有し、慶應三年一月生る、明治十八年始めて渡米し、暫く家内の勞働に従事したりしが、人の來りて花筵賣込の有望なるを説くありたるも、當時日本に於ける斯業の製造尙は幼稚にして到底米國商人の大注文に應ずる事能はざるを看取し之を斷念して植木の賣込を爲さんとし、明治二十三年一旦歸朝して苗木輸出の計畫を打

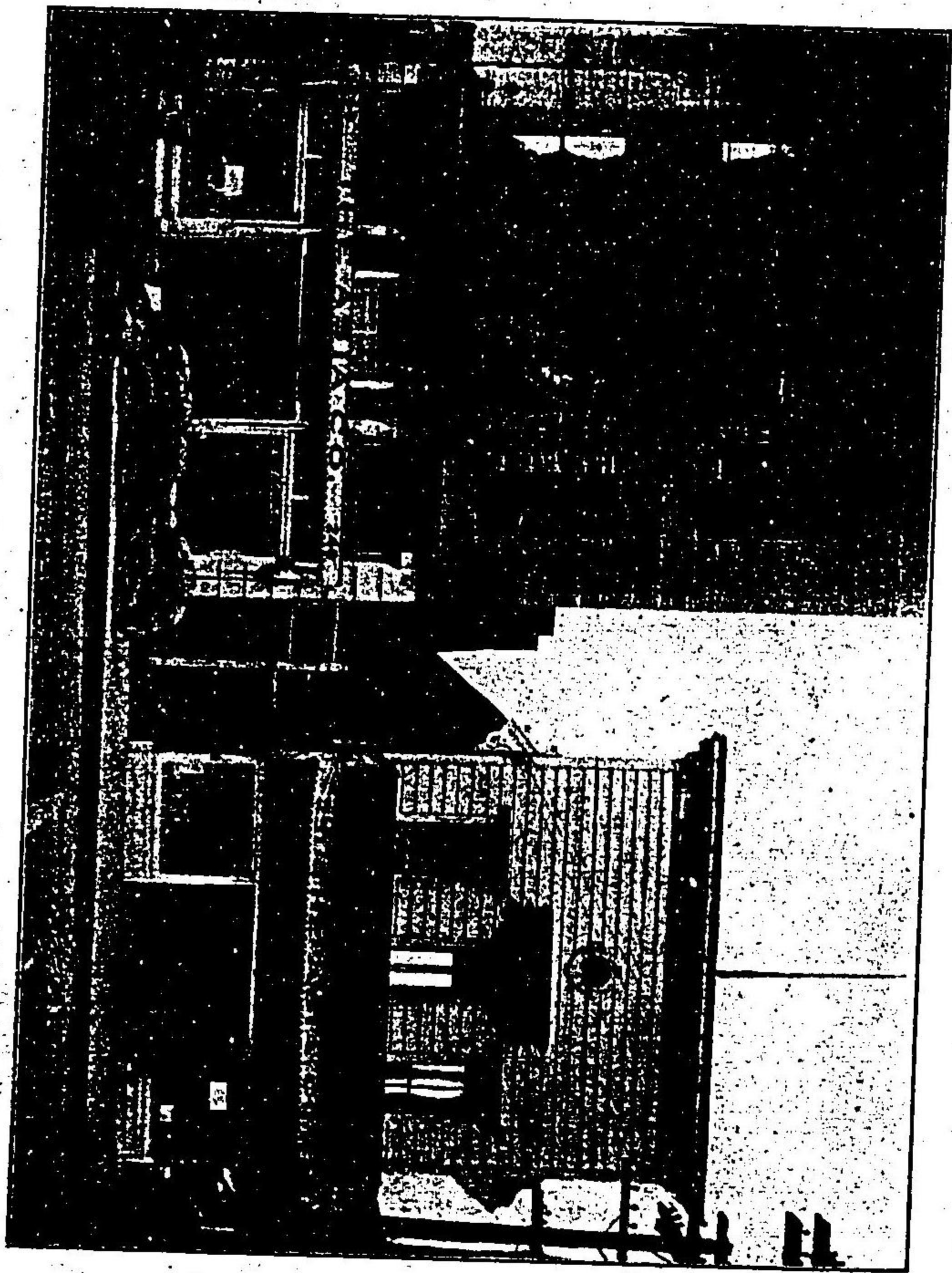
合せ、其七月再び渡航するや、金魚の輸入を爲さんとす、是より先き邦人の金魚の輸入を企てたるものなきに非ず、然れども航海中魚類の飲料腐敗するが爲めに中途に斃死するもの多く、大抵之が爲めに損害を蒙らざるなし、彼れ乃ち、飲料の腐敗を防ぐが爲めに灘伊丹の酒造業者より酒造に使用する水桶を買取り之に清水を詰めて航海中の飲料を保つ事とし神戸横濱の航海中は其飲料を節用せんが爲めに、暫時の間船中の蒸溜水を與えたるが、横濱到着の前夜其中の高價なる種類は水中に斃死してまた一尾を殘さず、彼れ驚き且つ悟りて横濱解纜後は、一切桶中の清水を用ひ、残りたる普通の金魚は遂に之を桑港まで齎し來るを得たり、而かも彼の上陸せんとする前夜、千以上の金魚は何者かに盗み去られ、彼の上陸して其殘餘を白人の金魚店に持ち行きたる時は其盗まれたる魚金は已に需用者の店に販賣せられて、また彼の携へたるものを求むるの意なし、是に於てか彼は苗木の販賣を以て此失敗を回復せんとしたるが、其當時日本人の中、盛に苗木の輸出を爲すに至りて忽ち供給の超過を現出し、殊に白人の狡猾なる、日本の苗木にパチルスわりと流言せるが爲めに苗木の消毒法行はるゝに至り森の取寄せたる苗木は其外觀を損して折角の商品も顧客の眼を牽く事能はず、彼是に於て狡猾なる商人社會の我が活動を試みるに足らざるを知るや、爾後農園の勞働方面に其職足を伸さんとし、乃ちサクラメント地方に於て果樹園の勞働に従事する事二三年、明治二十七年同志を糾合してフレンシノに入り、此地ブドウ園の受負業に従ふ

事二年、偶々ワッソンビル製糖會社の事業漸く盛ならんとするを聞き、其地に至りて砂糖大根を作らるるが、不作の爲めに失敗に歸し、僅かにフレシノに於ける夏期の労働に依て之を補ふ事を得たり、已にして明治三十一年ガードロップに製糖會社の起るや、彼が其運命と健闘せる一勝一敗の経歴は、ガードロップに於ける同胞社會奮闘の活歴史にして、彼一たびは城を萩谷某に空け渡して、去てテキサスの米作地を視察し、其歸路コロラード州を過ぎりて瓜作の有望なるを見るや、十一人の同志を率ゐて彼の地に入り、百五十一エーカーの地に瓜を作りて此地方に於ける破天荒の大耕作を試み、地方の白人社會をして、日本人農業者の大膽なる振舞に一驚を喫せしめたり、其收穫期に達するや、彼は七十人のメキシコ人と、二十五人の白人と、三十五人の日本人を備ひて其摘取を爲さしめたり、而かも事は意外の邊より失望の暗影を齎しぬ、彼の作り出したる瓜は市價の低落せるが爲めに之を市場に賣捌く事能はず、若し之を他の遠隔地に送らむか、貨車一臺の運送費市俄古まで二百餘弗、紐育まで三百四十弗を支拂はざるべからず、加之斯る腐敗し易き果物は、周圍を冷水にて詰め、途中更らに氷の詰替へを爲さざるべからず、而して全體の瓜三百五十クレーツにして一クレーツに五十仙の氷を要するとして總體一貨車に付て五百弗を費さざるべからず、斯る巨額なる運送費を投じて之を遠隔地に輸送するが如きは資本ある大商人にして始めて、之を爲すを得べし、其耕作費に全力を傾注せる農家の能くする事ならむや、況んや斯る經費

を投じて輸送せるものが、其市場に於て相當に賣れ行くべきかは全くの疑問なるに於てをや、是に於てか累々たる瓜實は空しく廣漠たる畑地に委して彼の計畫は根底より轉覆せられざるべからず、多くの労働者は事の拯ふべからざるを見て賃金を得ずして去り、彼と去を同ふせる十一人の徒は一年間の辛苦と労働とを犠牲として現金六千五百弗を損失し、森自らは荷物革靴の底を叩きて其所有品を諸人の分配に付し、身に着けたる時計と金鎖の如き、債務の一部を補はんが爲めに之を他に交付し、囊中また一仙を有たざるなり、諺に曰く禍は伴侶して到ると、彼此際大陸熱の瘴氣に觸れ猛烈なる其地の熱病に罹り、頽勢の支ゆべからざるに至るや病勢更に重を加へ、氣息奄々としてさしも剛脆不屈の彼、轉た人生の不如意を嘆じたるを知るべし、而かも天運未だ盡さず、二三週間を経過して彼は、其病氣を回復し、敗餘の疲脚を勵まして其地を去り、其翌年アイダホに至りて大根園の受負耕作を爲し、須田碧堂、久保澤修策等一部に加擔し、以て昔日の失敗を挽回せんとしたり、而かも此事業また慘憺たる失敗を演じて、須田、久保澤の徒遂にまた立つこと能はず、森もまた事の遂に成すべからざるを知り、徐ろに前途の計畫を爲さんとす、此時に於てガードロップに於ける彼の強敵たりし萩谷某また彼の地の大根業に失敗して其地を去るに至り、森の配下たりし田中梅吉は、昔日の交誼を以て彼を迎へ、相共にガードロップに勢力を挽回せんとす、彼喜んで田中の言に従ひ、再びガードロップに歸り來りて、其一隅に割據し、明

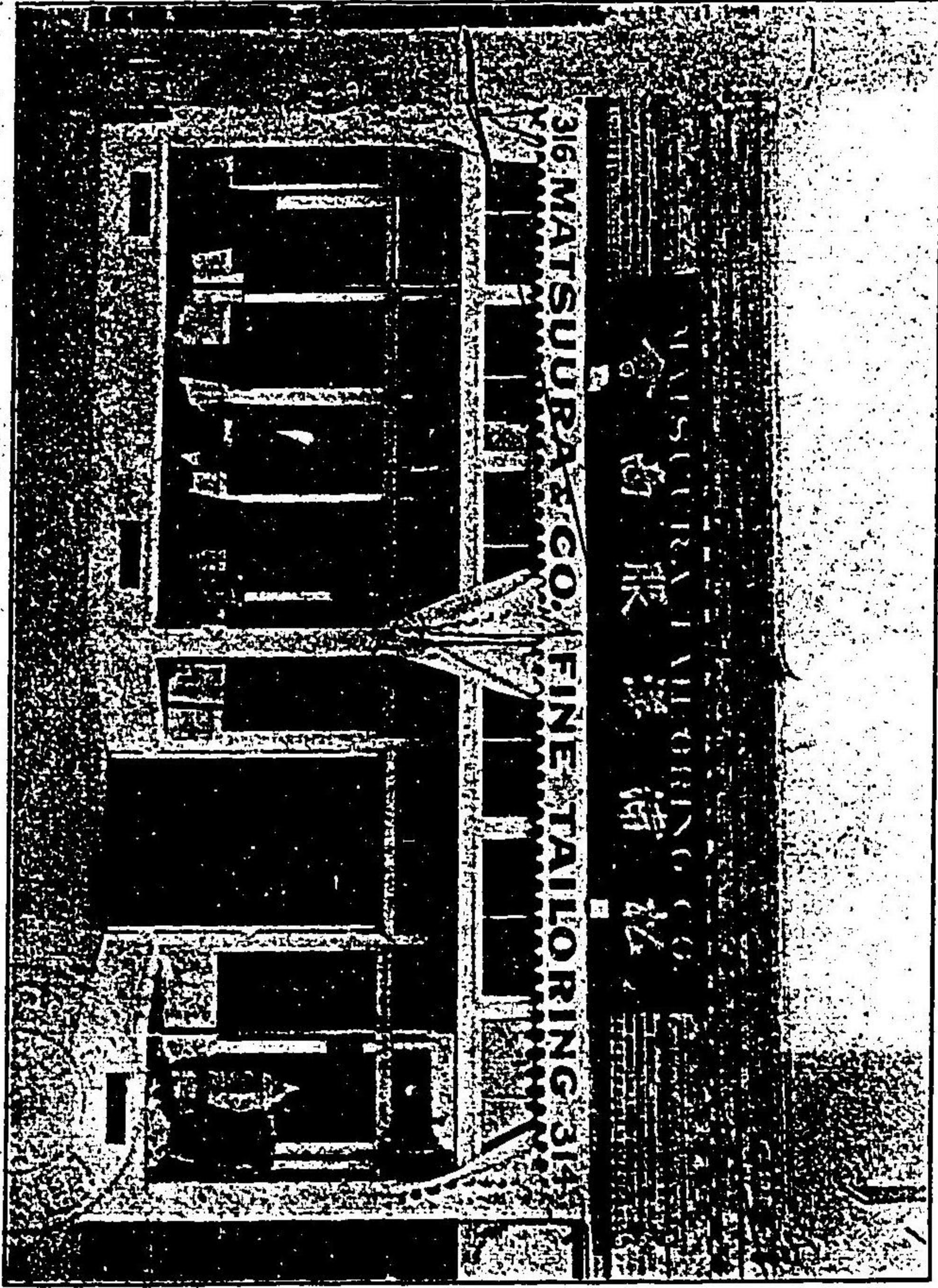
治四十一年の受負入札期を以て、暗中の飛躍を爲し、他の八人を屈服して自ら一萬エーカーの大契約者となり、連戦連敗の二將、茲に大旗を陣頭に立て、カードロップの天地を獨占するに至れり、彼今や加州大根園受負業者の最大なるものにして、一年の所得、二萬弗を下らず、常に自轉車を驅て園地の巡廻を爲し、會社の信用を一身に擔ひて、十人の配下彼を信頼して其指揮に任ず彼軀幹堂々、一見して非凡の相を有し、而かも温和容和色、人に親むの風あり、口辨の才を有せずして沈黙寡言するを常とす、而かも其一たび意志を決するや、是非二つながら之を断行して顧みる所あらず、配下常に彼を評して曰く、森をして一言を出さしむる勿れ、彼一たび石といはい、木も石たらざるべからず、金もまた石たらざるべからずと、蓋し彼の意志の容易に轉枉せしめがたきを言ふなり、父を丹一郎といひ、妻を〇子といふ、夫妻の間に一男二女あり、ベクラビヤの家一族團欒和氣春の如きを見る、彼もまた日本男子の面目を辱しめざるものといふべし。

△田中梅吉 廣島縣佐伯郡地御前村の産にして、明治二十七年故國を發して英領ヅキクトリヤに上陸し、暫く其附近の伐木業に従事したりしが、其れより米領に入りてポートルランドの地方に鐵道の入夫として働く事二三ヶ月間、其れより桑港に出で、サクラメントより、フレンシノ地方に於る事三年、後ちローダイの附近アキャンポの農園に勞働する事三年に至れり、一日感ずる所あり謂らく、男子志を立て異境に来る、艱難固より豫期する所なれども、斯の如き他人の使備する

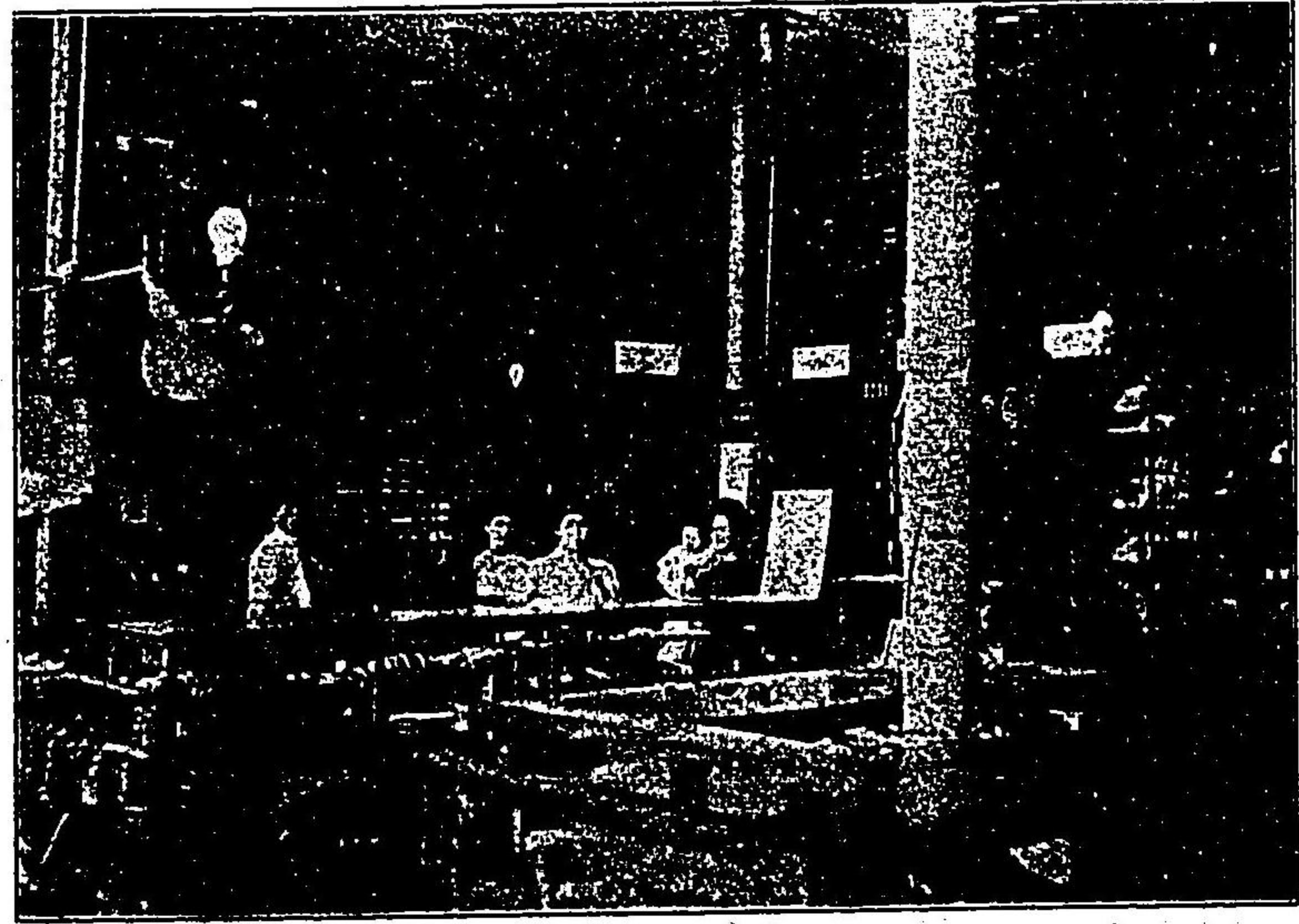


會商亞細亞 九四三二街一東 市スルゼンブス一ロ

松浦洋服商會

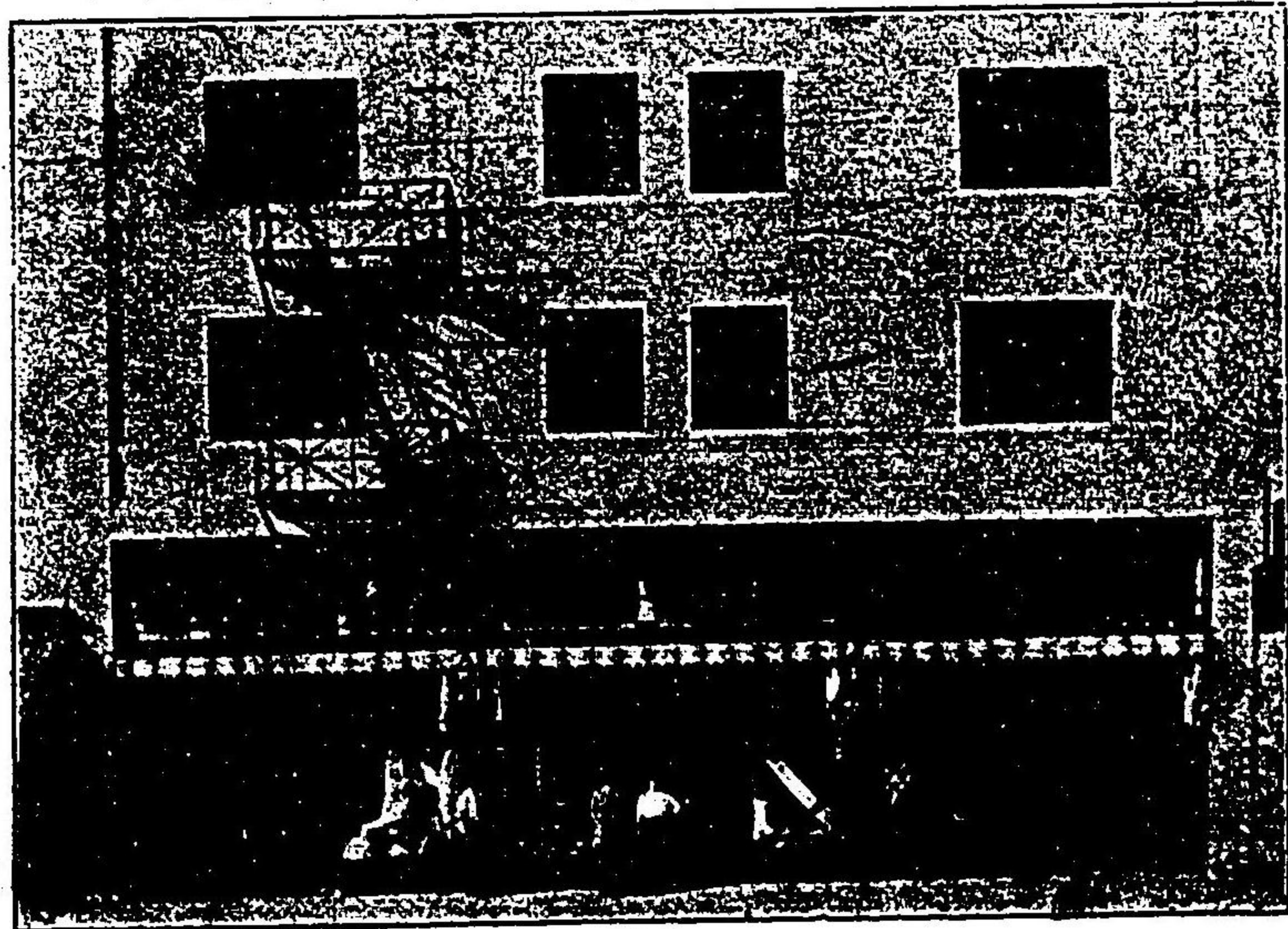


ロースアンゼルス市 第一街 三三四、三三六

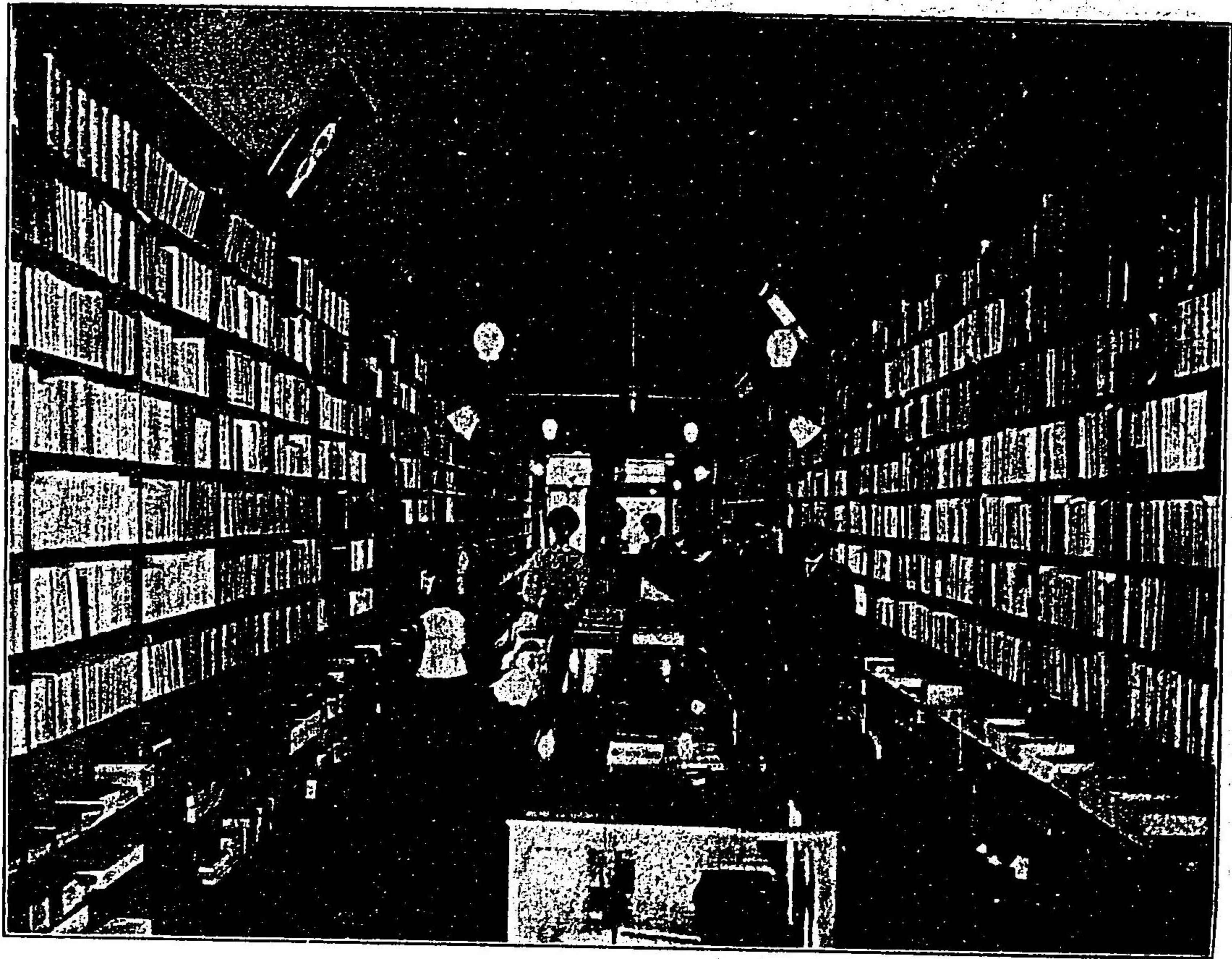


ロースアンゼルス市 中野商店内部

中野喜代太郎の經營にして家屋は一萬三千餘弗を投じて自ら建築せるものなり

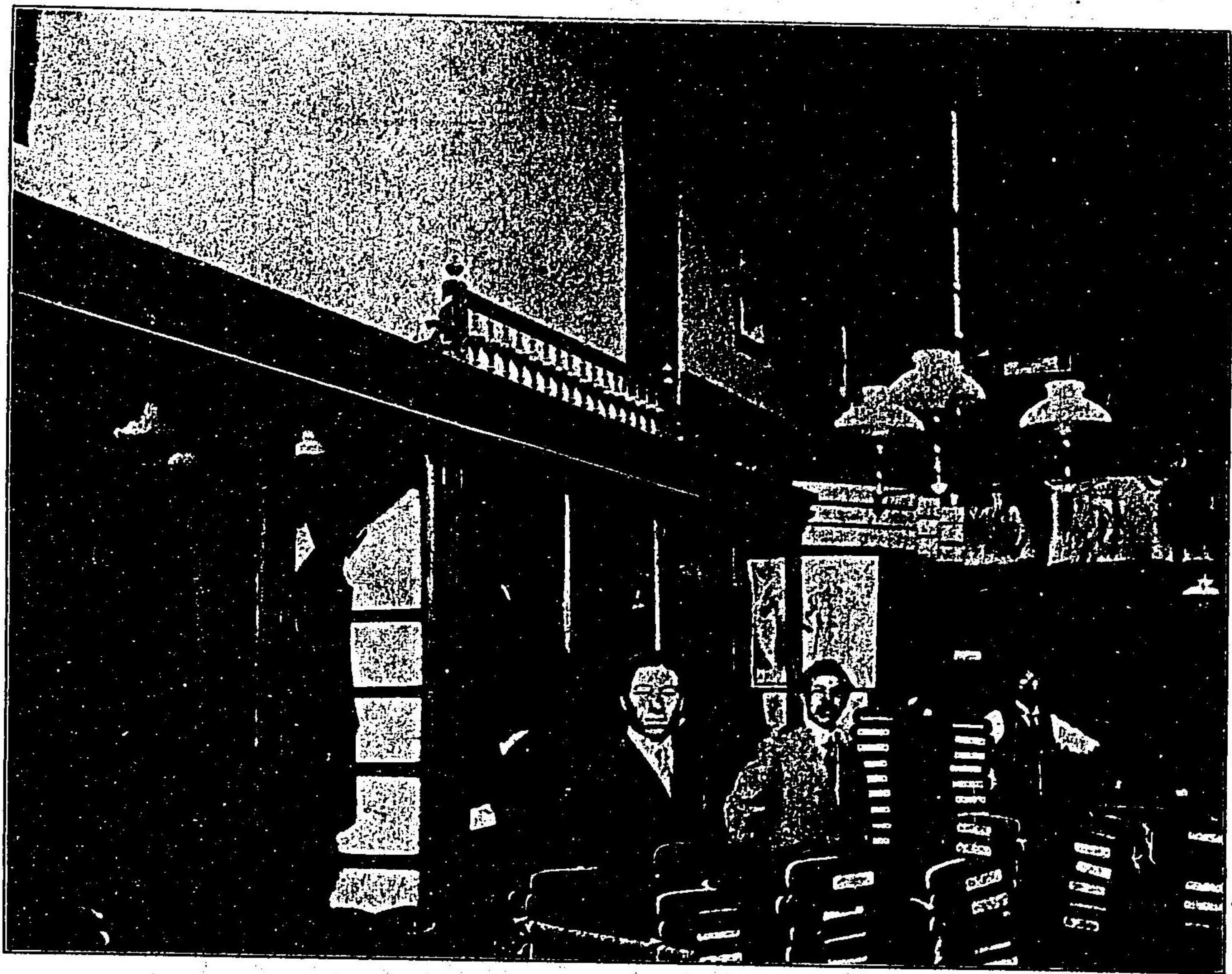


同 外部



向て右
店主 福島源太郎

ロースアンゼルス市 東一街 文林堂書店内部

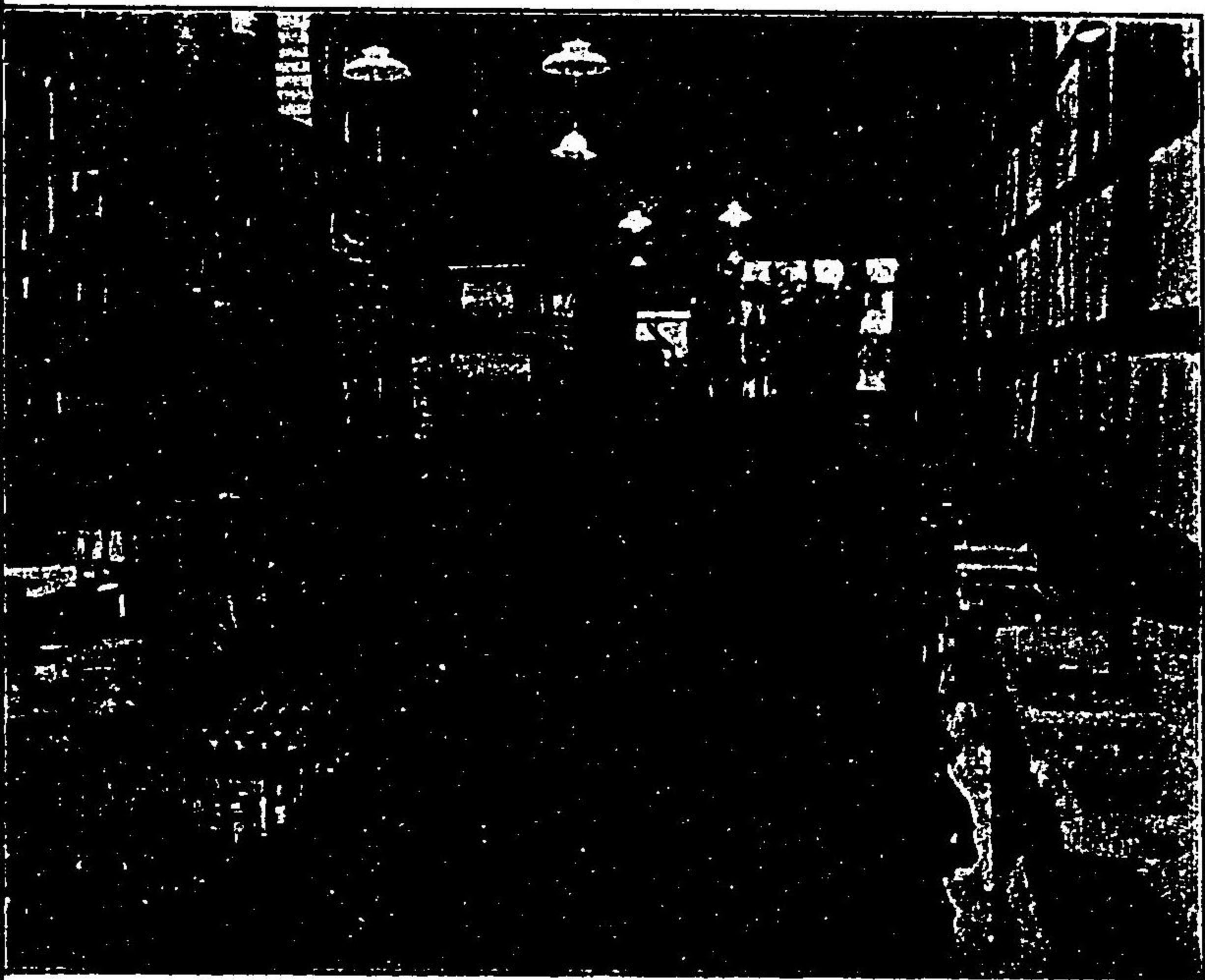


向て左
店主 米村貞一

ロースアンゼルス市 東一街 アメリカ洋服店



一 繁 尾 松 主 店

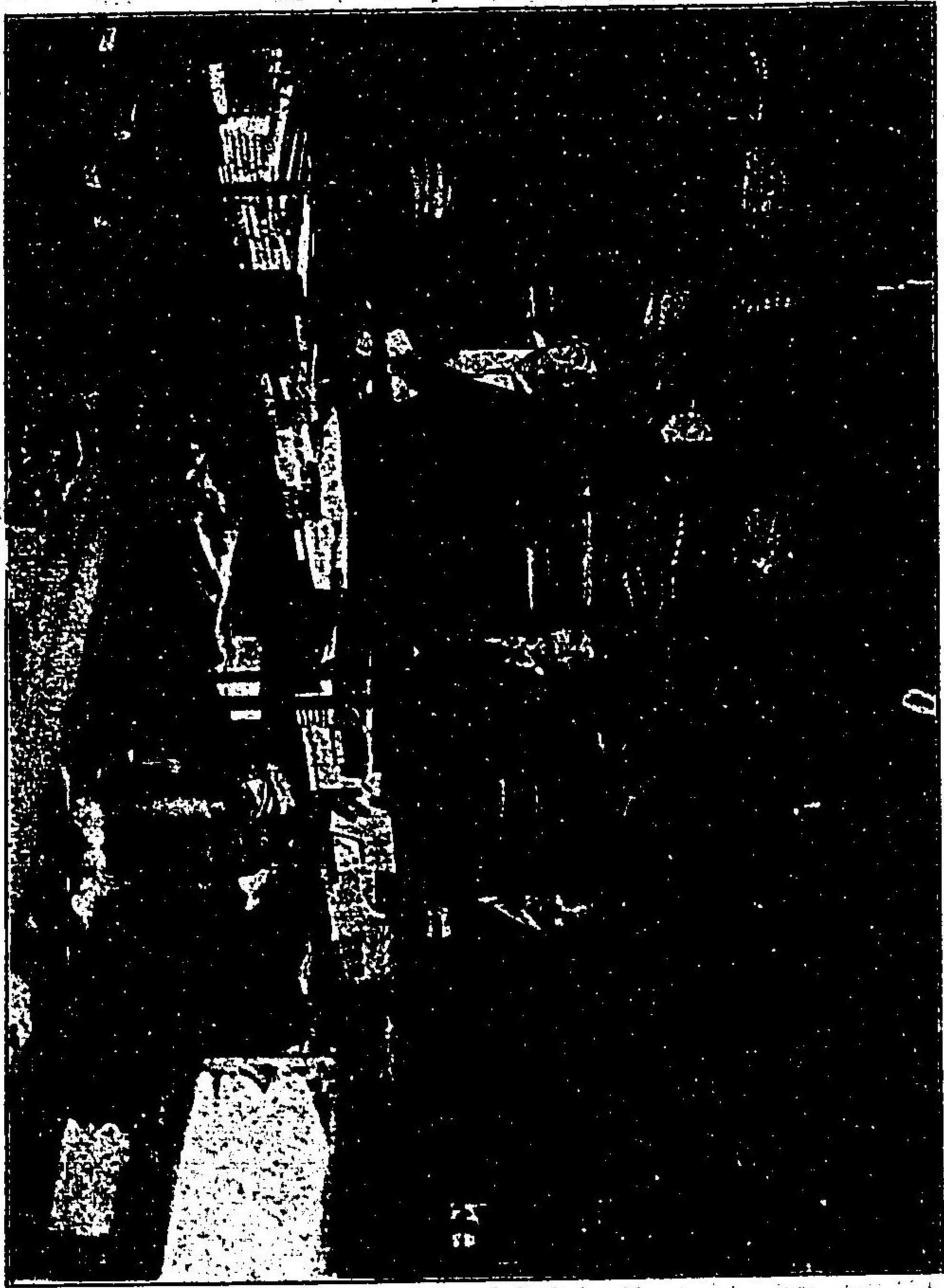


店 商 尾 松 市 ス ル セ ン サ ー ロ



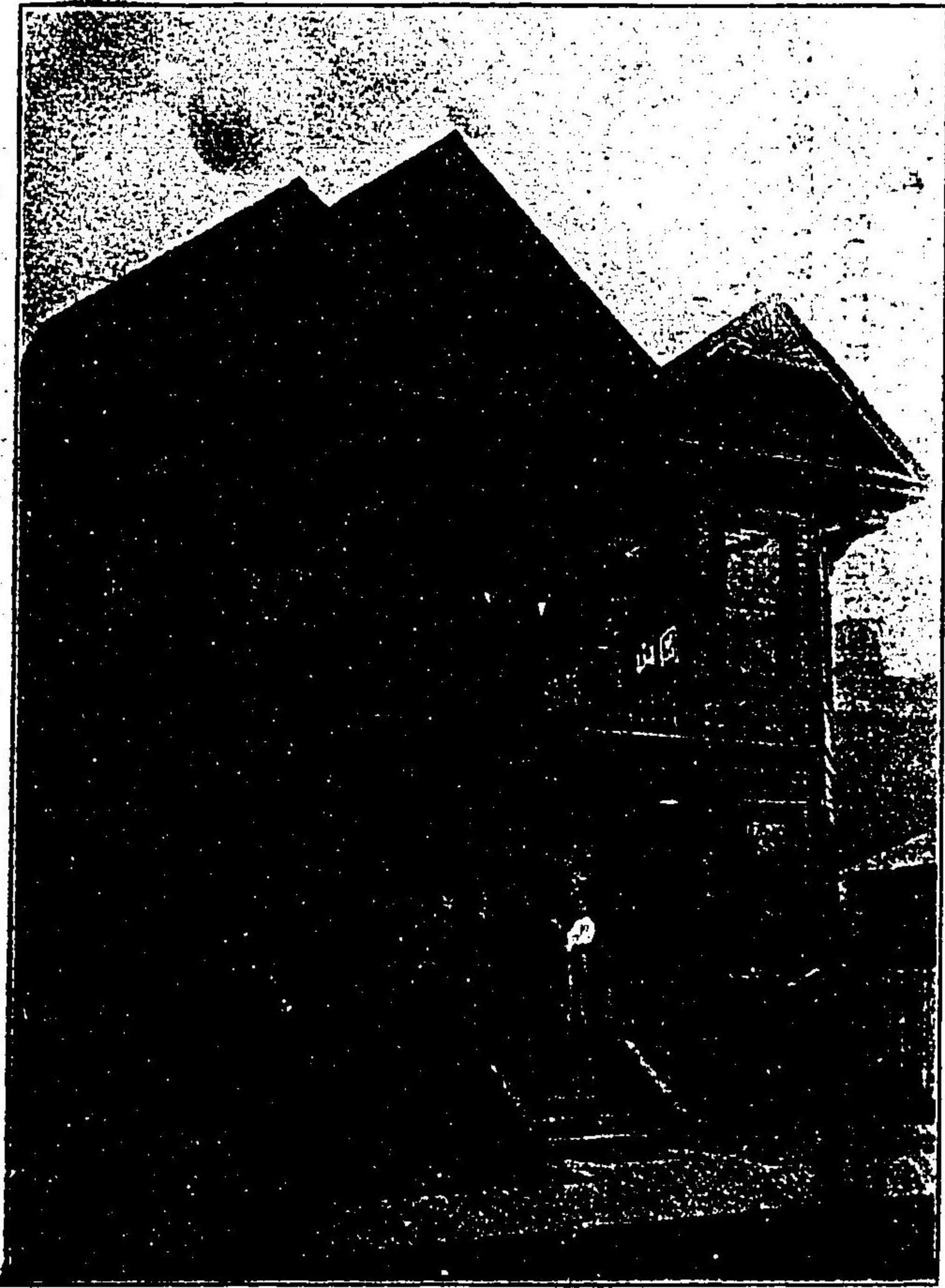
景 光 の 會 迎 歡 隊 經 習 練 國 帝 る け 於 に 亭 松 市 ス ル セ ン サ ー ロ

(影 撮 日 七 十 二 月 四 年 二 十 四 治 明)



ロリアセン市東一街

堀兄弟商會内部と兄弟三人



耶太金野淺 主館 館 旗 山 岡 市スルゼンアソーロ

蔵仁田高 人主 館族田高 街ダメラア北市スルゼンアスーロ



店髪理川黒 ダメラア市スルゼンアスーロ



助久木々佐 主館 館族木々佐 市スルゼンアスーロ

豊原平任主務事同



街ロドーピンサ北市スルゼンアスーロ
吉嘉脇 人主店商屋口山及館旅屋口山

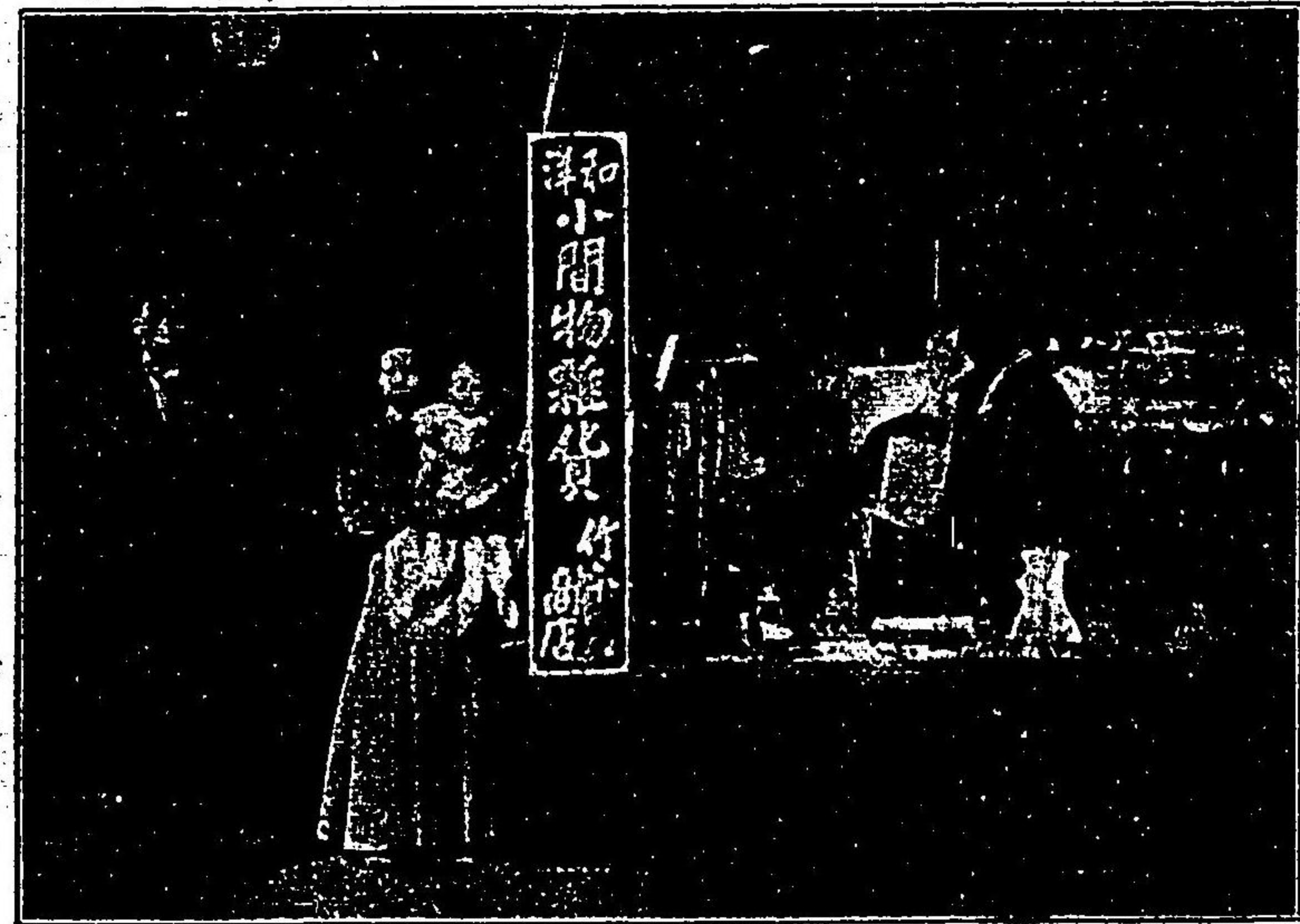


吉兵村野市スルゼンアスーロ



族家(士學醫)平重中田市ルゼンアスーロ

店商根白 街ロドーピンサ北 市スルゼンアスーロ



店商本竹 街一第東 市スルゼンアスーロ



のけた妻 松市澤森 市スルゼンアスーロ

所となりて給金労働に従事するの外、他に一個獨立の快事業なからさらむやと、是より半年間、徒歩して加州の各地を旅行し、種々の事業を視察したるも、終に其起すべき事業を發見する事能はず、偶々森銀之助、ガードロップより來りて大根園労働者の募集を爲すあり、彼れ乃ち森に語りて曰く、單純なる給金労働は余の望む所にあらず、余をして足下の事業の一部に參せしめざるかと、森彼の人と爲りを喜び、乃ち特別の待遇を以て彼を迎へ、始めてガードロップ大根園の労働界に入る、于時明治三十一年也、其翌三十二年會社の大根園百八十一エーカーを契約して獨立の請負契約となり、此年更らに森の契約せるソルフといへる地百七十五エーカーを下請して工、二階道と三人の協同事業として之を經營し、其後森の去てコロラドに事業を經營するや、彼の請負地千二百エーカーを襲ひ、其翌年は更らにサンタマリヤ方面の作域を加へて此地方有數の大契約者となり、已にして森のコロラドに失敗して歸るや、シニーマン方面の請負區域を彼に譲りて昔年の知遇に酬ふ、彼等二人の關係實に斯の如し、森の今日ある、田中の功與つて力ありといふべく、宜なり森の現時田中に對する恩遇の他と異なるものあるや、由來在米日本人社會の弊、利益の前には兄弟もまた讐敵たるの觀あり、而かも二人の宏量相容れ、恩義相盡する眞情寔に美とするに足れり、田中の爲人や、精苦勤勉、一たびガードロップの地に來りて、十年曾て一たびも動かす、以て森派の根據地を今日に維持せるもの、豈に尋常労働者の堪ゆる所ならむや。

△大石與次郎 加州の分野、労働界の曉將雲の如く多く、星の如く列る、而かも彼等の今日其地歩を作れるもの長きは二十年、短きも十年を下らず、然るに在米僅かに四星霜、年齒僅かに二十四歳、而かも地方の衆望を双肩に擔ひ、前途最も有望なる人材として目せらるゝもの之を大石與次郎と爲す、彼は熊本縣玉名郡長洲町の産、夙に熊本商業學校を卒業し、明治三十五年始めて米國に來り、サンノゼに在る事半年、後サリナスに於て農園に労働する事三年、其際井上政吉と三百エーカーの砂糖大根園の協同作を爲し、失敗してガードロップに來る、一年を萩谷の下に労働して、其翌年より會社の大根園六百エーカーを請負ひ、爾後此地の事業に經驗を積みて周圍の信用を得、森銀之助の全部を統轄するや、作地千二百エーカーの監督を擔當して年五百弗の給料を受け、其傍ら二十五エーカーの現金借地を爲して馬鈴薯を作り、他に白人某と協同して五十エーカーの作地を經營し、昨年より更らに業務を擴張して、和歌山縣人北本宇一と共に二百三十エーカーの作地を借入れて之に大根及馬鈴薯を作るに至り、彼軀幹長大よく、労働界の健闘に適し、資性温順よく部下を愛す、加ふるに中等教育を受け、流暢なる英語を操つる、眞に森幕下の良將にして、青年労働者の模範とするに足れり。

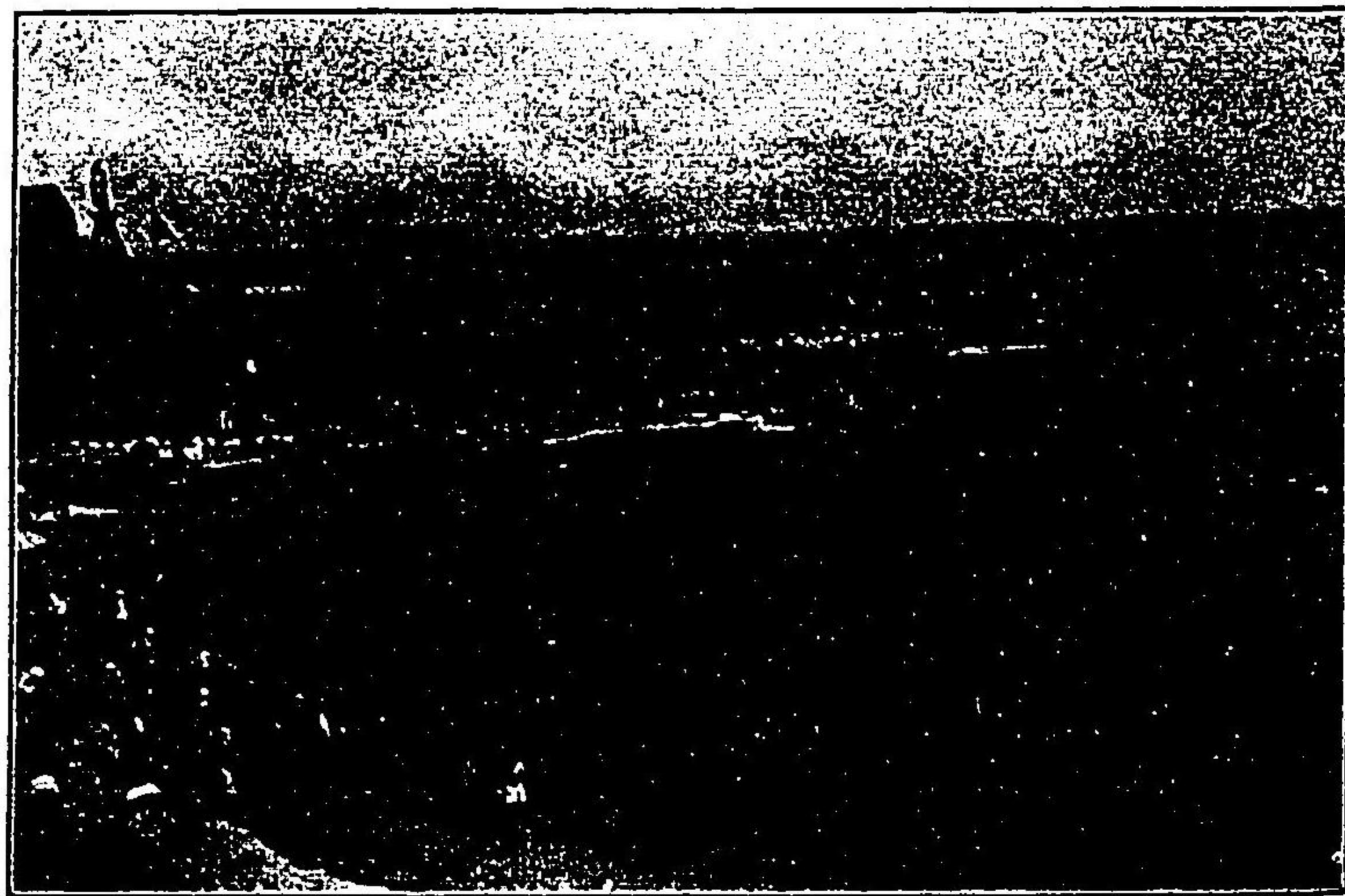
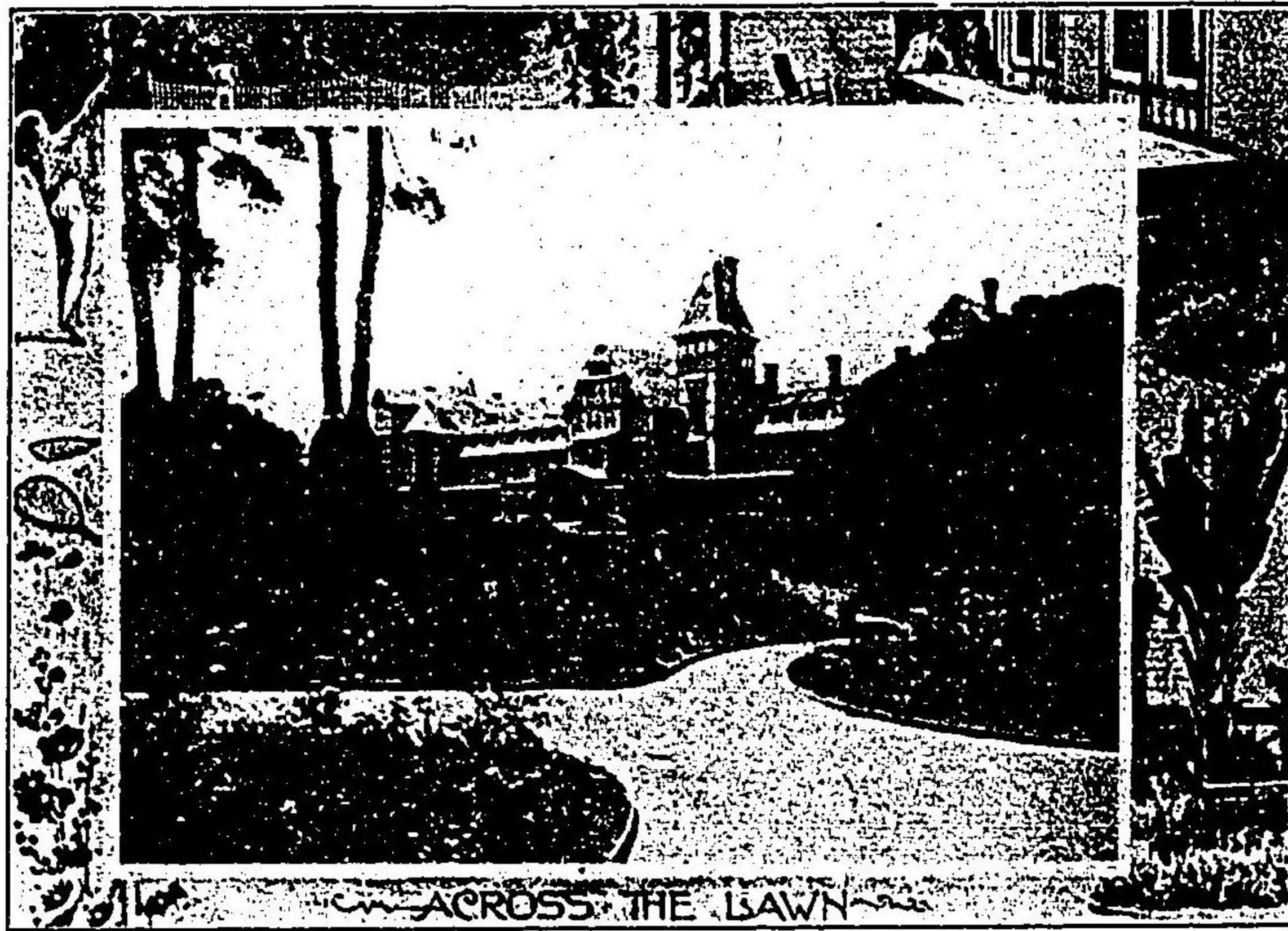
第五章 中央加州沿岸地方の踏査

第壹節 サンルイスオビスポ郡及びモントレー郡

ガードロップ、サリナス間車窓日記

明治四十二年一月五日、ガードロップを發してサリナスに向ふ、此日天曇り、窓外の光景轉た寂寞たり、ガードロップ以北は、一帯の砂丘海濱の眺望を遮り、オシヤナの驛に達して、始めて洋上の波を見る事を得、オシヤナはガードロップを距る事十一哩、人口僅かに百餘、海濱の小村にして、近時アローヨグラント平原の發達するに従ひ、貨物集散し、地方の咽喉地たるに至れり、ピスモの海濱は乃ちオシヤナ以北十六哩に達し、白砂遠く連り、米國中最美の砂洲として其名を知らる、已にして汽車の海濱を去りて、高地に進行するや、濃霧小丘を蔽ひ、櫻樹所々に生じ、原草雨餘の翠を増して、牧馬の徘徊するあり、間もなくエドナの驛を過ぎて、サンルイスオビスポに達す、此地金字塔市街の名あり、市街の傍らに峻岡あり、其形埃及の金字塔に酷類す、其名の因て來る所なるべし、山上の巨岩龜裂を爲して鱗接し、危然として鯨魚の背部を見るが如し、蓋し線路中の奇觀たり、市は郡の首都にして、夙にフランス派の寺院を建つ、地方の商業地にして、サンルイスオビスポ河に臨み、水道瓦斯電氣の供給盛なり、銀行寺院學校の完美なるも

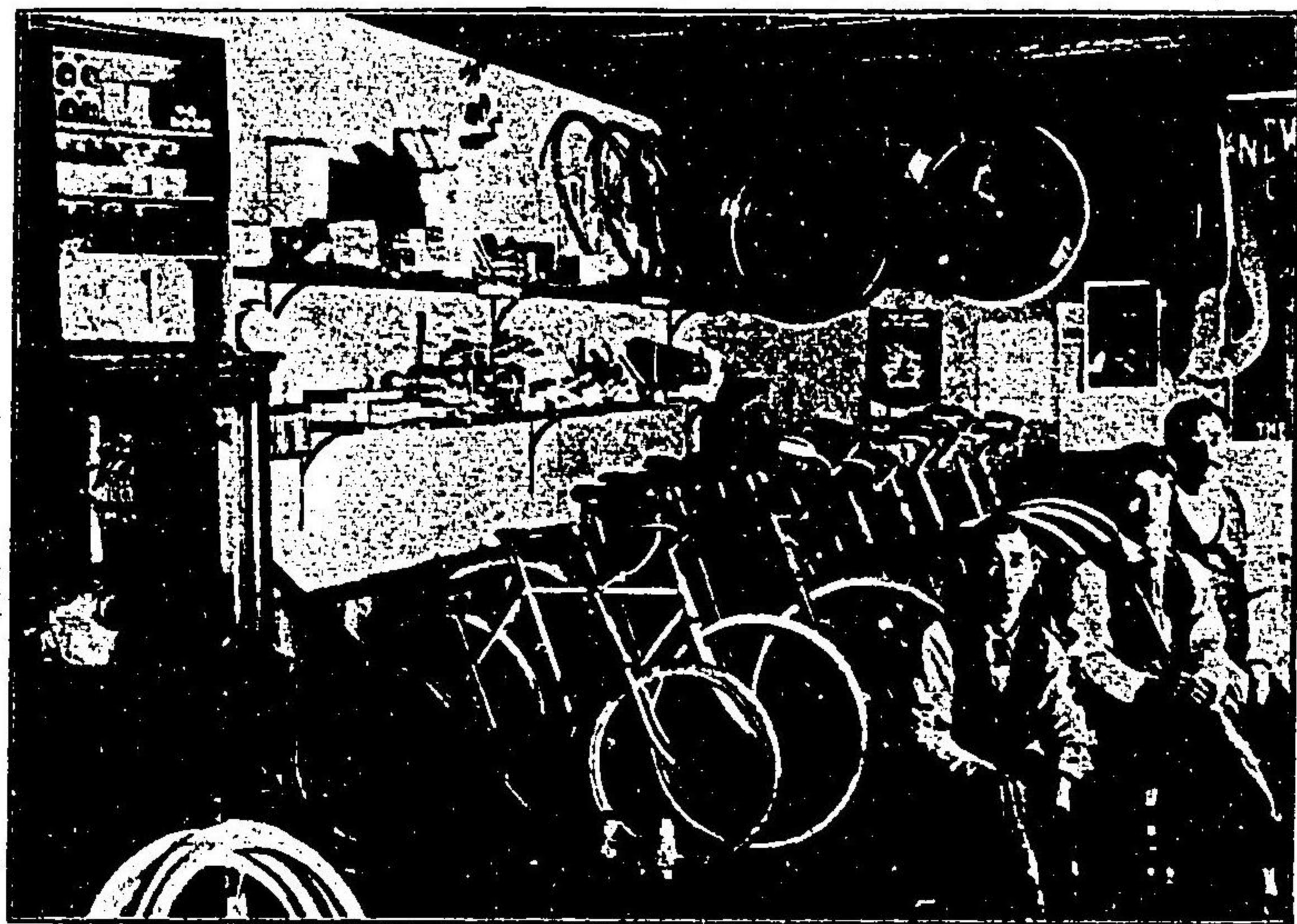
部一の園庭とルテホトンモルデるけ於に市ーレトシモ



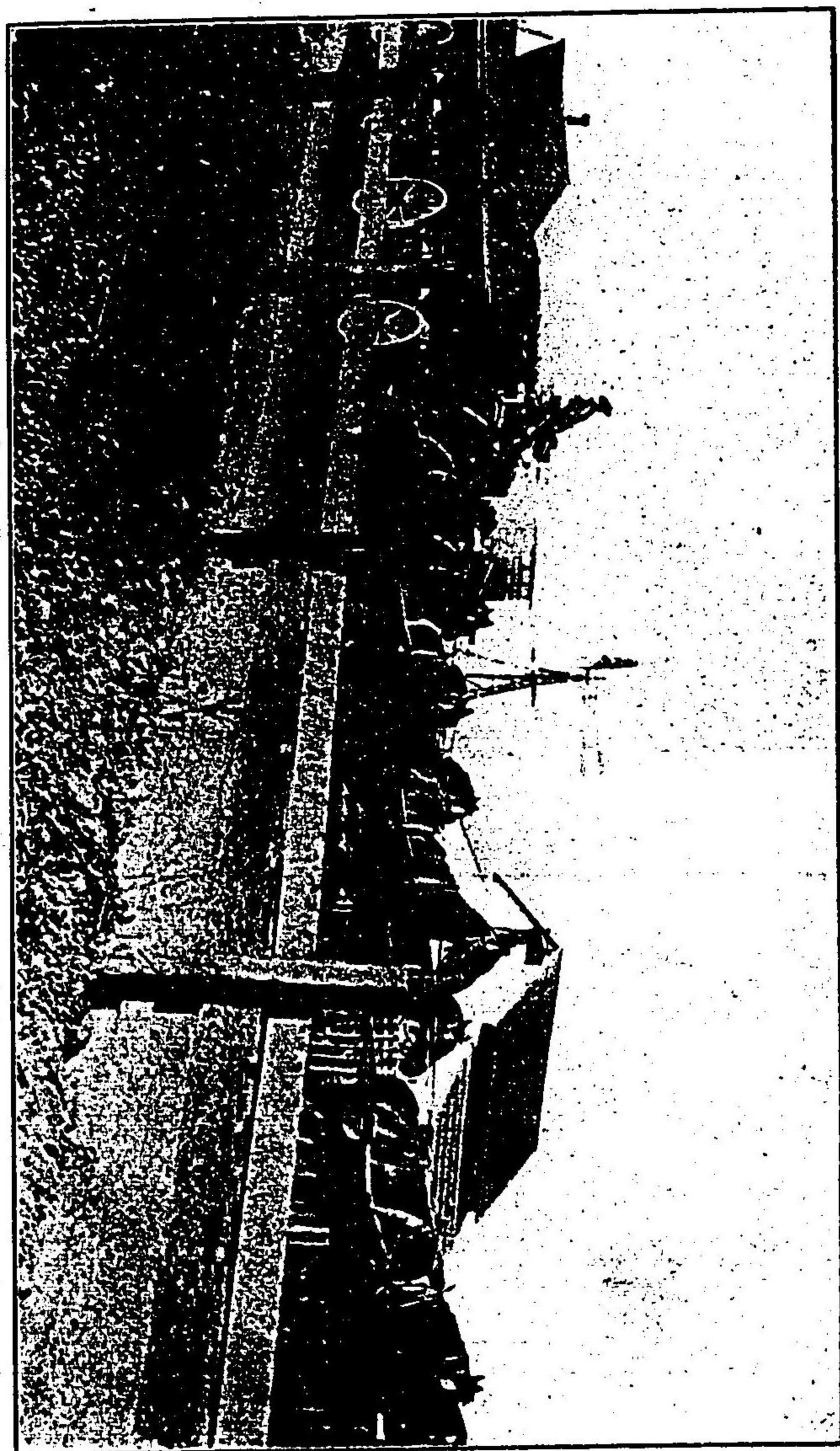
スウハーチ亭茶人本目と景絶のブーロダクツイフシバ内園ーレトシモ

の少なからず、市の西南ポートハーホード、モルロの方面、一大平野の開展するものあり、地平線外遙に泰山巨嶽相屹立するの光景、頗る壯大の觀を極む。ビスモの海濱、シカモアの温泉等皆周圍十里内外の所に點在し、パシフィックコースト、狭軌鐵道の便に依て連絡を通ず、此地は千七百七十三年、デル、トロサの發見する所にして、附近の地、果樹、穀類、牧畜に適し、土地最も豊饒なり、就中ロースオサス平原の相橋、モノ、カヨコス牛乳業は地方の特産として知られ、バイドラス、ブランカスの農園は、廣さ四萬八千英町にして此地方有名なる大農園と稱せらる、サンシメオン港は、市の西北凡そ四十哩の所にありて、其北六哩の海岸に有名なるバイドラス、ブランカスの燈明臺ありといへり、汽車の市街を去り、ゴールドレーの小驛を過ぐるや、所謂サンタルシャの峻路に達す、此峻路に架したる、馬蹄形傾斜線路は、其裝置の壯大なる事遠くペンシルバニヤ州のものに優ると云へり、汽車の山腰を迂廻して進行するや、群峯脚下に伏し、旅客をして、九霄に登るの感わらしむ、馬蹄形傾斜線路の長さは凡て二哩にして、急峻なる山崖を迂廻し、甯然たる深溪に臨み、車窓より下瞰すれば、山間の幽路遙か二百呎の下に流る、旅客の景勝を説く者曰く、是れ曾て瑞西の山中にも見ざるの絶景なりと、已にして絶頂に達するや、一面の土砂焦色を帯び、岩石累々また一木一草を見ず、遙かに顧みれば、サンルイスオビスポの市街晩霞に隠れて、茫々たる平野香烟縷縷、幾多の峻峯峻岳、西方の雲に入りて壯觀言ふべ

族家其と宅住の松菊井益 家業農大 - スナリサ

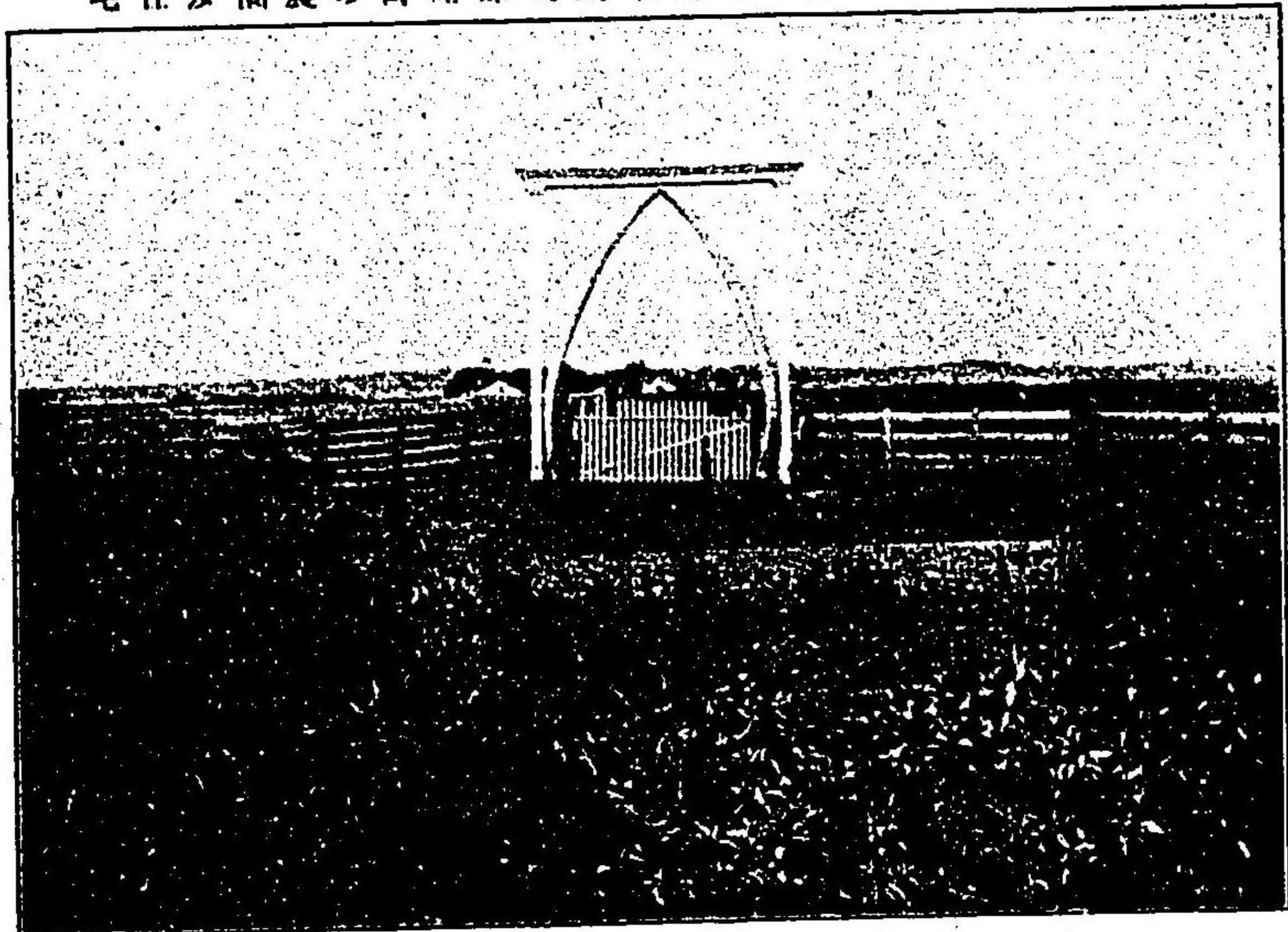


吉浅島豊央中、吉熊本森左て向（同共島豊、本森）店車轉自本森 スナリサ

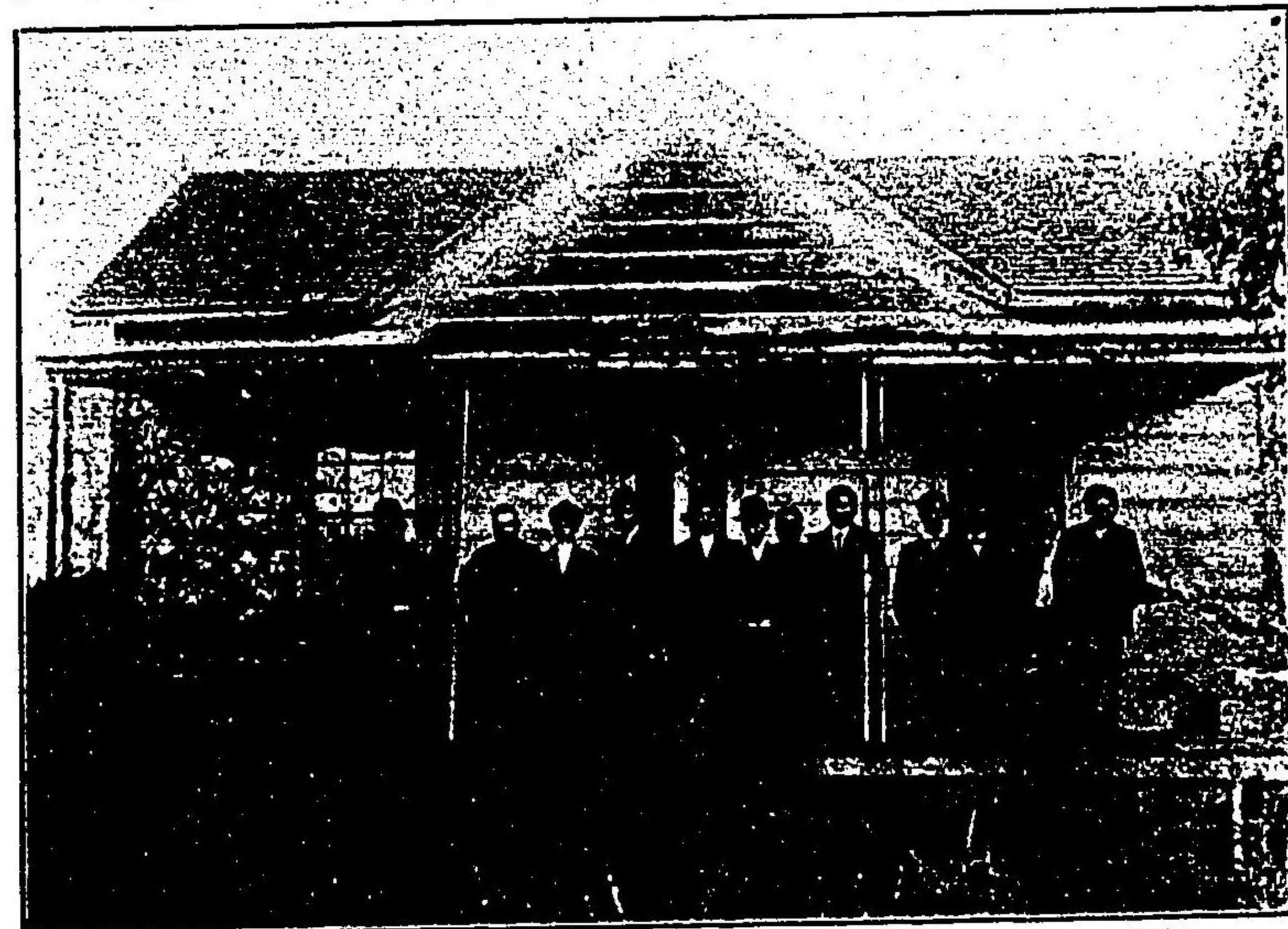


景光の搬運根大ら自 園根大の作文田野 者業園農 スナリサ

スナリサ新宮、馬本政次郎の農園及住宅



前面の門は鯨の筋骨を用いたるもの



スナリサ近 長尾三助、二宮三利郎共同の農場に於ける住宅
 (結婚披露の影撮るもの)
 向て右より一宮三利、八番二宮ヌノ、向て左より四番尾妻ノ、五番長尾三助

からず、已にして流車の阪路を下るや、トンネルを通過する事六回、山麓に達してサンタマカリタ驛に着す、此地人口四百、海面を抜く事一千呎の所にあり、檜樹市街を點綴し、其附近に有名なるサンタマカリタの農園あり、廣さ二萬五千英町なりと稱す、間もなくテンブルトンに到る、此地人口四百、有名なる加州薪材の産地なり、果樹園及び葡萄園あり、養鶏、牧畜の事業盛なりと稱す、之れより地形大に開け、漸くにしてパンロプルスに達す、市街はサリナス河の源流に添ひ、サンタルシャ山の麓に位置し、周圍に檜樹多く、人口一千五百、有名なる温泉あり、宏壯美麗なるパンロプルスホテルは、浴客の宿泊する者四時絶ゆる事なく、地方有名の地たり、已にしてサンミゴエルを通過す、此地は千七百九十七年、フランシス派の僧侶、フアーザレザンの發見して寺院を設立せし地にして、今尚ほ頽廢せる古寺の遺跡を留む、時に夕陽已に西山に没して暮色蒼然たり、此寺院の盛なるや周圍の壁二哩に達し、溝渠の長さ八哩に及びたりと云へり、現時麥及び麥粉の産出地にして、人口僅かに五百を有するのみ、ブラッドレー、サンアルト、サンルカスの驛を通過して、六時四十分、キングシチーに着す、車窓の外、夜色まさに昏く、メッツ、ソルダッド、ゴンザラスを経て、七時五十五分サリナスに着し、歩いて日本人街に到り、平井旅館に投ず。

一月二十日、サリナスを發して、モントレーに向ふ、午前八時四十分停車場を發し、キャストロピルの驛に下車す、此日雨蕭條として戶外の光景頗る荒涼たり、待合室に入り、煖爐の邊に煖を取る、十時十五分モントレー行きの汽車來る、乃ち之に乗りて支線に入る、已にしてサリナス河の鐵橋を渡る、河水雨に氾濫し、廣闊の面、麥葉僅に長じ、車窓の外、また目を喜ばすものなし、線路の丘陵を通過する頃、灌木一面に茂生し、群羊の所々に立てるを見る、デルモント停車場に達する前、松樹漸く多く、頗る我國山野の光景に似たり、デルモントホテルの附近、樹木蒼鬱として、風景極めて雅なり、十一時モントレー停車場に達し、日本人街を訪ひて内田旅館に投す。

翌二十一日雨漸く止む、街上を歩し、市街の西に在る丘陵に上り、四方の風景を見る、丘上の眺望絶佳にして、山水の配置恰も畫の如し、海湾弓の如く市街の人家脚下に展開して、遙にデルモントホテルの屋上、標旗の朝風に翻るあり、丘陵の左は乃ちバシフィクグロブの岬端にして白波の岸角を打ち、大洋の水遠く雲に入るを見る、遠山の巔、白雪の皚々たるもの、夜來の寒氣偶然ならざりしを知るべし。

西曆千六百二年、ドンセバスタヤン、ビスケーノなるもの、西班牙王ヒリツプ三世の代、太平洋沿岸探險の命を受けて此地に來るや、二人の祭司と、一隊の兵士を率ひて陸に上り、王の名に依

て地を占領し、名くるにモントレーを以てす、モントレーとはマウンテンキングの約語にして、諸山の王を意味するものなりと云へり、當時此地人跡未だ到らず、只鷗蒼たる松樹半島を蔽ひ、彼をして此美名を興へしめたるものなるべし、西班牙政府は、後ち此地に寺院を建て、土着印度人の之に歸服するもの千餘、當時サンフランシスコの市街、未だ其萌芽だに發せず、モントレーは、サンデーゴ以北、加州沿岸の首都たりしなり、而かも千八百二十二年メキシコ人民の、西班牙政府に反旗を翻すや、寺院の盛觀を破壊し、フランシス派僧侶の權勢、一朝にして衰滅するに至れり、此美なる半島の地、また人事の盛衰を免がれず、嗚呼モントレーの地形及び歴史の關係何ぞサンタバーバラに相似たるや、余此地の風景に接して、西班牙の盛時を追懐し、同情の念轉た禁すべからざるものあり、已にして丘を下り、市街を散歩して、種々の古跡を尋ぬ、少女ヘレロと眞珠、シャーマン少佐蒸氣の物語等、就中最も小説的趣味を有して、此地の人口に膾炙する所なり。

加州の尙ほメキシコ領として、モントレーは、時の知事ビオピコの治下に屬する時に當り、天女の降來せるが如くに傳へられたる一美少女あり、彼女はモントレーの美娘と呼ばれて、名をイサベラ、ヘレロと云へり、叔父某に養はれて、可憐の孤兒なりしが、常に眞珠を集めて之れを糸に繋ぎ、人の婚を求むるや、毎に之を拒みて曰く、妾は眞珠を欲す、若し其數を充た

す者あらば、是れ妾が生涯を托するの夫たるべしと、一日西班牙種族の美少年、デラ、ベガといへる者、南加州ロスアンゼルスより、數頭の馬を率ひて此地に來り、土地の勇士と馬を競べて之に勝つ、此夜秘戯を演せんとして、モントレイの美娘に會す、ベガ、彼女の愛を得んと欲す、乃ち約して曰く、貴嬢にして、若し之を獲るの手段を問はずんば、余必ず貴嬢に贈るに多くの真珠を以てせんと、ヘレロ他意なく之を諾す、當時ロレンタといへる所に一の寺院あり、寺僧の愛婆常に高價の真珠を裝飾す、ベガ之を知れり、乃ち土人を先導とし、バザ、カリホルニヤの山中を超へてロレンタに達し、僧を欺きて寺内に入り、一刀直にその愛婆を刺殺し、装ふ所の真珠を取りて、之に其最後の一顆を囊中に入れんとするや、突然寺僧の入り來るあり、彼れ咄嗟に僧を斬て出で、獲たる所の真珠を以てヘレロに贈る、ヘレロ真珠を得て喜ぶ事限りなく、問ふて曰く、足下皆妾の爲に爲したるかと、ベガ答て曰く然り、總てを擧げて貴嬢に捧げたるなり、さわれ貴嬢、今夜亞米利加の船入港すと聞きぬ、貴嬢余と共に去らざるかと、ヘレロ答へて曰く、妾また奚ぞ此地に戀々たらむやと、此夜偶々税關内打毬の催しあり、デルモントの美娘、真珠を滿飾して出づ、天性の美貌、一層の光彩を放ちて、廣寒宮裡の仙女、下て人界にあるかと疑はる、已にして、ベガの罪惡露顯し、市内紛擾す、二人群衆の中を逃れて海邊に出で、岸角より一躍海上に飛ぶ、ベガ、ヘレロを負ひ、泳ぎて船に達せんとす、群衆叫喚

の裡、銃丸海上を掠めて飛び、ベガ、丸に中りて傷くや、ヘレロ、纖弱の手に其情人を支ゆ、而かもモントレイ灣の波は、怒りたる咆哮を以て、彼等を葬り去りぬ、夜色朦朧、只鬼哭の愀愀たるを留むるのみ。

痴情の青年を誤るもの、實に斯の如きものあり、更にシャーマン少佐の艶事に付て舊記の傳ふるものあり、曰く

曾て西班牙種族の美人に、セノリタ、ポニフェシオなる者あり、一日此地に碇泊せる、米國海軍少佐と階老を約す、已にして東部の命、彼れの歸航を促すや、二人相會して別を叙す、美人少佐の胸にせる黃薔薇を乞ひ、地に植へて誓て曰く、二人の眞情、よく此花をして生長せしめむと、少佐答て曰く、然り、此木花を開くの時、余必ず卿に會せんと、爾後歲月幾たびか移りて、木は成長し、花は開き、枝は屋上に達して、また地に垂るゝに至れり、而も誓ひたる人は終に歸り來らず、セノリタ、ポニフェシオは、空しく黃薔薇の影に佇立して待つ事あるものゝ如く、終に嫁がすして、其生涯を終りたりと。

嗚呼何ぞ其情事の優婉にして、人生の悲惨なるや。

此日午後電車にて、パシフィックグループに遊ぶ、此地モントレイの市街を距る事二哩、街路清潔にして、風景極めて美なり、海岸に海水浴場及び日本人の茶亭あり、曾て野田三郎氏の建築せ

るものにして、現時半田孝作氏の所有に屬す、建築の構造頗る雅致を備へ、灣内の眺望實に第一に位す、海岸に岩石多く、稜々亂立して、白波之を嘯みて、奔騰烟を爲し、山上に松樹あり、鬱鬱として千古の色を渝へず、灣内の水光、陸上の街家、色彩の配合、真に一幅の山水畫を見るが如し、大森街を通過して、バイノス岬端の邊に至れば、外洋の狂浪巨濤、濤々として相打ち心魂轉た悸動するを覺ゆ、已にして日暮に至る、乃ち電車にて旅館に歸る。

二十二日 此日デルモントに遊ぶ、デルモントホテルは、此地方有名の旅館にして、庭園の美なる事加州の旅館中、未だ其比を見ず、余此日ホテルの附近を散歩し、其庭内を逍遙す、旅館は瑞西ゴシック派の建築にして、園の中央を占有し、其構造極めて複雑なり、客室五百に達し、庭園の廣さ百三十六英町あり、庭内に亭々たる幾多の老松あり、柏樹の類また少からず、蒼鬱として相繁翳し、陰森として晝尚ほ暗きが如し、天人堂園、打毬場、泉水池の如き、皆其規模に適し、其廣大幽美、之に遊ぶ者をして嘆稱措く能はざらしむ、真に加州庭園の王と稱するも溢美にあらず。

サンルイスオビスポ郡の調査

サンルイスオビスポ郡は、南はサンタバーバラ郡、東はカーン郡、北はモントレー郡に界し、西は太平洋に面す、海岸山脈及びサンタルシヤ山脈、郡内を貫通し、東部は山地多く、クレストン

及びサンルイスオビスポ以西の平地は、頗る産物に富み、無花果、橄欖、蜜柑、胡桃、葡萄を産し、牧畜、穀類、牛乳、豆、辛種子等の産出、少からず、ロースオサス平原は、レモン、オレンジを産し、モノ、カヨコス地方より産する牛乳は、一ヶ年一カーロトを産す、キヤムプリアの鐵山また最も有望なりと稱せらる、サンルイスオビスポの氣候は、夏期九十四度を上らず、冬期は三十二度を以て最下と爲す、郡内の人口一萬八千、一ヶ年の産物千百五拾萬弗なり、日本人の此地方に在るもの少く、自ら獨立して農園または市街營業に従事するものあらず。

モントレー郡日本人發展地の調査

モントレー郡は、南サンルイスオビスポ郡に界し、北はモントレー灣に臨みて、一部をサンタクラズ郡に接し、東北は斜めに、キングス、フレズノ、サンベニートの三郡に隣り、西南は太平洋に面す、サリナス河は、サンルイスオビスポ郡より發し、郡の中央を貫きてモントレー灣に注ぎ、其流域は一大沃地を爲して之れをサリナス平原と稱す。

サリナス 桑港より百十八哩、羅府より三百五十七哩あり、下サリナス平原の首都にして、モントレー郡役所あり、コースト山脈のガピラン及びサンタルシヤ二山脈の間に位置し、人口千五百、市街整頓して、瓦斯及び電氣の供給、備り、有力なる銀行及び高等學校あり、氣候溫和にして、冬期少量の霜を見る事あり、夏期暑熱高きも九十度に足らず、スペクルス製糖會社は千九百

一年に於て、二十七萬三千二百二十二噸の原料を使用し、現時は更に多數の製造を爲す、産物は馬鈴薯、麥、玉葱、馬、山羊、豚等にして、此地の主産たる砂糖大根は、一噸に付價格五弗にて買入れ、一英町平均の作高十五六噸と爲す、果物には林檎、梨、クインス、櫻、ニクタリン、ブルーム、無花果、アモンズ、胡桃等を産し、苺、葡萄苗等また少からず、降雨の量は平均十五時にして千八百九十九年、クラウス、スプレクルス、製糖會社の事業を開始せる以來、噸に發達するに至り、最初同胞の居住者は、一二の醜業婦に過ぎざりしが、大分縣人犬丸政一、馬場小三郎等キヤストロピルより労働者を率ひて來り、後ち高尾庄太郎、宮崎儀一、野田音三郎等此地に入り日本人の發達漸く見るべきものあり、是に於て有志の徒、稻澤牧師を長老、教會に聘し、野田音三郎等モンローの富豪、デー、ビー、ジャックスに交渉して、年二百弗の傳道費を出さしめ、盛んに宗教的感化事業に努む、後ち此教會は、遂に其敷地を買ひ、以て今日の基礎を爲すに至りたり、地方農園の率先者としては、初め山口縣人白地政次郎等此地に入り、明治三十五年頃顯著なる發達を爲すに至り、現時の市街營業者としては食料雜貨商二、旅館七、料理店及飯屋五、湯屋三、玉突場三、床屋三、靴屋一、洗濯屋一、豆腐屋一、酒屋一、時計店一、自轉車店一あり、左の二會社は此地重要な商店なり。

△株式會社豐國商會 明治三十九年の創立にして、資本總額を參萬弗とし、貳萬五千弗の拂込を爲す、一ヶ年の賣揚貳萬弗以上なり、社長には伊藤五郎、副社長に平井廣次、取締役に鳥越關藏、中西良藏、遠藤喜太郎、長野久吉、監査役に遠藤喜太郎、長野久吉を選定す。

△株式會社勸業社 明治四十二年の創業にして、資本金六千弗、農産物賣買、契約事業、金融事業及び食料品販賣を以て主たる營業とす、社長に高尾庄太郎、取締役に杉田實、岩崎仁作、今村正雄、下司竹治郎、支配人に尾上善八、監査役に宮川力太郎、今村正雄を選定す。

此地土地所有者一名、面積五英町、現金借地農家二十三組、借地面積二千八百四十英町、歩合耕作者八組、作地面積七百四十英町、大根受負耕作者六十七、作地面積八千三百三十七英町あり、主として砂糖大根、豆、馬鈴薯、玉葱、麥、秣草等を作れり、農業多忙の時期労働者の來り集る者一千人以上なり、地方の借地料一英町拾弗乃至七弗にして、一英町の水代一ヶ年參弗七拾五仙なりとす。

△日本人會 明治三十七年一月の創立にして、會長を高尾庄太郎とす、同年四月、日露戰爭の起るや、報國義會を起し、參千弗の軍資金を醜集して、母國政府に獻納し、明治三十九年桑港震災の際、參百六拾弗の救濟金を募り、明治四十年壹千弗を醜集して、日本人共同墓地を求めたるが如き、此會の事業として記憶すべきものなり。

附記 砂糖大根園の労働

此地砂糖大根園労働者の賃金は、日傭給、間引壹弗五拾仙、大根首切貳弗以上なり、大根園受負耕作者の支拂ふべき費用は、一英町に付て、首切時期迄に五弗の費用を要し、首切の時期となるや、一英町に付十五噸の收穫ある園地の労働には一噸に付四拾五仙の切賃を支拂ひ、十四噸の收穫ある園地の労働には貳仙を加へて四拾七仙とし、以下一噸を減する毎に貳仙を増す、若し十五噸を上りて、十六噸の收穫ある園地の労働賃は一仙を減じて四拾四仙とし、漸次一噸を増す毎に一仙を減す、之を名けて二仙上り、一仙下りと稱す、是れ大根の重量の輕重に依りて、勞力に難易の別あるに因る。

「キヤストロピル」サリナスの北九哩にして、モントレー鐵道線路の分岐點にあり、平素日本人の在住する者五六十人、多忙の期節には三百人内外の労働者來集す、現金借地農家三、借地面積三百五英町、受負耕作者十七組、受負地面積千五百六十英町あり、主として甘菜、豆、牧草及び馬鈴薯を作る、借地料一英町拾弗乃至拾五弗とす、營業者として鳥羽某の經營せる旅館一あり。「キングシチー」サリナスの南四十三哩にして、砂糖大根の作地たり、戸數百餘、日本人の事業としては、福田壽平、スプレクルス會社より、千三百五十英町の砂糖大根園を契約し、常に三四十人の労働者を使用す、多忙の時期に於ては、百三十人内外の日本人労働者此地に入る、砂糖大根の外、牧草及麥等あり、此邊牧草園の借地料は、一英町四弗五拾仙乃至五弗とす。

「メツツ」キングシチーより十一哩の北にして、キングシチーと同じく、エスビー鐵道に添へり白人の居住者三十戸あり、日本人の現金借地者二名、借地面積五十英町、他は受負耕作と爲す、日本人の労働者十數名あり。

「ソルダ」サリナスの南二十六哩にして、白人の居住者六十戸内外あり、砂糖大根及び馬鈴薯を耕作する者あり、平素五六十人の日本人居住し、農園多忙の季節には二百人内外の労働者を要す、現金借地者一名、借地面積五十英町、收穫分配耕作者五名、耕作地面積二千六百四十英町あり、就中鹿兒島縣人岩切兵藏、宮崎縣人杉田實の共同作地千五百英町は、其事業の最も大なるものとす。

モントレー 此地はモントレー灣に濱し、キヤストロピルより十六哩を距つ、エスビー鐵道支線の便あり、人口二千、風景の佳なるど、氣候の温和なるが爲に、常に避暑、避寒の爲に來る者多く、完全なる學校、電氣、水道、銀行、公園等の設備至らざるなし、此地は加州沿岸に於て最も漁業の盛なる地にして、鮭は此地の特産として知らる、近來日本人漁夫の鮑及び他の雜魚を漁する者ありて、漸次其販路を擴張するに至れり、カメルンの地方は主要の農産地にして牛乳、馬鈴薯、豆、砂糖大根、蜂蜜、果物、羊豚を産出す、魚類の中、シーバス、鱈、ラツカ、鱈、カマス等の魚類は重に日本人漁夫の獲物として、其販路も重に日本人社會にあり、鮭漁の季節、日

本人漁夫の集まるもの毎年三百人内外に達すれども、其漁期を過ぐるや、彼等は北抵四方に散去したりしも、現時他の魚類の漁獲を始めてより、常時五十人の漁夫、此地に居住するに至れり、鱒は、雑詰と爲して輸出す、其額少からず、此地漁夫の労働賃金平均一ヶ年五百弗にして、一人毎年三百弗の貯蓄を爲すを普通とす、日本人のギヤスリンボート所有者は凡て六組にして、一組に付千弗の資本を投じ居れり、始めて日本人の漁業に従事したるは、明治三十年野田音三郎鮑の採收を始め、其後野田の去るや、千葉縣人小谷源助、カメル地の地に入りて、鮑の採收を爲し、之を雑詰及び干鮑として輸出し事業漸く盛ならむとするや、加州の法律は干鮑の製造を禁止したるを以て、現時は主として雑詰として、之を支那及び日本に輸出しつゝあり、斯くて明治三十二年新納吉太郎、魚類の販賣に従事するや、此地の漁業大に發達するに至れり、漁業同業組合は組合員百八十名あり、日本人の市内營業は、尙ほ幼稚にして旅館六、西洋洗濯所一、魚類販賣業一、美術店一、玉突場一、床屋二、靴屋一、湯屋二あり、農業方面にては現金借地農家六戸、借地面積百八十二英町あり。

△日本人會 モントレー日本人會は現時百四十名の會員を有し、理事に名尾重太郎、副理事に小谷源之助、會計に内田斧治郎、石橋直藏、幹事に新納吉太郎を選擧せり。
 「パンフイクグロップ」 モントレーを距る事、二哩海水浴場、釣漁場等ありて白人の娛樂地たり

日本人の在住者少く、本田孝八所有の日本茶店あり、モントレーより鐵道及電車を通ず、市内に酒舖を禁じ、基督教徒の理想的市街とせらる、人口二千餘、旅館の完全なるもの多く、カメル灣との間は、其距離六哩にして、此間、有名なる勝地あり、遊覽の客多し、ライトハウス、レーキマセラ、モスピーチ、ポイントジョー、シーオラック、サイプラスポイント等皆此地方の名勝地たり、有名なる十七哩ドライブは其巡路の延長を名けたるものにして、アーメルミッシオンは、今より百三十年前の遺物なり。

モントレー郡成業列傳

△高尾庄太郎 大分縣下毛郡中津の産にして文久二年生る、明治二十年桑港に上陸し、桑港市内及びサクラメント地方の農園に労働し、當時の書生労働者として率先白人と折衝し、着々支那人労働者の領域を占有したり、明治二十五年ハリソン氏の米國大統領選舉を争ふ頃、野田音三郎、馬場小三郎等と諮りて日本人労働組合を組織し、労働者の周旋に公然五分の周旋料を納むるの規定を立つ、此規定は在米日本人間一般の慣例となりて、以て今日に至れり、其年組合の事務所をバカビルに設け、寄附金を集めて益々日本人社會の秩序を整頓するに努め、遂に其會長に推さる、後桑港にありて一時飯屋を開業したりしが、三年にして之を止め更にサクラメントに於て野田、青柳、松岡、岸添の同志と移民事業を始め、便利公所の看板を掲げて日本人の爲めに便利

を興へたる事少からず、明治三十二年サリナスに來りて大根園耕作を爲し、更に艸花栽培の事業に従事する事七年、成金の方面に於て大なる成功を見ざるも、常に心を同胞發展の事に留め、滔々たる殖民地の悪風汚俗の中にありて、而かも終始品行の端正を保るもの彼の如きは稀なり、サリナスの同胞社會は彼を仰ぐ事師父の如く、現にサリナス日本人會會長たり。

△西博夫 鹿兒島縣出水郡東長嶋村の産にして慶應二年正月元日生る、始め桑港に上陸するや、高尾庄太郎等の一團に加りて、ソノマ郡の伐木業に従事す、當時労働者の給金極めて低廉にして、日々十八仙の粗食を爲して而かも一日僅に四仙を剩し得たるのみと云ふ、以て當時に於ける労働者の艱苦を察すべきなり、已にして明治二十二年一旦歸國し、三ヶ月にして再渡米を爲し沙市附近に於て一時道路修繕の工夫となりたるが、後ち米國巡洋艦のキャピテンボーイとしてアラスカに航海し、一年にして肋膜炎の爲に勤務を解かる、彼れ此航海中、北海の風濤怒りて、屢屢危険に遭遇す、一日怒濤船體を翻弄して風伯威を逞ふし、彼れは勤務中海上に吹飛ばされ、氷山の間に落つ、偶々船員の浮帶を投ずるあり、僅に之に依て九死に一生を得たり、當時二人の米人水夫は遂に海底の鬼となりたりといふ、彼れ悟る所ありて爾後再び海上の生活を爲さず、専ら農園に奮闘して資金を蓄積し、現にサリナスに於て、三百二十英町の砂糖大根園を耕作し、年々得る所の利益少ならず、此地方の大農として其名を知らる。

△北興三松 石川縣の産にして現時山口縣に籍を有す、明治十八年米國東洋艦隊のワシントン政府より回航を命ぜらるゝや、乗組の缺員を補ふが爲に、十八人の日本人を以て一時之を補充したる事あり、此際水兵として編入せられたる者五名あり、北興三松其一人にして横濱抜錨以後桑港に達する二ヶ月の間、彼れは米國水兵と同様なる操練を受く、已にして桑港に上陸し暫く此地にあるや、偶々人の捕鯨船に乗組を勸むる者ありて之れに搭乘す、之れ明治十九年三月十八日にして、爾後航海三ヶ月、七月に至りてペーリング海中ハックス島に着す、此地は北極寒帯地にして太陽を見ざる事夜間僅に二時間、氷山常に海上に漂ひ、島民皆獸皮を着す、一行の到着するや、全島の人民三百名ばかり擧て埠頭に出で歡呼して之れを迎ふ、已にしてホークスアイランド、ポインスパール等に寄航し鯨魚十三頭を獲て歸る、此總價凡そ五萬弗と稱す、捕鯨團の規定たるや、船内の労働者は、乗船の際五拾弗を其仕度金として受取り、他は收獲の二分の一を受るものとす、乃ち此八ヶ月の航海中、彼は貳百參拾五弗の配當金を得て桑港に上陸し、其後また加州沿岸の航海に従事する事一年半、明治二十二年布哇に航して或商店に働く事二年、偶々桑港に於て大博覽會の開設せらるゝや、此機を利用して船員寄宿所を設け、旅館の營業に従事すること四年、更に煙草會社に労働する事四ヶ年、明治三十二年サリナスに來りて北商會を開く、之れサリナス日本商店の始めにして、後ち其商店を廢業して大根園の請負を爲して巨額の利益を得たり、乃ち

參千弗を投じて、土地五英町及び家屋并に附屬農具一切を買入れ、他に泉築三と共同にて六百弗を投じ山林百四十英町を購入したり、此地方同胞社會唯一の土地所有者たり。

△平井廣治 岡山縣赤坂郡西高月村の産にして嘉永二年生る、明治二十四年布哇に渡航し、砂糖耕地に勞働する事三年、一旦歸國して二十九年再び渡米し、夫妻共に、アダムス温泉のホテルに勞働する事二ヶ月、後ちサンノゼ及びアルマ等にありしが、明治三十二年サリナスに來り、農園及び白人の家庭に勞働して貯蓄する所少からず、遂に旅館及び食料雜貨店を開業し、後ち商店は之を株式組織と爲して之を豊國株式商會と稱し、現に其重役に推さる。

△圓名彌作 廣島縣賀茂郡御園宇村の産にして、明治三年九月生る、明治三十五年八月、タコマに上陸し、居る事一ヶ月にしてサリナスに來り、砂糖大根園に勞働する事一年、明治三十六年より四十二年に至る間、ブルムデール、ピサンテン等に於て豆及び馬鈴薯を作り、貯蓄する所少なからず、明治四十二年現金七百五十拾弗にて、百英町の地を借り、人参、豆、玉葱、オーツ、馬鈴薯等を作り以て現時に至れり、實兄を角一と云ふ、三十八年渡米し、現にその事業を補佐す。

△長尾助三郎、二宮利三郎 長尾は岡山縣御津郡金川村字鹿瀬の産にして、明治十二年生る、三十三年四月、タコマに上陸し、ポートランドにて鐵道にはたらき、此の年冬ワイオミング州ロツクスプリングの炭坑に勞働し、翌春加州に歸りて、ワッソビルに至り勞働する事一年半、已にし

て百英町の土地を借り、麥及び馬鈴薯を作る事三年、明治三十八年サリナスに至り、二宮と共同にて、フロンデールの地三百英町を借りて、之を開拓し、豆、馬鈴薯等を作りて利益を得ること少なからず、現時馬二十頭を有し盛に其經營に従事す、二宮は同縣同郡宇甘東村の産にして、明治十五年五月生る、三十三年三月、タコマに上陸し、同地にて鐵道に勞働する事四ヶ月、其後伐木及びハツプス摘採の勞働に従事する事四ヶ月、其年十一月桑港に出で、鐵道人夫となり、後ちワッソビルよりサリナスに至り、明治三十六年長尾と共同して現時の事業に従事し、別に白人の農園百六十英町の歩合作を契約し、牧草及び馬鈴薯を作り、二人各妻を迎へ一家に居住す、此地方堅實なる農家として數へらる。

△馬本政治郎、新宅富藏 馬本は廣島縣廣島市の産にして明治四年生る、明治二十五年、タコマに上陸し、オレゴン州にて鐵道人夫たる事二年、後ち加州サンノゼ及びサリナス地方の農園に勞働する事三ヶ年、已にして七八十英町の砂糖大根園を契約したるも一年にして其事業を中止し、明治三十三年サンノゼ附近のサラトガに於て、三人共同にて洗濯業を開き、三年にして之れと關係を絶ち、更らに新宅と共同してキャストロビルに入十五英町の地を借り之に麥及び砂糖大根を作りて巨額の利益を得、後ち明治四十三年更めて百四十一英町を借り、之に麥、馬鈴薯、砂糖大根等を作りて盛に耕作に従事す、新宅は廣島市の産にして、慶應元年八月生る、明治二十九年、

バンクーバーに上陸し、アイダボ州の鐵道人夫たる事二年、後ち加州に出で、サンノゼ地方の果樹園に働く事二年、其れよりキャストロビルに至りて砂糖大根園を契約し、又サリナスに至りて、馬鈴薯を作る事二年、已にして此地を返付し、爾後馬本と共同して今日に至れり、明治三十七年妻を迎へ、現に三子あり。

△益井菊松 廣島縣佐伯郡地御前村の産にして、明治元年生る、明治二十二年妻と共に布哇に渡航し、砂糖耕地に勞働する事三年、二十六年六月桑港に上陸し、直にサンマラオ郡の白人の家庭に入り、花園及び搾乳の働きに從事する事二年、後ちサクラメント川下の地アイルトンに入り百英町の農園を經營する事一年、水害の爲めにサンノゼに轉じ、果樹園に勞働する事一年、其れよりサンルイスオビスポ郡テンフルトン及びキングシャーにて伐木を爲す事一年半、後ちサリナスに出で、三百英町の砂糖大根園を經營する事二年、一時失敗して農園の請負事業を爲し居たるが、明治三十七年更らに百五十英町の地を借り、再び農園の獨立經營者たるに至り、翌三十八年改めて、百十英町を借地し、之に砂糖大根を作り、別に三百英町の砂糖大根園を受負ひ、其事業の盛大なる事サリナス地方屈指の大農家たり、明治四十二年度の如きは、耕作地五百英町の内平均一英町の純益貳弗七拾五仙にして、千參百七拾五弗の收得ありたりと云へり、此年一英町の大根作高十五噸にして、一噸に付壹弗拾仙宛の利を得たりと云ふ、現時使用の馬十六頭を有し、農

具費に千貳百弗を投せり、三十六年妻を迎へ四子を擧ぐ、彼れ又三人の兄弟あり、米國に於て皆獨立の事業を經營しつゝあり。

△桑原寅四郎 岡山縣三津郡植上村字中植の産にして、元治元年六月生る、三十二年三月、ポートランドに上陸し、翌年七月迄鐵道人夫として働き、後ち加州に入り、櫻府より布市に至り、一ヶ月葡萄の摘採を爲し、また鐵道ギヤングのコックとして働く事二ヶ月、再びフレズノ、サクラメント等の農園に働く事一年、更にモントレーに至りて伐木に從事したる事ありしが、明治三十五年四月、サリナスに來り、百十英町の砂糖大根園を受負ひ、三十六年山口縣人北與三松、福岡縣人田中某及び河田某等と共同して百五十英町の砂糖大根園を經營し、三十七年益井菊松、河田倉藏、北與三松と共同して之を經營する事一年、三十八年獨立にて現金千參百弗を投じ土地百英町を借り之に砂糖大根を作りて利益を得る事少ならず、四十三年更に契約を改め、現金千五百七拾五弗にて、百二十二英町の地を借り、之に砂糖大根を作り以て今日に至れり、使用の馬十六頭を有し、農具費千五百弗を投せり、實弟音三郎は明治三十六年渡米し現に兄の事業を補佐す。

△森本熊吉、豊島淺吉 森本は廣島縣佐伯郡己斐村の産にして元治元年生る、明治三十三年二月英領グイクトリアに上陸し、ポートランドより鐵道人夫となりて、ポカテラに至り、勞働する事一ヶ月、身體の之に堪へざるを知り、途中四百五十哩の間、同行者五人と共に徒歩旅行を爲す事

七日間、途中の困難真に名状すべからざるものあり、已にしてポートルランドに出で、其より北加州の農園に労働し、後キヤストロビル及びサリナス等に於て砂糖大根園を契約し、翌四十一年四月サンノゼ市有田自轉車店に至りて、自轉車營業の事を経験し、此年五月一日、豊島茂吉と共に同してサリナス市に旅館及び自轉車店を開業し、現に其營業に従事せり、豊島茂吉は廣島縣安佐郡三篠町の産にして、明治十七年生る、明治三十九年渡米し、バンクバーに上陸し直に桑港に來りて市内労働に従事したりしが、森本と相知るに至り、共同して現時の營業を爲すに至れり、共に此地に信用を有し、營業の利益少なからず。

△野田文作 靜岡縣田方郡函南村の産にして、明治十二年生る、明治三十一年渡米してワツソンビルに至る、是より先叔父野田徳次郎の此地に入りて農業に従事せるあり、乃ち其事業を助けてワツソンビルに在る事二年、後叔父と共に二百英町の大根園を經營する事六年、明治四十年獨立して、サリナスの大根園八十英町を、一英町拾五弗にて現金借地し、盛に砂糖大根の耕作に従事し、年々利益を得る事少なからず、使用の馬十一頭を有し、また地方に於ける有力なる農家の一に數へらる。

△新納吉太郎 廣島縣安藝郡二保島村の産にして、明治十三年生る、家代々青物問屋にして、幼時より關西地方水産物の取引に従事し、頗る斯業に經驗あり、明治三十五年渡米し、始め農業に志したるも、病を得てモントレイに來り、偶々近海に於て産するを聞き、之を原料としてヨジムチンキを製造せんとす、已にして其植物の眞のかじめにあらざるを知りて、其目的を抛棄し、此地兵營の將校俱樂部に入りてコックとなり、漸次地方の事情に通ずると共に、魚類販賣に着目するに至れり、當時此地日本人の漁業に従事する者八十人内外あり、然れども彼等は大抵鮭の漁期終ると共に、他に散去して此地に留る者なかりしが、彼が魚類の販賣を始めてより、一般の魚價を騰貴せしめ近海の漁業發達して漁夫の永住を爲すもの多きに至れり、後ちフレソノ、及びサクラメントに支店を設け、一方にはギヤスリンボートを求めて、自ら漁業を營みたるを以て此間よく同業者の競争に堪へ、以て此地に於ける魚價を左右するに至れり、彼の事業を始むるや自ら魚車を驅りて販賣し、其機敏なる活動、他人の意表に出づるもの多し、現時加州の水産家として廣く其名を知らる。

△石橋直藏 和歌山縣日高郡由良村の産にして、明治五年生る、曾て横濱の豪商大谷嘉兵衛の内にある事數年、當時西村庄太郎製茶の版路を開かんとして屢々米國に渡航し、其歸朝するや、モントレイに於ける、野田音三郎の鮪採收業の有望なるを語る、彼乃ち決心して米國に來り、就て親しく野田の事業を視るに、モントレイの鮪は、其品質日本産の物に比して劣る所あり、之を本國の市場に輸出するも利益あらずと、乃ち當初の目的を變じて桑港に出で、労働の餘暇ビジネス

カレーンに入り、苦學する事二年、之を卒業して爾後四年間、種々の勞働を爲して幾分の貯蓄を爲し、一時野田香三郎と共同して、二百英町の農作を爲したるも其事業遂に失敗に歸し、偶々日本入洗滌所の賣物ありたるを以て、之を買ひて致々其業務に勤めたりしが、事業漸次に隆盛を來し、今や白人同業者と競争して優勝の位置を占むるに至れり。

△内田斧治郎 神奈川縣足柄下郡下府中村の産にして明治十年十二月生る、明治三十三年桑港に上陸し、直にアラメダ郡ブレセントンに至り大根園に勞働したるが、脚氣病に罹りて同郡ヘイワードに至り留る事一ヶ月餘其れよりサンノゼに至り勞働する事六ヶ月、病の全快するや、三十四年一月モントレー地方の伐木に従事する事四ヶ月、漸く參拾弗を貯へたるが、偶々實弟角太郎の桑港に着したるを以て、貯蓄の全額を旅費とし、之を桑港に迎へてモントレーに歸り、共に鮑鐵詰會社に入りて勞働する事四ヶ月、已にして兄弟相別れ、彼は單身十七哩の山中に、樹皮剝取の勞働を爲す事三ヶ月、附近に一軒の土人あるのみにして寂寥言ふべからざるものありしと云へり後ち勞働中キャストビルに於て病を得、弟角太郎のチバタ州にあるを招き、再びモントレーに病を養ふ事八九ヶ月、終に激烈なる勞働の身に適せざるを知り、明治三十五年の天長節を以て一の下宿屋を開業し、翌年十一月更に食料店を兼業し、以て今日に於ける内田旅館を見るに至れり現時旅館及び商店の外、常に百餘の勞働者を山林及び農園に供給して、モントレー日本人社會

最も人氣の盛なるものとせらる、彼の今日に至るや、屢々疾病の其身を苦しめたるのみならず、漁業の困難なる時に於て、貸金の回收を爲す事能はずして一時破産を爲すに至りたるも、克く數度の艱難を凌ぎて、以て現時の基礎を作るに至る、艱難汝を玉にするの言味ありと云ふべし。

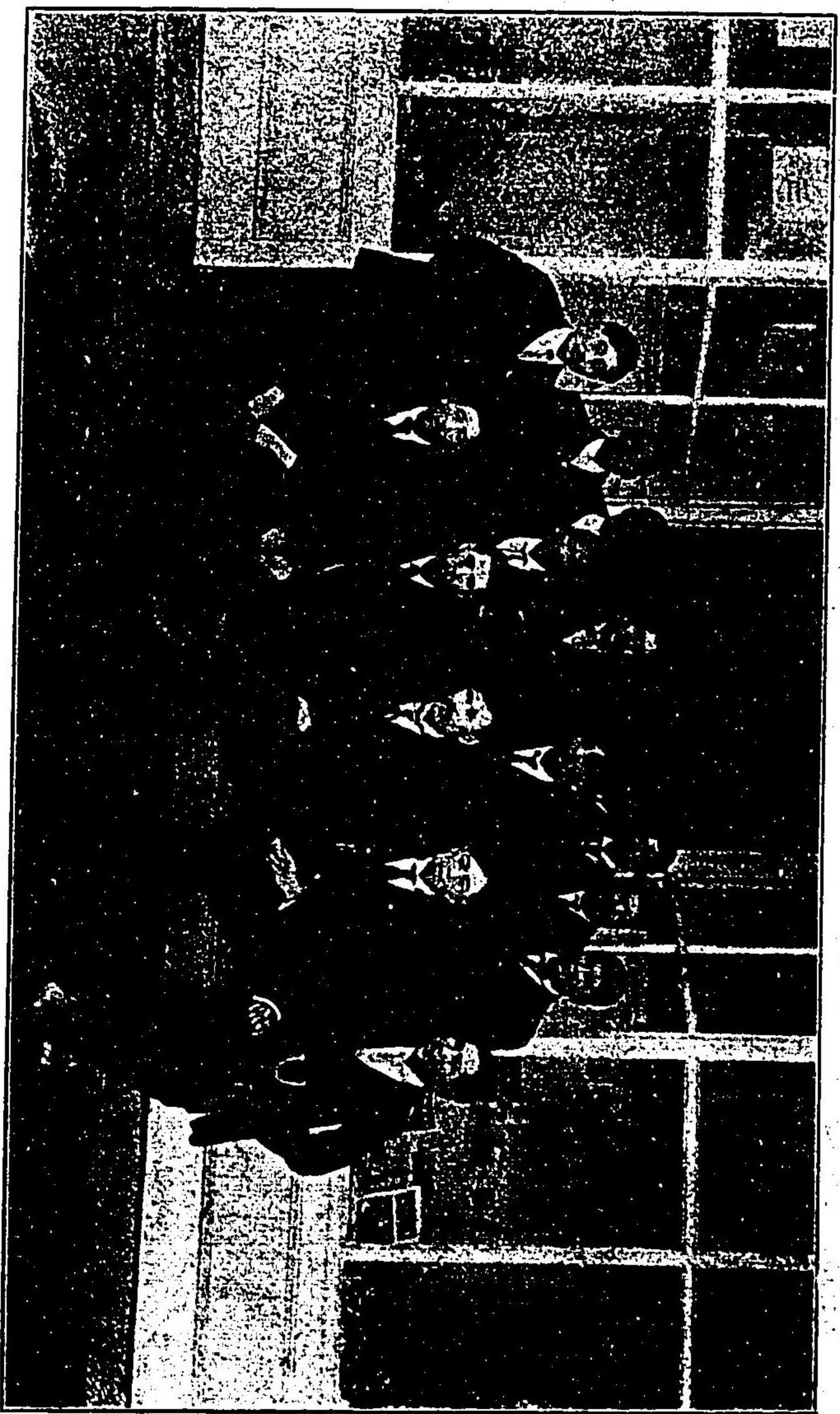
第二節 サンタクロース郡及びサンベニト郡

サンタクロース紀行

余加州第二回の旅行に上るや、フレズノより直にワツソンビルに入り、留る事月餘、サンタクロースは地方の名勝地たるを聞き、一日之れに遊ぶ、乃ち記して此間に挿入す。

明治四十三年四月八日、午前九時五十分、ワツソンビル停車場よりエスビーの汽車に乗じ、サンタクロースに向ふ、春正に深くして天日殊に麗艶、菜花黄を野に呈し、林檎花の、半ば其美觀を青葉に譲り、豊圃の面、加州花の黄金色を爲して、燦爛眼を驚かすものあり、汽車は平野を馳せて丘陵の傍を過ぐ、樹木已に新緑を裝ひ、線路の側ら、蓬、土筆、坏多く、早蕨の長く延びたる、殊に懐しげに見ゆ、十時頃丘陵盡きて海洋の水現はれ、間もなくアブストの驛に達す、此地人家數十戸、村樹の間、海上の風景頗る目を喜ばしむ、已にしてキャピトラ驛に着す、此地人家百餘、市街はソクエル河口に位置し、サンタクロースを距る事四哩、江海船を浮ぶべく、美

なる旅館、優雅なる別荘等あり、驛の附近に櫻花の白く咲きたるあり、十時三十五分、サンタクローズに着す、此地は北加州沿岸第一の勝地にして、風光の美、遠近に開ゆ、サンデーゴ、サンタバーバラ、モントレーと匹敵して、山景、水色、人工の設備、遠く之に優るものあり、人口一萬四千、市街は山を負ひ、海に瀕し、街上に電車を通す、車馬雜鬧、頗る般賑の光景を爲す、瀛車を下りて、此地の名士、丹正之氏を訪ふ、丹氏は伊豫國西條の人、夙に土佐派自由志願の感化を受く、曾て白目嶺山の事件に就て政談演説會を開き、意氣の奔放する所、凶徒囂集罪に問はれて獄裡の人たること二年餘、後ち國會開設請願の爲に、上京して退去を命せらる、是に於て明治二十二年志を決して渡米し、自ら此地に静隠して、現時盛大なる器械洗濯業を營み、土地家屋を買ひて、永住の計を爲し、事業の盛なる事、米同業者中の巨擘と稱せらる、其爲人、長身瘠軀、而貌霸氣あり、一見氣慨の人材たる事を知るべし、氏余の往訪を喜び、此地の事情を語る事詳なり、已にして晝飯を終り、氏自ら貸馬車屋に架電して馬車を準備せしむ、乃ち午後一時同行者田中氏と共に此地の名勝サンタクローズ山中の、ビッグツリーに遊ぶ、山は市の東に登へ、最高峯ローマブリータは、四千二百八十七呎の高度を有し、山中に、レッドウッド、松、樅、檜、スプルース、マドロン等の樹木繁茂し、北加州沿岸地の深山たり、行く事二哩にして、山路の溪流に添ふあり、樹木鬱蒼、阪路漸く急なり、登るに従ひて、峯愈々高く巖益々深し、路傍に大なる



(第一番上井長社 央中列前) 員役共と會商本日本社會式株 市ルビンソウ

ワッソンビル
日本人社会の
元祖
故 木村作三



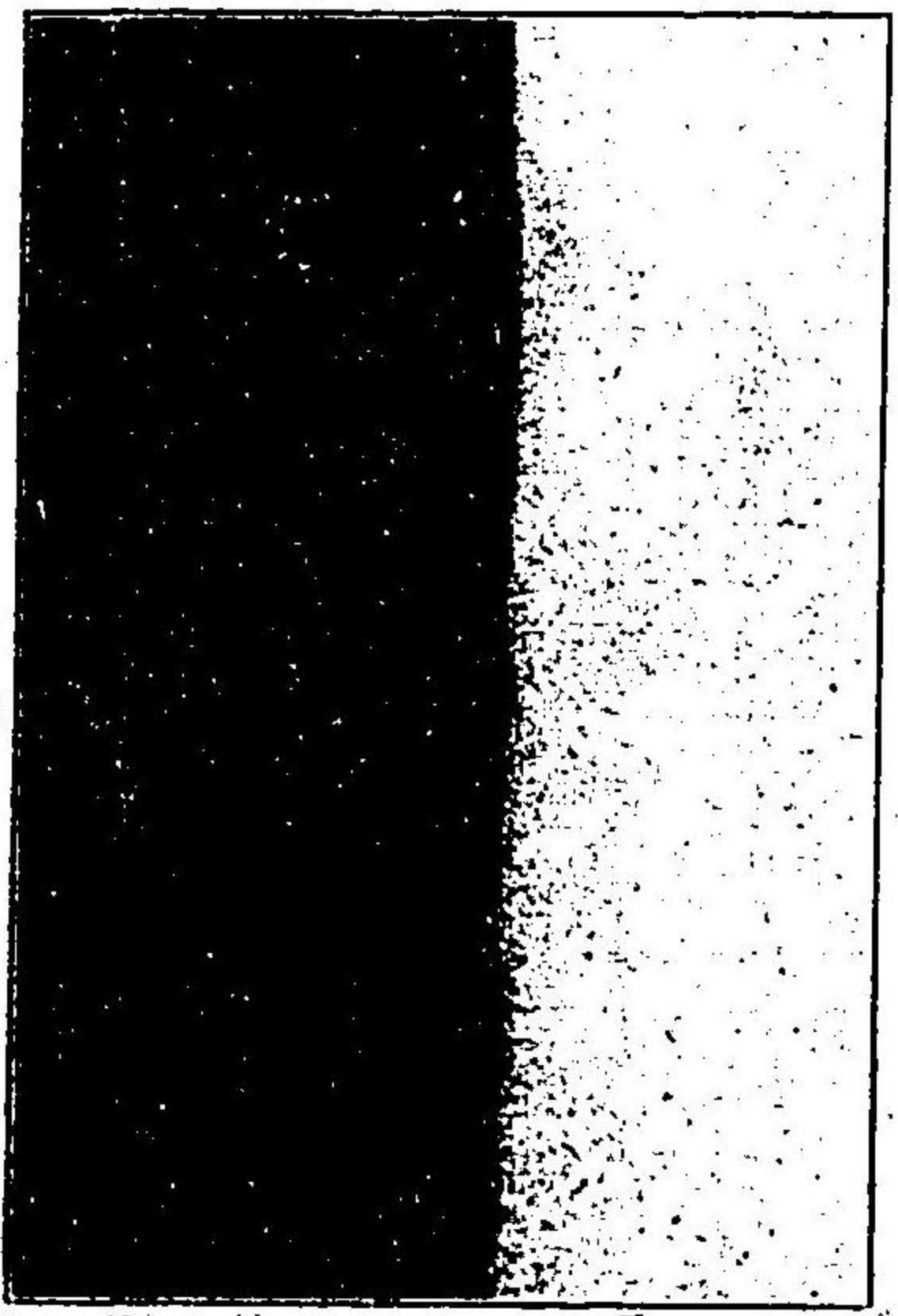
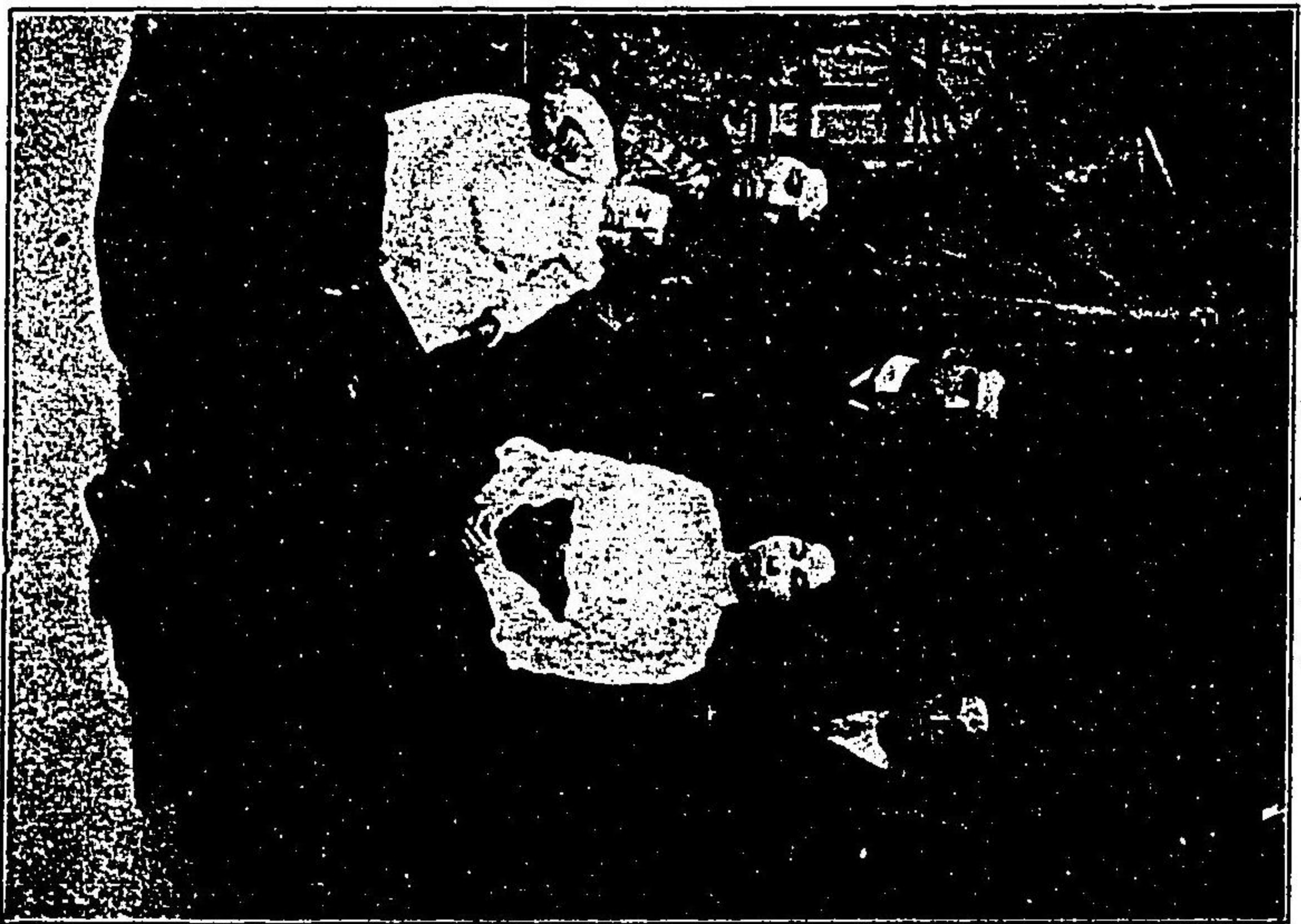
ワッソンビル米日倶楽部幹事
東 鏡 太 耶



ワッソンビル米日倶楽部建物 (明治三十六年創立)

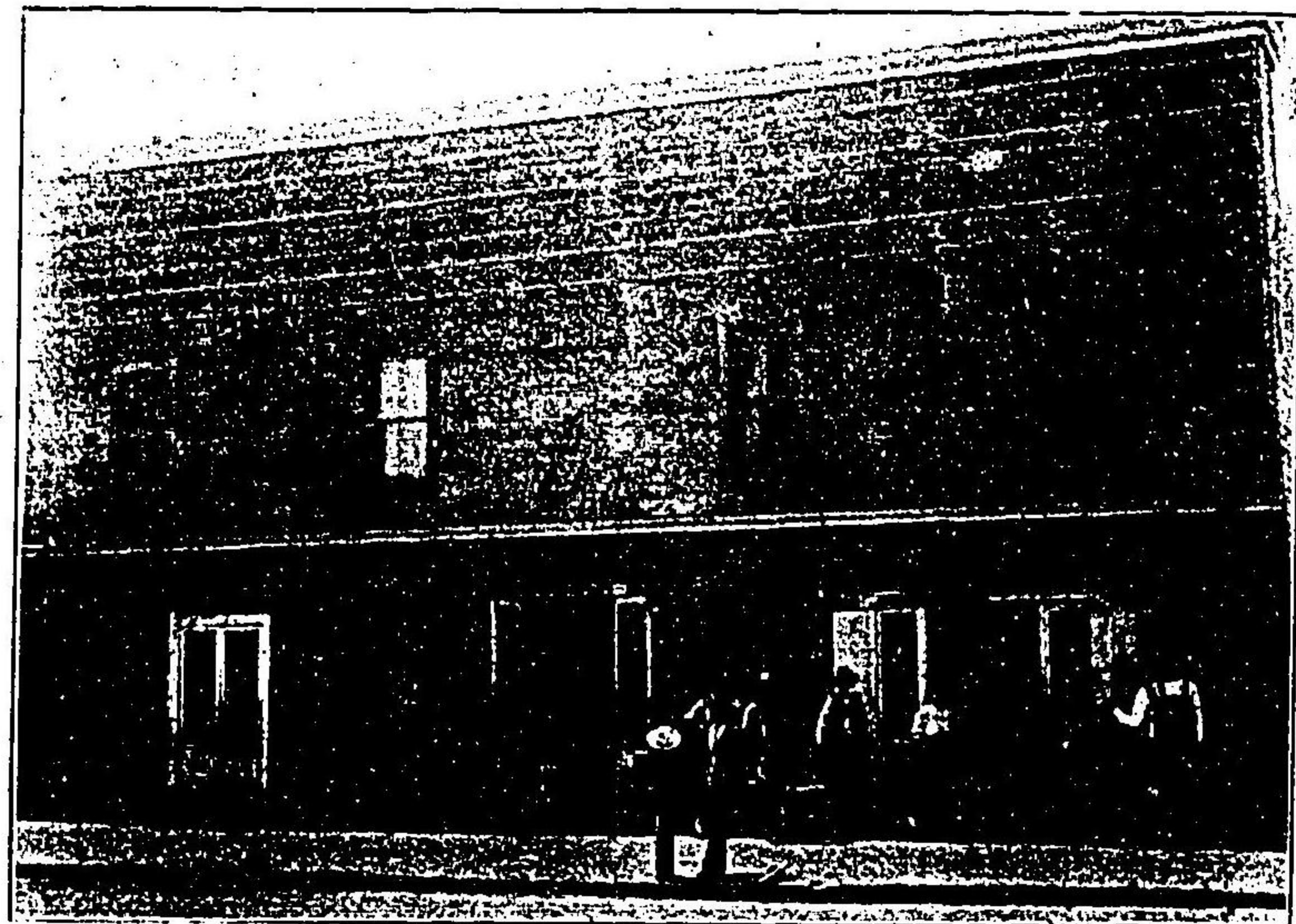
ワッソンビル
に於て最初に
日本人を使用
せるシー、エ
チ、ロジス

サリナスの土地所有者 北 興 三 松 と 家 族



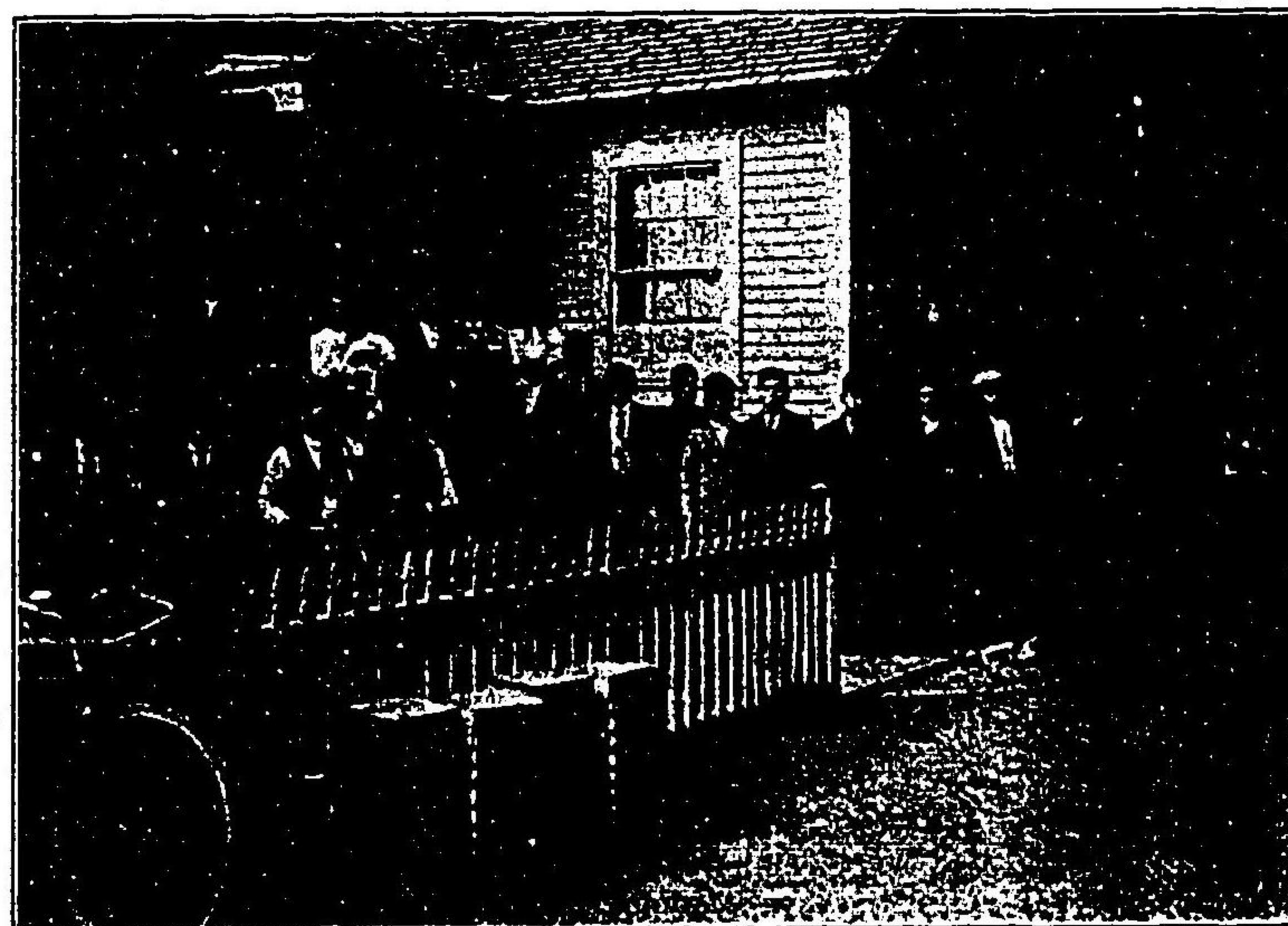
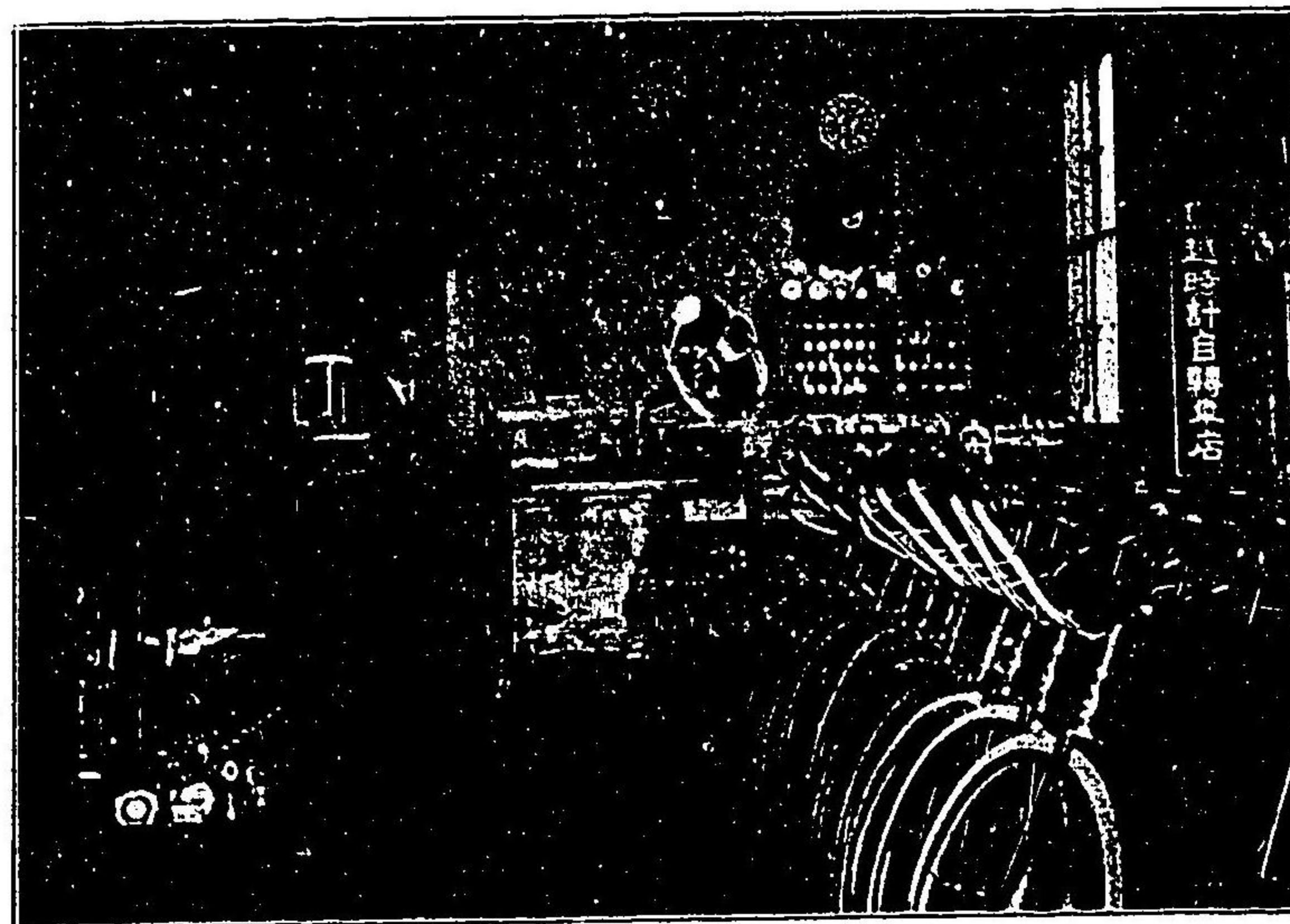
ワッソンビル附近 ワイ興産社の荘園 (上部は全部の地主、下部は遺族の光景)

店 商 村 谷 シ オ ン サ



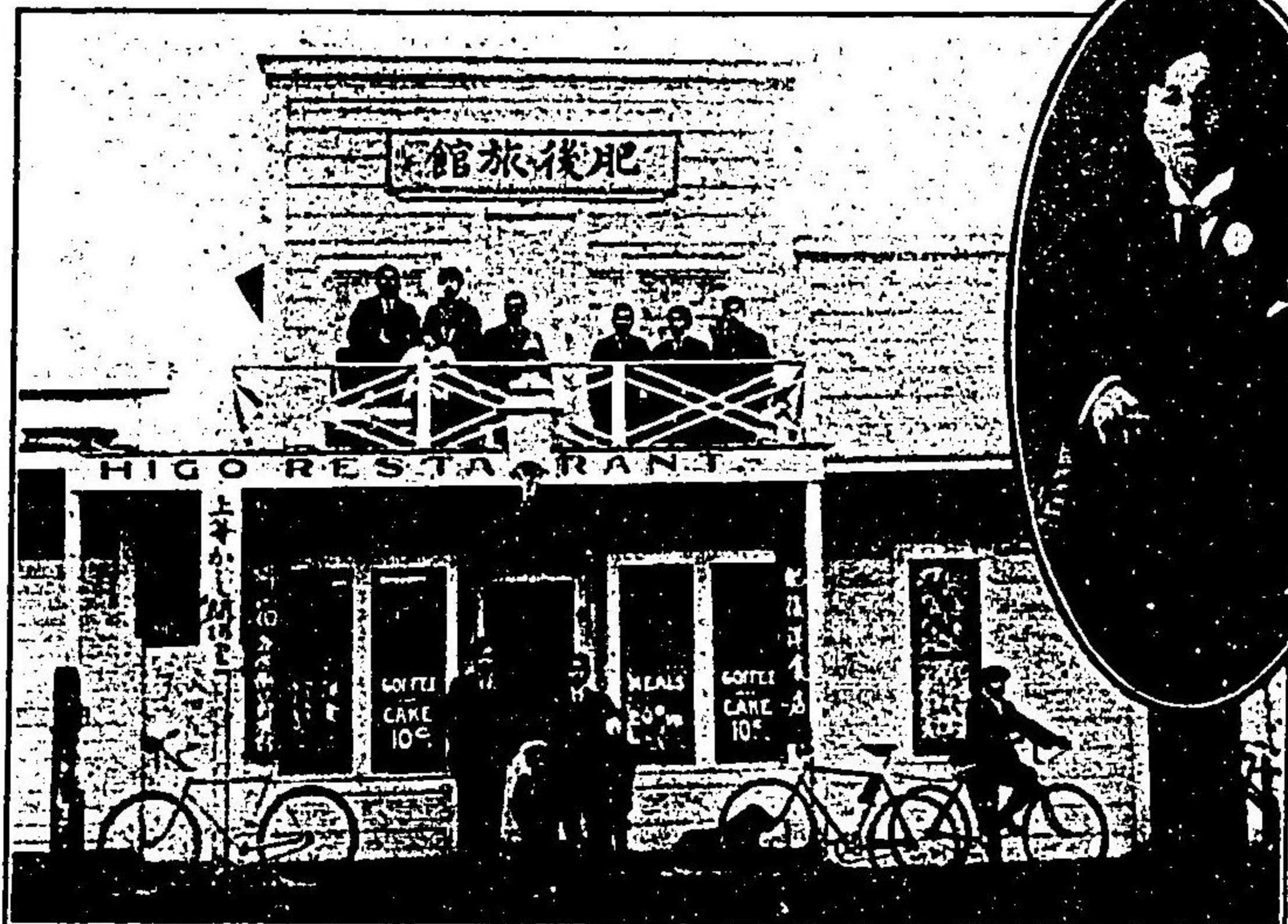
吉 仁 道 本 人 主 所 廻 製 道 本 市 ル ビ ン ツ ヲ

吉 文 越 島 主 店 店 車 轉 白 及 計 時 越 島 市 ル ビ ン ツ ヲ



(影 撮 耶 次 光 野 侯 主 館) 館 眞 寫 野 侯 及 館 族 野 侯 市 ル ビ ン ツ ヲ

店食洋及ヒ、館、族後肥 市ルビンソツツ



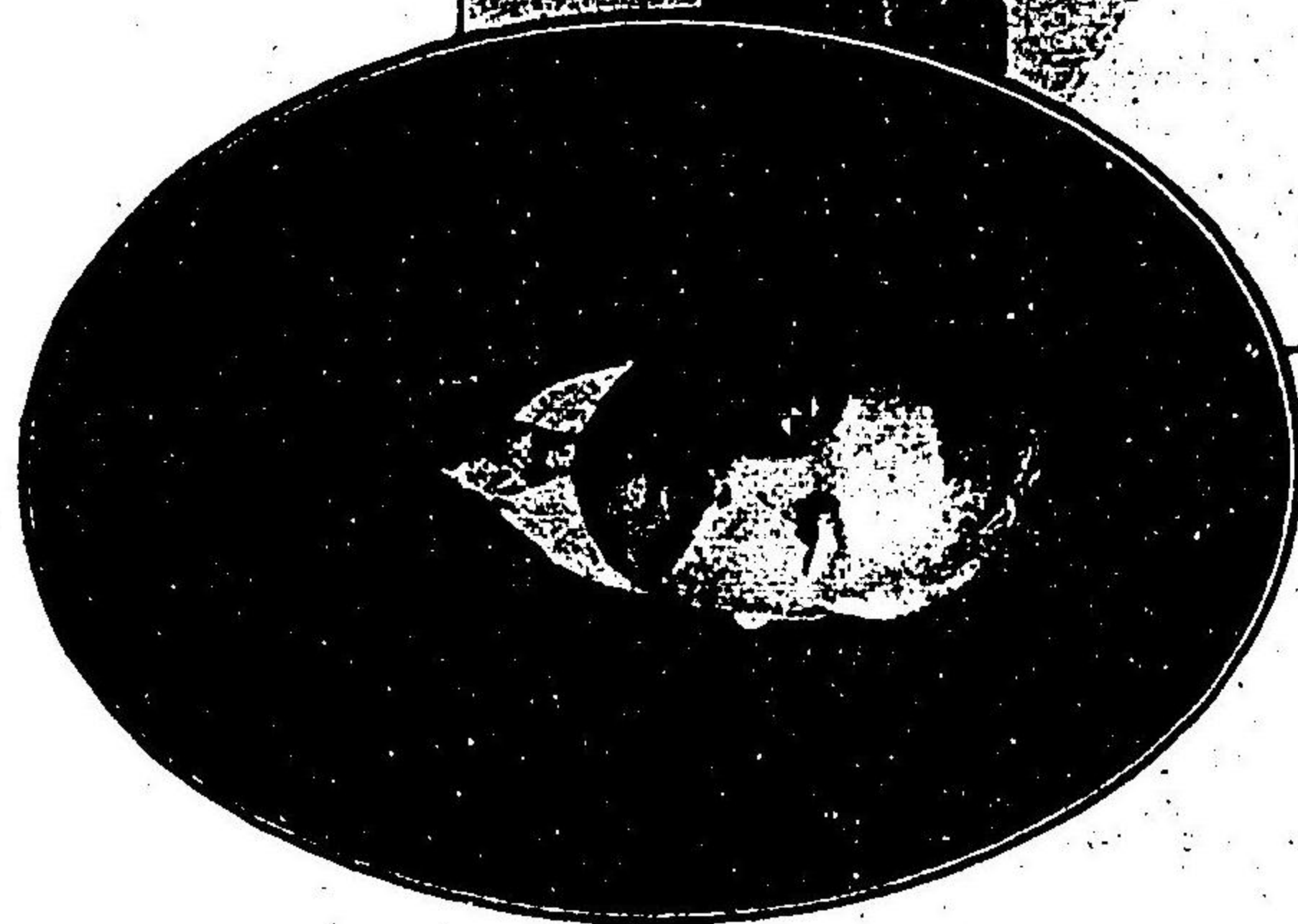
主人 藤本寅彦



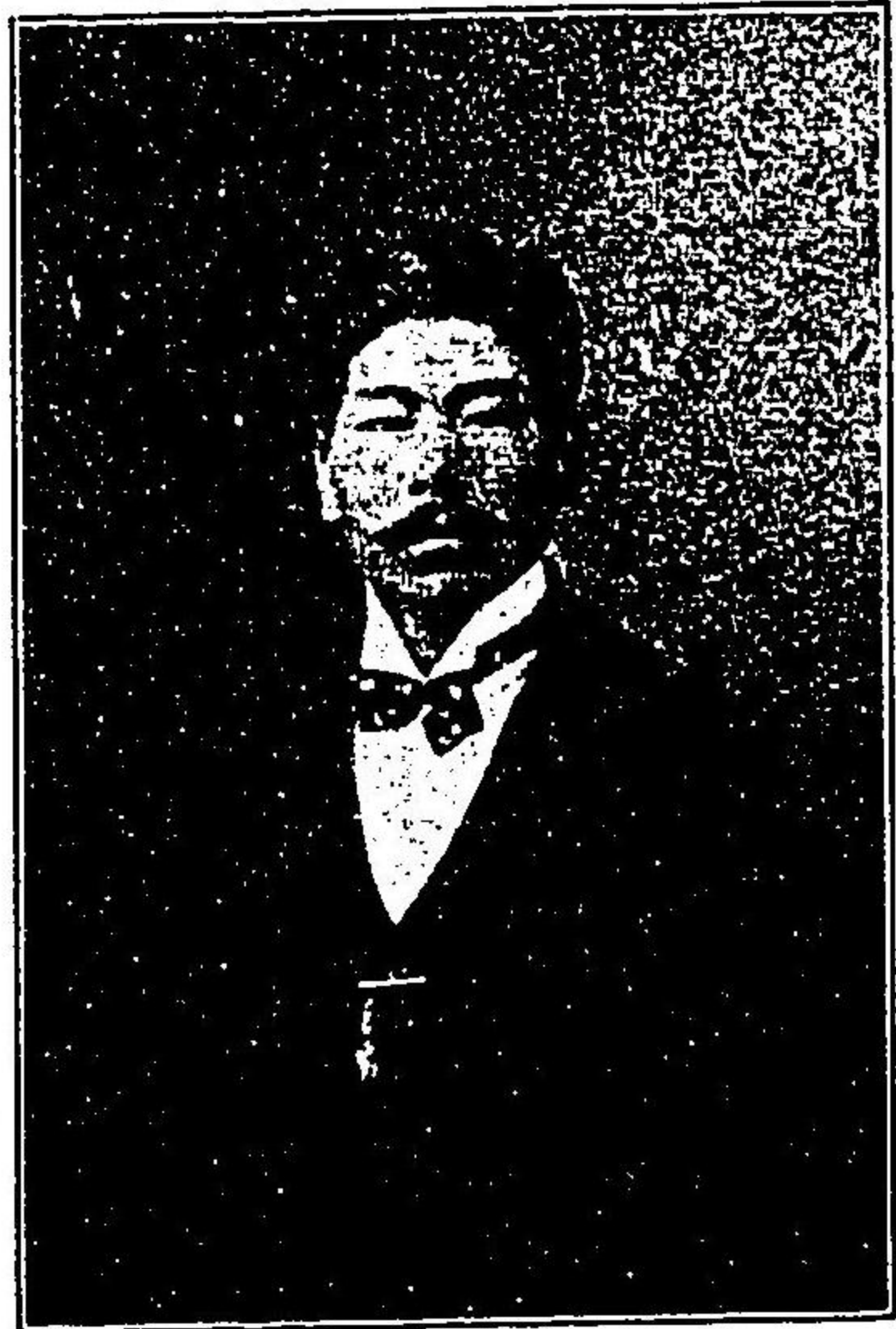
妻夫吉仙徳行 人主 館族屋黒大 市ルビンソツツ



松力尾田 亭幹と物産の前築真次親 ルビンソツツ
(のもしせ影攝察の忌回七三作村木 故)



者營經園物種 一タスリホ
吉 秀 本 増



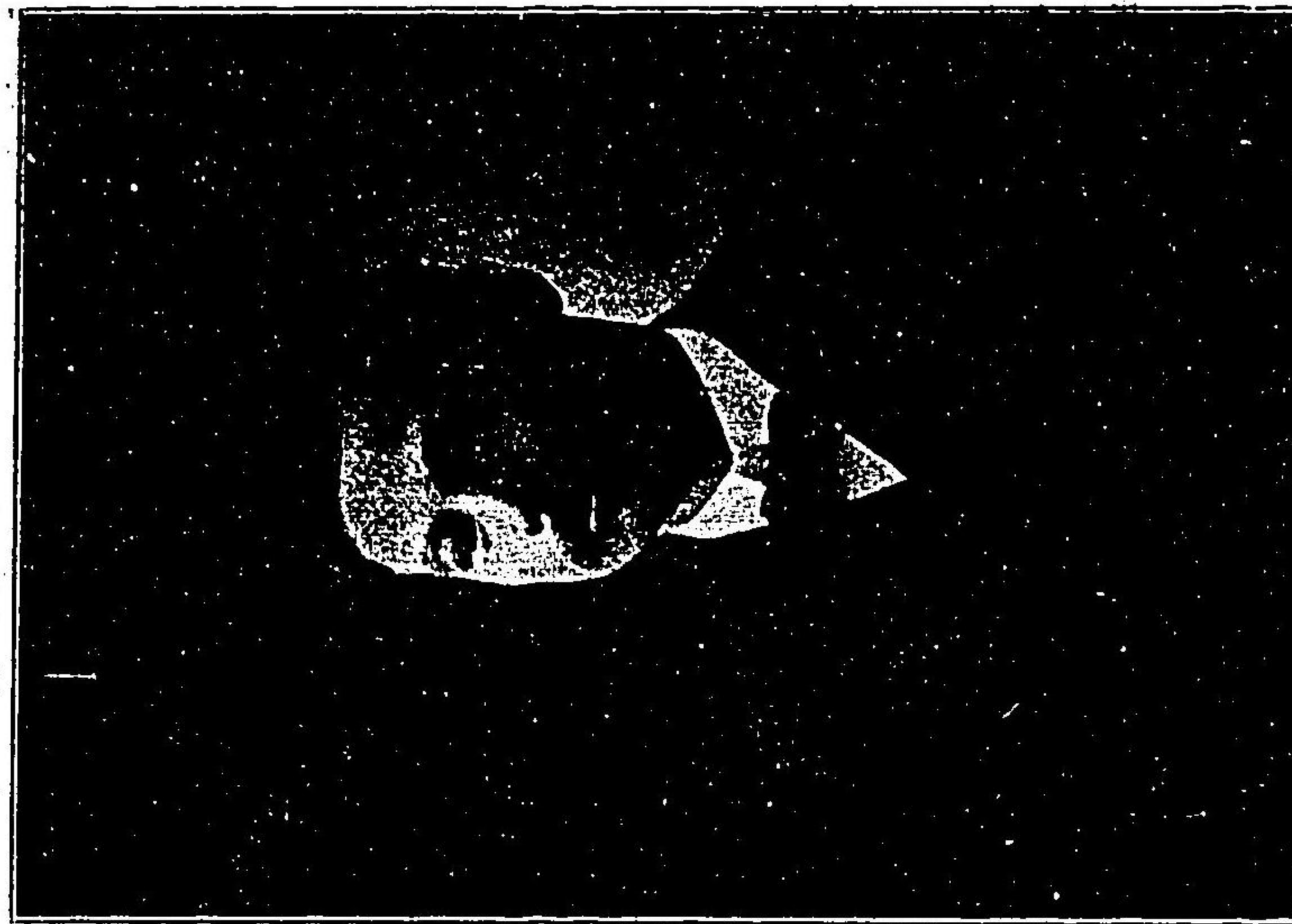
一ユニダア 近附市ゼノンサ
妻夫耶二常崎岩 者營經園樹果



松 徳 岡 家業農 スナリサ



耶四寅原桑 家業農 スナリサ



助之丈安森 主園毒大 ンオンサ



孝 正 木 藤 者約契園物種 一タスリホ

麥粉製造所あり、谿水を利用して電力を起し、規模の大なる事加州第一と稱せらる、此所を過ぎてより山崖急峻、松樹鬱茂し絶えて他の雜木を交へず、之れ余の加州に入りてより未だ曾て見ざる大深林の光景なりとす、脚下幾百仞、谿流石を嚙みて、淙々聲を爲し、翠嵐林を纏ふて、甯然たる幽景、氣澄み神爽かに、恍惚として仙境に入るの感わらしむ、已にして山中の一酒舖に達す就て渴を慰し、ビグツリー行の道を尋ぬ、一路左に入るもの乃ち是なり、更に馬を鞭て之に入る山中一小平地あり、以て馬を繋ぐべし、二三の兒童あり、指して橋を教ゆ、清溪、潺湲として流る、懸橋の高さ三十呎許り、歩いて之を渡る、日光水に落ち、水底の砂石磯の如く、水極めて清冽にして、枯木の所々に横はるを見る、橋を過れば太古の巨木、森然聳立し、樹幹蝸々、枝を交へて空を蔽ひ、絶えて日光を見る事能はず、凄涼の氣、人を襲ふ、林中に山林看守者の家あり、傍らに二三の賣店ありて遊覽者の紀念品を賣る、繪葉書、ナフキンリング、ピン刺、木皿、木杯等あり、之れ此地のレッドウッドを材料として作りたるものにして、赤色の光澤を帯び、紋彩極めて美なり、乃ち二三を求め、更に入場料を拂ひ、一の木戸口を入り、有名なるビグツリーを観る、二人の案内者あり杖を以て樹を指し、説明する事詳なり、巨木一々名を付す、ミスター、フレモントと云へる老樹高さ二百八十呎、ジャンボーと云へるは樹根恰も象の頭の如し、周圍六十呎、高さ二百八十呎あり、巨人と稱するものは、周圍六十五呎にして高さ三百六呎、壽命五千年と

稱す、ミスター、マツキンレー、ミセス、マツキンレーは樹質極めて穩健正直にして、二樹相並び
 其壽四千年と稱す、ゼチラル、グランドは周圍五十五呎にして高さ三百呎、ミスター、ルーズベ
 ルトは高さ三百四十八呎にして、前大統領ルーヅベルト氏の此深林を訪ひたる際、自ら撰びて之
 に名けたるものなりと云ふ、繩々として盤根錯節を有す、またよく名に適したるものと云ふべし、
 ゼチラル、シャーマンは周圍六十呎、高さ三百三呎、其壽六千七百年と稱す、ジュリアス、シー
 ザーと名けたる巨木は、同根十八本の樹幹を生じ、根の周圍百十呎、其壽實に一萬年と稱す、ヤ
 ングメン、クリスチャン、アンセーションと云へるは同根八幹を生じ、根の周圍八十呎、高さ三
 百呎あり、ゼネラル、ハリソンは、同根二十三幹を生じ、根の周圍八十呎にして、高さ三百呎、
 ミスター、クリフランドは周圍五十五呎にして、高さ同じく三百呎あり、其他の巨木一々數ふる
 に違わらず、觀終り案内者に謝して出づ、休憩少時、再び馬を驅て歸る、時に午後五時なり、歸途
 市街より海濱を迂迴す、サンタクローズ海濱は、砂岩石の波濤に洗はれて奇觀を爲すもの少な
 らず、或は窩となり、或は窟となり、橋となり、屋根となり、門となり、棚となる、其形狀怪奇
 を極む、夏期此邊に蛤を漁る者多しと云ふ、市街の附近優美宏壯の邸宅多く、其花園の珍草佳
 卉に富み、風流韻致を備ふる事、加州の地、他に多く比を見ざる所なり、海水浴場及び舞踏場、旅館
 の宏大壯麗なる、市街の壯觀を添ふる事少からず惜哉夕陽已に海の彼方に没し、馬脚また疲る、

あり、就て親しく是等を見る事能はず、乃ち丹氏の宅に歸りて別を告げ、午後八時、汽車にてワ
 ツンビルに歸る。

サンタクローズ郡日本人發展地の調査

サンタクローズ郡はモントレイ灣の北を擁し、南はモントレイ郡に接し、北はサンマテオ郡に隣
 り、北東はサンタクラ、郡と連り、西南一帯は太平洋に臨み、州内の小郡にして面積三十二萬英
 町、氣候極めて平穩にして、北加州中最も良好なる地方と爲し、夏期海風常に涼氣を齎し、冬期
 は却て温暖なり、地味肥沃にして、莓、穀類、牧草、馬鈴薯、柑橘、橄欖、ブルーンス、梨、林
 檜、杏、桃、櫻、日本種の梅、無花果、胡桃、パシムモン、ニクタリンス等を産し、就中林檎の
 産出多く、其品質最も佳良なりとす、日本人發展地としては、ワツンビル、サンタクローズ、
 サンオン、ポールダクローキ等あり。

ワツンビル

郡の南境、河流の沿岸に位置し、市街整頓して、諸般の便宜備はらざるなく、
 氣候適宜にして海濱に近く、學校、寺院、商店の完全美麗なるもの多く、人口凡そ一萬を有す、
 日本人街はメイン街の東端より、河を超へてモントレイ郡サンオンロードの一端に開展し、支那
 人街の一部に參入す、附近に同胞の葎及び林檎園を経營する者多く、市内及び附近の農園に居住
 する同胞千二百八十人、農園多忙の時期に於ては勞働者の新に入り來る者、千四百五人に上る事あ

り、此地方に於ける梅園及び果樹園は、十中の七分は日本人労働者の手に依て經營され、其勢力頗る大なりとす、從つて市内に於ける諸種の營業また盛にして、日本人團體八、新聞支社三、食料品及雜貨店四、旅館及下宿屋一〇、料理店五、洋食店一、床屋四、球突場六、日本湯屋三、西洋湯屋一、時計店三、寫眞屋二、ステージ二、洋服店二、洗濯所一、靴屋一、豆腐屋一、自轉車店二、菓子屋二、醫院二あり。

△ワツソンビル日本人會 ワツソンビル、サンオン、アプトス、バハロ、アロマス等の部落を包有し、現時百人餘の會員を有す、會員は會費として一ヶ年金壹弗を納む、會長に井上龜一郎、幹事に殿村碩亮あり。

△ワツソンビル佛教會 明治三十九年五月の創立にして、明治四十年貳千弗を投じて、敷地を求め、四十二年四千弗を以て佛教會堂を建築す、現時五百名の會員を有し、毎月貳拾五仙の會費を納む、開教師は、新潟縣人井上盡奥にして、曾て高輪佛敎大學を卒業し、三十九年渡米し、四十年三月現地に就任す、會堂の規模は、布市佛敎青年會堂に次で、加州日本人社會に於ける共同建築物の大なるものに屬す。

△日本人長老教會 明治三十六年三月二十一日協力教會なるもの起れり、是れ長老教會の始めにして、稻澤謙一最初の牧師たりしが、稻澤牧師の羅府に去るや、一時牧師を缺き、明治四十

一年十一月、土佐の人吉村末吉を聘して牧師と爲す、吉村牧師は仙臺東北學院の出身にして、曾て仙臺市日本基督教會の牧師たりし事あり、教會は、地所及家屋を所有し、其財産額參千餘弗なり、創立以來の受洗者五十名なりとす。

△會社及び俱樂部

日本商會 資本總額貳萬弗の株式會社にして之を八百株に分つ、明治四十年十二月の創立に係り、主として日本人に對する食料品及雜貨の販賣を爲すを以て營業の主目とし、開業以來營業の成績最も著しく、第一期に於て、年一割六歩の配當を爲すを得、爾後年一割二分を配當せり、一ヶ年の總賣上高六萬弗内外にして、社長を井上龜一郎とし、副社長を田中辰次郎、支配人を香川俊夫と爲す。

親友俱樂部 ワツソンビル日本人社會に組織せられたる一種の労働者組合にして、其名は俱樂部と稱すれども、純然たる事業組合の性質を有し、團體自身は土地の貸借、農園の請負、及び簡單なる労働者の周旋等を爲し、以て労働供給の緩急を制し、一般の利権を擁護するにあり、部員は同等の權利を有し、毎年俱樂部の經費を負擔するが爲めに各四弗の俱樂部費を納め、幹事は全體の事務を支配し、労働賃金取立の責任を負ひ、其報酬として俱樂部の關係せる事業より生ずる収入の五歩を收むるものとす、部員にして俱樂部の借地を小作するものは、俱樂部費

の外、作物收穫の百分の二を俱樂部に納入するの義務あり、此俱樂部は大阪府の人木村作三、配下労働者の爲めに之を計畫せるものにして、明治二十六年十二月を以て創立せらる、已にして明治二十九年七月、一家屋を借りて、事務所及び寄宿舎を設けたるも、翌三十年八月失火のため全焼に歸し、更らに一家屋を新築して、始めて親友俱樂部の名を付するに至れり、此新家屋は加州日本人の建築せる最初の建物なりといふ、已にして木村の病を以て死するや、東吉見を経て、現時の幹事田尾力松に至れり、現時部員二百人あり、役員の名は左の如し。

(幹事) 田尾力松 (評議員) 渡邊三郎 田岡高次 神垣喜代松 助重久作 吉村虎松

黒田仁藏

日米俱樂部 明治三十六年山口縣人東鐵太郎の創業にして、現時百十名の會員を有す、事業の性質は親友俱樂部と全然同一にして、東は曾て故木村作三の事業を助けて功あり、木村の死去するや一時親友俱樂部を経営せるも、後ち自ら日米俱樂部を組織するに至れり、現時の役員左の如し。

(幹事) 東鐵太郎 (評議員) 福本與之助 海田利作 田中嘉人 土井岡善之進

小川武一郎

共益俱樂部 明治三十七年十月の組織にして、始め四十名の會員を以て起り、現時百五十人の

會員あり、事業の性質及び諸般の規約等親友俱樂部、日米俱樂部に同じ。

(幹事) 平林利作 (評議員) 長井多五郎 加藤泰十 寺尾中太郎 石田清一郎

近末龜太郎 平林謙次 平林利一 重富竹四郎

日本俱樂部 明治三十七年五月の創立にして、會員百十名あり、始め田中幸右衛門の創立せる所なりと云ふ。

(幹事) 松岡逸人 (評議員) 松岡俊之助 佐々木儉之助 三河嘉十郎 今本太郎吉

河原彦太郎 西河甚太郎 丸森壽平

△新聞支社 日米、新世界、桑港新聞各支社を此地に置く、各支社の主任として、日米に安井關治、新世界に殿村六水、桑港新聞に福本穂三郎あり。

農業方面の調査

此地方に於ける日本人農家の主産物は苧にして、明治四十二年の取調に依れる苧耕作者は實に百三十戸以上にして、其作地面積凡そ二千英明にして、一ヶ年の産額實に貳拾萬弗に上れり、土地所有者一名、所有面積十六英町、現金借地農家三十二組、借地面積千三百三十三英町、歩合耕作者六十二戸、其借地面積五百〇一英町半、受負耕作者六十名、其借地面積三百五十九英町半あり、土地所有者としては、福岡縣人宮崎恒太郎の林檎園十六英町あるのみ、就中間體的の事業として

見るべきもの左の如し。

△ワイ興産社 山口縣人山本又雄、同平雄、同種一、富田太郎一、村上熊次郎五人の共同事業にして、資本金を壹萬貳千弗とし、現時荷園五十英町、豆三十英町を經營す、借地料は一英町參拾弗として、貳千四百弗を拂ひ、十馬力の揚水器械（價格六百五十拾弗）を据へ付け、參百弗を投じて井を掘り、千五百弗を投じて、高架水渠を架し、家屋三棟を建築し、使用馬四頭を有す。

△ゼー、エス、興産社 福井縣人堀岡音吉外四名の共同事業にして、資本總額壹萬參千弗、明治四十一年より十五ヶ年を限りて借地契約を結び、五十英町の内四十六英町を借とし、四英町を玉葱とす、借地料千弗、水代一ヶ年七百五十拾弗、農具五千弗、家屋八棟此建築費千貳百弗、馬六頭を使用す、明治四十二年度の收穫四千三百箱にして、一箱參弗貳拾五仙を價したり。

(附) 日本人社會の沿革

明治二十五年頃、十人内外の日本人労働者ありて、此頃早くも支那人街に、おつねと云ふ日本人醜業婦ありしといふ、此際大阪府の人、木村作三なる者、配下に日本人労働者の一團を率ひて、アブトス方面に於て、伐木事業に従事し居たるが、漸次にワッソンビル地方に來り、白人チャールレー、ロジスの農園に入り、始めて日本人労働地の基礎を爲すに至れり、當時山口縣人福本與之助、東鐵太郎等また其の配下として此地に來り、漸次日本人社會發展の濫觴を爲すに

至れり、已にして明治二十七年頃、農園の労働漸く増加し、二十八年より三十年に至りては諸所の方面に大なる農園の受負事業を爲す者を生じ、明治三十年木村作三は、部下と協議して一の労働者組合の如きものを組織し、之を親友俱樂部と稱す、翌三十一年西村仙左衛門、ハプキンの農園にて荷作を受負ひ、三十三年の頃田尾力松の弟上田某なるもの、土地を借りて荷園の經營を始め、明治三十四年に至りては、東鐵太郎、西村仙左衛門等共同して、三十英町の現金借地を爲して、荷園を經營するに至れり、之れ日本人社會借地農家の嚆矢たり、已にして此年五月木村作三の病死するあり、是に於て木村の配下にありたる、東鐵太郎、代りて之を經營する事三年、已にして東の去らむとするや、彼に従ふて親友俱樂部を去る者多く、彼等は東を推して幹事と爲し、新に日米俱樂部を組織し、親友俱樂部は一時吉見新兵衛幹事たりしも、財政意の如くならずして去るや、田尾力松代りて其整理を爲し、日米俱樂部と并立して現時に至れり、また市街營業の方面にては、和歌山縣人松本某及び眼鏡山田と稱するもの、商店を開業し斯くして明治三十七年、金杉某始めて旅館を開業するに至れり、此頃より日本人労働者の入り來る者多く、彼等は漸次現金借地または、歩合作を以て荷園の經營を始め、更に白人と契約して林檎園を經營するものゝるに至れり、現時ワッソンビル日本人社會は、市街と農園とを問はず、加州に於ける日本人發展地の中、最も根底を鞏固にして、其勢力の大なるものに屬す。

「サンタクローズ」 基督教徒の設立せる市街にして、桑港よりの距離八十哩、市の面積十二方哩餘、人口一萬五千、モントレー郡の首都にして、北米合衆國中最も風景に富めるの地なり、電氣燈、下水工事、水道事業、公立圖書館の如き此沿岸中、此地を以て率先とす、市内に、銀行六、日刊新聞三、週報新聞三、寺院十六、公立小學校六、高等學校一、職業學校一あり、市の財産價格千〇六拾七萬餘弗にして、銀行の預金額參百四拾壹萬弗と稱す、市街は唧筒を裝置し海水を以て之を洗滌し、飲料其他の使用水は、山中の清水を引きて之を供給す、温度は最高八十五度、最下二十五度の間にありて、海濱の娛樂備はらざるなく、山中の風景佳美にして、溪流に鱒を産し以て釣魚の娛樂を爲すを得べし、海魚には、ボニタ、ソール、フランゲース、キングフィッシュ、ハリバト、ボンバノ、スメルド、ヤーローテール、シーバス、ラツカ、鮎、鮪等を産す、エスピー鐵道の廣軌鐵道及び狹軌鐵道の二線を通じ、附近の地みな肥沃にして、果樹園あり、葡萄園あり、山中の樹木には、松、樅、レッドウッド、スプルース、檜、マドロン、等を主とし、材木製造所の如き其規模頗る大なるものあり、日本人の此地に在住する者凡そ八戸、其内土地所有者二名、山林所有者一組あり、市内の營業者としては、愛媛縣人丹正之の經營せる、サンタクローズ洗濯所は其規模大にして、土地及家屋の購入費六千弗、蒸氣洗濯器械費千八百弗、使用人二十人内外、白人十七人を雇入れ、一ヶ年の總收入壹萬貳千弗に上れり、土地所有者、和歌山縣

人貴志好松、熊本縣人橋本卯之助の二人皆壹萬弗以上の資産を有し、兵庫縣人山本幾太郎、鈴川勇、外三名の所有する山林百七十英町にして、現時盛に薪及び材木を伐出しつゝあり。

「サンオンロード」 ソツソンビル市の東、サンオン方面をサンオンロードと名け、日本人の毎園を經營する者多く、現時凡そ三十軒の農家あり、少きは二英町多きも八英町を出でず、大抵歩合作にして、其規模小なり。

「バハロ」 牛乳業の中心にして、林檎の大輸送地なり、また砂糖大根の作地にして、之等はスプレクルス會社の製糖原料たるものなり、此地の日本人街は、ソツソンビル日本人街に包含して、一般にワツソンビルと稱せらる。

サンベニト郡日本人發展地の調査

サンベニト郡は、東はフレスノ及びマセドの二郡、西はモントレー郡に界し、北はサンタクラ、郡に接す、サンオン及びボリスターの地、日本人の在住する者あり。

「サンオン」 野菜及び果樹園多く、人口千を有する小都會なり、始めエスピー海岸鐵道線路の開通せざる前は、サンノゼ、ロースアンビルス間の重要地なりしが、近時海岸線路の開通と共に、多少の衰退を免れず、市街は山を遶らし、此附近に、サンオンバブチストミツシヨン、メキシコ時代に於ける知事の官邸等あり、此官邸は、メキシコ戦争の際メキシコの大將セノル、カストロ

のメキシコ軍を指揮せる本營たりしと云ふ、千八百四十六年五月、船長フレモント、此地に兵を留め、メキシコの將軍、カストロと對陣したる古跡あり、此地は、林檎、梨、辛菜、馬鈴薯、玉葱、苜蓿、アスパラガス、豆、砂糖大根、ブルー、等を産出す、牧畜及び牛乳業また盛なり、明治二十九年の頃、廣島縣人谷村吉五郎等此地に勞働し、爾後日本人の來るもの少からず、明治三十七年、谷村吉五郎商店を開き、熊田倉吉洗濯業を開き、上城新次郎床屋及び玉突場を開業し、近くは義太夫の師匠某女、三花亭と云へる料理店を開くあり、之れ現時に於ける日本人營業者の總てにして、農業方面には、現金借地者九名、借地面積二百七十英町、請負耕作者十二名、作地面積七百五十六英町あり、概ね海にして、宮崎恒太郎、森安丈之助等就中其事業の盛大なるものとす。

「ホリスター」ガビレン山脈に添へる美麗なる都會にして、最も近時の發達に屬す、街樹繁茂し人口二千、邸宅の美なるもの多く、郡の首都にして、監獄及び裁判所あり、土地膏沃にして、玉葱、蕎、砂糖大根、ラヂシ、スイートピー、アスターの如き最も好く成育し、其氣候及び地質農産物種子の培養に適す、平素日本人の在住する者二百人内外あり、現金借地者五名、借地面積百八十二英町、歩合耕作者六名、耕作地面積百七十五英町、請負耕作者一名、耕作地面積四百英町あり、始めて日本人の此地に入りたるは、明治四十一年、藤本正孝此地の果樹園に、日本人の勞

働者を供給したるを以て嚆矢となす、現時市内營業者として、和歌山縣人岩崎壽吉の和歌屋、滋賀縣人横山與三松の經營せる日本旅館及び和歌山縣人森清助の經營せる和歌屋玉突場あるのみ。

サンタクローズ郡及びサンベニト郡成業列傳

△井上龜一郎 廣島縣神石郡永渡村の産にして、明治九年生る、曾て故國にゐるや夙に地方の實業を振起せんと欲し、特に身を蠶絲業に委し、頗る其業に通せり、明治三十六年渡米し、桑港に上陸して、アラメダ郡にゐる事一年、後ちワツソンビル地方の有望なるを見て、永住の計を畫し、桑港の日刊新聞新世界の支社を創めて、地方操觚者たるの任を勤め、率先して社會の風紀を矯め、銳意産業の振興に盡す所あり、由來ワツソンビルの地たるや、支那人の地方に勢力を扶殖する事深く、日本人勞働者の數増加するに拘はらず、市街營業方面の利益は、常に彼等の壟斷する所となり、日本人社會の利益は、之が爲に滅殺せらるゝ事少々に非ず、彼れ事情を有志に説き相謀りて一の株式會社を設立するに至れり、之れ明治四十年十二月にして、之を株式會社日本商會と稱し、推れて社長となり、第一期の營業に於て、優に一割六分の配當を爲し得たりと云ふ、之れ在米同胞社會株式會社の營業としては、稀有の成績なりとす、現時推されて、華村日本人會の會長たり。

△東鐵太郎 華村日本人社會の元祖と稱せられたる、木村作三の死するや、當時の元老として先

づ指を屈するもの、之を東鐵太郎と爲す、彼れは山口縣玖珂郡伊陸村の産にして、安政五年生る、明治二十一年布哇に渡航し、居る事四年、砂糖耕地に勞働して貯蓄する所尠からず、明治二十五年桑港に上陸し、間もなく布市に至り、居る事二ヶ月にして、更にサクラメントに轉じ、僅かに一週間にして、去てワツソンビルに來り、大阪府の人、木村作三の部下に屬し、材木製造所に働く事、二ヶ月、後ちコルリトスの製紙會社に入り、勞働する事三ヶ月間、爾後諸所に勞働して木村の信用を得る事深く、明治三十年の頃、木村の親友俱樂部を組織するや、其配下として畫策する所少なからず已にして明治三十三年、木村の肺患に罹りて死するや後事を彼に囑したるを以て、彼れ其志を繼ぎて、親友俱樂部の經營に任ずる事三年、當時俱樂部の事業大に振ひ、部下三百人を有し、一時ワツソンビル日本人社會の中心と爲れり、後ち明治三十六年三月別に日米俱樂部を組織して、部員の爲に推されて幹事となり、以て現時に至れり、日米俱樂部は、彼と同郷なる山口縣人頗る多く、其基礎鞏固にして、地方の信用を有す、現時ワツソンビルに於ける日本人の勢力は明治二十五年の頃に於ける彼等の事業に淵源するものにして華村日本人社會が彼を推して地方の元老と爲すもの固より偶然に非ず、現に華村日本人會の評議員にして、株式會社日本商會の相談役たり、長男慶一は、明治十三年の生にして、夙に渡米して父の事業を助け當時砂糖大根園の受負業者たり。

△田尾力松 廣島縣安藝郡大江村の産にして、明治元年生る、二十六年ビクトリヤに上陸し、シャートル、ポートルランドに至り、バツフス及び荷蘭に勞働する事半年、其れより桑港に至り鐵道工事の勞働に従事する事三年二月、此間終始一ヶ所に留り日給壹弗拾五仙を給せられて、毫も倦怠の色なく、人以て彼の勤勉力の衆に卓れたるを稱す、已にしてサクラメント川下地方の農園に在る事四ヶ月、其れより櫻府に出で更にフランスノに至り、葡萄の摘採に従事する事三ヶ月、當時弟千太のワツソンビルに在りたるを以て、來りて木村作三の部下に屬し、種々の農園勞働に従事して、漸次地方の勞働に熟し、木村の病を以て死するや、彼等勞働者の團體たる親友俱樂部の事業、一朝にして一大打撃を受け、木村の後継者たりし東鐵太郎は、配下の紛擾に堪へずして、別に同志を率ひて日米俱樂部を組織し、東に代りて親友俱樂部の幹事たりし吉見新兵衛は、多くの負債を作りて、木村の遺業を維持する事能はざるに至り、俱樂部内の人心適歸する所を知らず時に吉見の共同者たりし中村榮等、意を傾けて、田尾に説く所あり、是に於て彼れ遂に意を決して事業の責任を双肩に擔ひ、中村榮を顧問として、以て親友俱樂部の幹事たるに至り、現に二百人の部員を有し、華村日本人社會に於て其名を重せらる。

△福本與之助 山口縣玖珂郡和木村の産にして、慶應三年生る、明治二十四年布哇に渡航し、居る事一年にして、翌二十五年十月桑港に上陸し、間もなく、フランスノに至りて、葡萄の摘採に勞